里見八犬傳

第八輯

巻六

特別
へ13
4304
9

八13
4304
9

新奇八犬八行傳

曲亭精著

二四篇

柳川重信画

紅毛狗形小自和狗豢以魚肉琉球芋等物若以慕米漸肥大而不宜今使柳川氏画焉者寫生縮圖毫莫有差錯

第八輯下帙

文溪堂印發

〈2001-311〉

八犬傳第八輯卷第五附録

饗庭文庫

江戸麻布長坂のやとりのまへ穴をいと名づる地名ありしを知ざるものゝ沾凉ゞ江戸砂子ゐ雌狸穴と書ゝ雌狸をマミとゝふ義ハ何ゐ據まるもあるかゝ貝原益軒の大和本草ゐハ貒をマミとも篤信云マミミタヌキトモ云野豬ニ似小ナリ形肥テ脂多ク味ヨクシテ野豬ノ如シ肉ヤウラカ也穴居ス其四足ノ指各五恰如人手指獵師穴ヲフスベテ捕之行クコト遲シ獾ハ貒の類ナリ狗ニ似タリ並ニ穴居スとゝ又本草綱目五十一獾の下ゐ稲若水和名を剰入くマミとも李時珍云貒豬獾也獾狗獾也二種相似而畧殊狗獾似小狗尖啄矮足短尾深毛褐色皮可為裘領とゝ。かゝども和名をマミとゝふ獣ゝ。孟軒若水の二老翁一ハ貒をマミと訓一ハ獾をマミと讀ぜゝ訛ゐよりて訛を傳ふ世俗の稱呼ゐ從ふのの欲今按まるゐ獾ハ和名鈔ニ載ぜも。貒ハ和名ミなり。和名鈔毛群部

猯の下ふ引唐韻云猯音端又音二テ井ノコ旦和名美似豕而肥者也本草云一名獾
狸散也音。といふ。獨野必大本朝食鑑ふ和名鈔を引く。猯をミと讀こう。必
大云猯頭類狸狀似小狸體肥行遲短足短尾尖啄褐色常穴
居時出竊瓜果而食本邦處處山野有之人多不食惟言能治
水病予昔略見狀然未試之則難辨分といふ。もまらの諸說を參考
ふ。近來世俗のミとふ獸ハミを訛まふ似こう。是則猯と又田舍兒ともを
ミタヌキとふその面の狸ふ似こまぐ何まこことのこハ唱ようこね故ふ或ハマミと
ひ。或ハミタヌキとふまあ〜んかまぐ麻布ふまみ穴もむ〜猯の棲こう餘波
ふ。遽莫猯ハ大獸ふあ〜ぎ〜ぎ〜その穴ありとも。地方の名ふ呼べくもあやえも。
且猯をミタヌキと唱ふ本つく所あり。是その頭の狸ふ似これば又猯をマミと唱ふ據
とろふ。何とまぐ猯ふ真偽の二種ふ因く耳案まふ麻布ふまみ穴ち。

元来猯のふあ〜で。鼯鼠をこん狄とふ。むり鼯鼠ハ和名モミ一名ハムサ
ビと和名鈔鼯鼠の下ふ引本草云鼯鼠上ノ音カ水ノ反一名鼯鼠和名
毛美俗云ケンメーエンナウニノカタチトクミサル無佐佐比兼名苑注云狀如猴而肉翼似蝙蝠能從高而下不
能從下而上常食火烟聲如小兒者也かくまぐ鼯鼠の和名ハ毛美ふれ
どもいとぬくこう。むさびとのこ唱こうふ歌ゆをモミとうみこうの形〜萬葉集第三
むさびハホねまうとむとあ〜引の山のさつをふわひふけうもとこあるふて知るべ〜。あうま
ども。古言ハヨヌく田舍ふ送るそのあまぐ昔東國ふてハ鼯鼠ををさくうみとうひ〜
あ〜んその證ハ今も日光山の頭ふて鼯鼠の老大あるのをモモンジワアといこうモモンハモミの
訛りこグワアハそぐ鳴く声あべ。さてあの鼯鼠を下野ふてハりこんぐをあと唱ハ武藏ふてを
まみとのこあ〜ん。然こぐむ〜麻布長坂のほこう人家もあ〜で樹立ぬく
昏もいと鬱ゆける比ハ。鼯鼠あこの栖ふ處こ故まみ穴の名の遺まこゆ今も世人の

憂邦婦徳
心猿美
芟侮老消
憑駿才
雕
河鯉權左守如
蟹目前
かるめのまへ

頭をちらはけのけ九ゝ
雲行七ツ九ツ
魔魅のきろ
冠松鬼四郎
魔魅吃驚鯉坊

貓兒可愛
木天蓼柯刀
犬子驚看匹夫
欺黠豪
永堪世智介
穂北小才二
石亀屋
嗚呼善哉

仁田山晋五
五十子
善惡平

小児を攫まふ。ぞくぞくんぞうめとのふこ船鼠の形ハいとも〻。なるべ穴のなまびまみ穴の名の高をけるも。今ハこの穴ハ。是等ふよりてそ〻ハべ縦その穴ハ船鼠をの棲さるとあるべとも。いとおそるべ穴穴なまべ土俗ことをとりこ穴とも又訛りてまみ穴とも呼ぶ〻るふわゝんかゝまみ

即ち則魔魅ふも通ひそ是おそるべ穴の義こり今あとふ〻ハ貓をまみとのふ〻ハ方言を狄知ねども考る所ハ。宝永七年の夏両國橋の頭ふ〻親せる子年。然るを若水の獾をまみと和訓せ〻を貓と獾とハ似るものふて共ふ穴居を做をなを貓の和名をミとのふを對へく獾をまみとのふ。

まゝらべまみのまハまみふて貓をまゝらべの義をべ又愚説の船鼠ハ鼠類へ穴居をる物をを怕るべ穴の義ふ憑らべ穴の名をりとをべ麻布をまみ穴を真名ふ書べ鼬鼠ふ作りて怕るべ穴の義とをきべ女當をべ江戸の地名を誌るめふかゝりの考べ面をべ送憑のるををを抑本輯第七巻ふまみ穴のるわれべ此ふ愚考を附録ゝ下帙の引ふ代るのゝ

天保三年壬辰夏五月中浣

甚衣笠漁隠識

美濃屋

南總里見八犬傳第八輯卷之五

東都　曲亭主人編次

第八十回

得失地を易く勇士厄ふ遇ふ
片袖禍を移して賢女獨知る

復説犬村大角ハ犬飼現八共侶ふ岩ひかけをく荘客们ハ推捕稠て殺んとせ〻ある何事ぞとだらふ驚ハ元ぐら些も怯まぬ齊一声ゝ立て人々疎忽の所行をとなせそ俺们ハ是旅人へ素より怨も無ものを認錯ぜば後悔あらん。とのゝ〻ぞ叮ぐ〻ハ冒々と俱ふ顧くそぶ中ふ先ハ找ゝ一両を名持る棒を突立て仡と疾視ゝ冷笑ゝ。噫偷児の悍々ハくも這期ふ及び分説叮んや。鄙ハ若们ハ窮る衣箱ハ其首ふあり遂ふ免ま反天四訓ゝ元とのふて快く綁縛の素ふ被らべるハ幸ひる呵責の苦痛とあるべ〻れ。然ぞハ目ふのめアせんぞと勢ひ猛く罵るとも然ゝも騒ぬ二犬士の面魂の逞しげるふ腰ふ掐る両刀まへ

叮ハ清人の俗語ハ説ふ多く用るの叮ハ聽字の俗省字字書ふ叮ハ正字通叮字の注ふ丁ゝ方

本支の程を料り難て左右をくん金打も蒐らぎ。捕稠るのまゝれば既ふと便りを
ゑる。大角い徐ろふ又衆人ふらも對ひて人々大く課ぎ。俺ふよりと受ねか。俺も亦向の
程穂北頭の驟雨ゆ逐れて連ゆ走り。折背ふ走る行裏を盗児ゆ掻攫れて趕
ち這里ふ来ければぞ支黨ゆ。ば。紀癖者這衣箱ふ尻を撲て堤の上ふ憩ゝをり。
登時此彼両個の賊ふ近つく俺身を寄せ。ぞ。推並び力を勠ゑ。且く挑戦ひ。と矢
庭ゆ蹴倒。投伏せて立び駁ゆんと刀の柄ふ手をを掛。勢ひを怕惑ひ共倡ゆぞ俟
河へ滾落て泅ぎて立明岸へ逃亡ふ。ふるふかの折俺ゆ行裏ふ憶ゆぎ河へ蹴落せ。
欲又盗児ゆ掻攫ひさりて逸ふる欲あらびゆて。迹ゆ残ふ俺東西ふ這衣箱のを
ふ死とふへ亦現ふも衆人ふらも對ひて各々あれを听ゆて欲俺ふ聊足を傷りて後れふ
ければ那期ふあゆぎ。支果て這里へ来ゆければ送恨ゆかふふ。と熟思へば這衣箱も
那盗児们ゆ遠ふ里人の家ゆどふ。窃取てゆ来ふけると重くゆあふけ。ふ即ち後

を一火家を俟ふ欲是も亦知ふべらび主を索ねて返さびゆと俺も必ば俺友も心ゆ
惻隱の誠ふ然りも浅ふ。現俺ゆ東西を定綱れも人の東西を喪ひゆその情等ふ
ゝ死ゆ快近邸ふ赴てとりを報て主あふべねて来べと商量の折ふけるふ果りと違ゆぎ。
各々も亦那盗児を趕て来ゆる事情を既ゆ推量ゆられゆ情由ゆ汎听ゆ俺们を疑る
ふ田舍児の思ひ足ふげふ所以ふべ。任ゆまゆ言語を殷ゆりも聴れゆふ是非ゆ及び
ゆ武士ふるのゆ盗賊の濡衣を被せられて阿容々ゆとして甲夫野人の縛を受ゆ死ゆ俺们
二名死ゆとて。大刀折れ勢ひ究ゆまゆ駁ゆび千軍萬馬ふるとも敵ゆ難けて疑ひふ。
然ふと況ゆ農夫野老の才ゆ十名十五名駁ゆ倒さんいと易ふ可惜命を隕さんとふ。
疑念を霊弃て這衣箱を合ふと去び俺们ゆ素ゆふ望む所ゆ迷ひを取ふび必死ゆ覿
面一人ふるとも恙ふく選んと思べふゆ然でも挑む欲爭ふ欲と敦圉懲ゆ勇士の奮激
刀の瑛甘げゆ寄らび駁ゆんと睨へふる氣色ゆ憚ふ壮佼们ゆれへとゆふ口隱ふゆ齊一

後方とぞ入れ逢ひ找め那口車ゆゑ乗せられて逃走。弱胥推て三隊の壯佼ども執念深く賈めくのを爭ひ果てゝ中に一両名ばかりの貌のよろしきを罵り已ぬ壯佼們を推鎮め耳ぶ〳〵退のけるを一反だに大家其首を立聚ひ額を集めて商議の折々這方とするもあり頷くもあり笑もあり既に商議果て畢計莊客二名ばかりを衆人は立別れ穂北のゝ走とけり登時壯佼們を鎮める件の莊客二両名堤の下を找ゝ来ゝ三大士ふたり對ひて微笑ふゝ小胥を屈めて刀祢達允さゝのか理も非も分ぬ壯佼們が宣ふを太く恐れを住ぬと勸解れば現八大角は共侶は駄頭て仆ぶ汝達俺們がひつるゝを信ぶ給ひて食疑ひを釋れ欲と問ひ給ふて衣箱とりて来る盜見の吉の趣宣ふを疑ひて又云云とひ給ふあ〜ねどいふせんとの衣箱は小可們が衣裳ふゝ是東人の東西ゝ那盜見們が何の間ふ狡駝搭て逃げゝを趕ども及びでゐを空うせば術もゝ那盜見を捕捉ぎゝて懲ふゝの皮箱をのゝ含めて還らぶ東人が俺們をゝ疑ぶ給ふ刀祢達小可們と俱ふ東人の宿所ふ到りゝ那盜見の為体を面前ふ說知めゝ初よりゝ小可們が竊ぎりゝ食得せられん這義を業引ゆゝかゝと憑むを現八うちゝ笑て宿所ハ這里より遠ゝ原是豪家狡村長狡從類ヨヌくあるゝ自尽は賊の入ゝを知らぬ是ゝの東西を穿鑿ゝハ故ある狡甚麻ゝと再問ぶ給ふ小可們が東人ハ穂北梅田柳原這三郷は名も高ゝ氷垣殘三夏行と唄ふ做を御士をゝ内儀ハ是裏ふ世を去りて家ゝハ重戸と喚ふ做る只一箇の女兒あり三稔ぶりさゝ比落鮎餘之七有種とふ壯佼を女婿ふゝ田園の業を任用ゝを身ハ宿所を在る甲斐ふ今朝も背門ゝ積藏ふ鼠の入りゝを空ゝ空ゝ空ゝ寒ぶゝ僮僕們ふ吟咐て内ゝ東西を含ゝ出さゝて修復ふ時ゝ移りゝ生平より後れ呑飯を皆たゝべんと思ひて跡ふ心ゝ付ゝ雲妾時庖厨を退ゝ折を覗ふ盜見が背門よりゝ潜び入ゝ出ゝ措ゝ衣箱を駝ゝ逃ゝ一程ゝ一個の小廝が厠ふゝ立ゝ出ゝ盜見ハ這声ふ驚ゝ衣箱とゝ尽其首ふ

うち捐て慌たりけん背門へ走らで庭を逃るう枸橘の藩籬を潛りて逃亡る程もあらぬ人も咱も咸庖湢より走り来て容子を問へば盗見の逃去て東西も取られぬ折から猛可ふ降る雨よ出せ東西を濡すとくるふく拾ひ積藏へ納めて衣箱の五箇あるうちふ四箇あるを一箇は足らぬ走るふけり原来件の盗見は一人なれども支黨あるて他より先ふ入りこむ奴ども一箇の衣箱を背よ走り逃るるん然と知ぬ由断と聊時の後れとも遠くも走り逋蒐よと罵誤ぐ盧宅の打揮主も家頼も血眼まつく詮議と做程よ田園ふ出こ農奴們の那驟雨ふ稲刈あへも濡つかの来ふければ主人は送るく招聚ゆよと示一部を定めそが一隊を竹塚一隊は梅田柳原又小可們は千住のくを投て這首を走るを徒ふ情由でいへば那盗見を捕捉ぬ衣箱をあるかるべそを東人ふ疑れて外よ走る賊ふあらず吉又の紛れる小可們が竊て去ぬ滾を折小廝よられて忽地ふ穿數金堅ふくるーが縛徒々とのひ誘へて馳て返まつるるんと思へもせば身の與ふ小可們が東人は年老れども心ざまいと勇悍くて武藝まろ

且その皮箱ふ斂られは毋常男女の衣裳ふあらぬ鐵罪維短衣肱甲膿盾皆是秘藏武器それが一皮箱でも重價あるうちそうより重けれが那盗見が泊堪ぎたるち卸ふく謔ひるうん徒まで具ふ告ぬられるは旅ぬく刀祢を推留めく宿所へ伴ひまるまる縛皆自他の與ふ若ふ彼ふ旅ふ知ぬ既ふ是ぬあ趣を注進の與壮佼三名宿所へ還るうのうと訛音ふ詩かへたる長談を稍ぬ果現八ふ大角をうるうて大村あれを宇ふ狭這輩の所望の一條餘ぬ情由まあらばやとへば大角黙頭て現那程ふいるを推辭ば後暗ぬ似ふ素ふ急ぐ旅ふ非如十町二十町立戻るとも厭ふ足らぬと應て躱て理會の莊客們ふち對ひく趣を意を沒ふ那盗見を認るふは便是俺が奪れ行裏衣ふ食ふも復さく人の東西を食ぬ止めるそうふ後走ふ各々の證人ふ憑るふ寔ふ烏許の所約ふれども前路を急ぐ旅ふ行ぬそを左も右ものふ這衣箱を主人の東西と正可ふ認る證據ふあら什麼汝達は從類狡ふの名ふ物ふ示れを問れて勢ふ西個の莊客迭ふ答ふ宣ふ

趣理なれバ。その衣箱に漆繪したる杭羽の蝶ハ。酒近氷垣が家の花號紛れあらずといふめれバ。丈
小可們ハ那家に年来仕る老僕也。他ハ小才二。小可ハ名を世智介と喚るゝものぞ。却東人ハ這
頭也。大かたならぬ威徳あり。これによりて奴婢們ハいふもさら也。穂北梅田に世渡るもの。皆その蔭に寄ら
ぬハ稀也。當所中興開發の大財主也とて。噫益なきや。虚々と要なき辨に時の移りぬべし。誘おん
案内を仕らんといひつゝ。後方を見かへりて。貪快来ませ。刀祢達の羨引せぬかと喚べバ。大家
応と答て。堤の下に残ミ來つ。己前の無礼を陪話るもあり。然らぬも倶に笑しげに立並びたるそが
中に。従げたる一個の壮佼。堤に登りて二犬士に揖譲をしつ。衣箱を挫と駝搭て立程に。大角も
現八も倶に徐に下立けり。登時世智介小才二ハ。衆人を二犬士の前後左右に従して。氷垣の宿所
へ案内をしつ。連る路をいそぎけり。恁而現八大角ハ。穂北の荘に來て問へバ。這里ハ字を樔野
と喚做す一邑也。巷路を左へ一町ばかり引入れたる。有底坊に一座の荘院あり。則是氷垣残
三夏行の居宅也。但見れバ。松柏の老たるが幾株欲繁に植たる。南向に莓めしく。黒く貫高於

冠衡門を扉廣に摧建たる。左右ハ拘橘の樹墻を析遶して。裏面ハ玄関と見えし処。
書院めきたる茅檐の。樹粒の間より見ゆるのミ。其頭ハ安定ならねども。門邊より七十間あまり。這
方に流るゝ細小川を。構塹に取做して。席薦二枚許なる古石碑の長きなるを。其侭橋に充さ
ずしつ。渡るに中ハ絶ざりし。龍田の秋にあらねども。水上遠く吹風に。丹楓流れて濃薄なる波
濤のよるべの綾錦。たゝまく惜て。食求食る鳥ハ一隻の鶺鴒。尚乃者や渡りけん。雲井遍に
落し來て。榎実群食む椋鳥に。鶫鶸うち雜り噪ぐ下枝に。樹豪家の出來秋みえて豐饒なる。
三飡毎に餘りあれバ。飽て匍匐ふ門の狗。夕辰作る鶏と共に。雌を喚ぶ鴿も。富に集る本邑の
長者なりと猜したる。現八と大角ハ。正門より残入りしを。世智介ハ這方へとて。玄関よりハ請も
登せず。母屋の外面をうち遶らして。庭の折戸をうち敲けバ。内より一個の若黨出て。そハ世智老
僕にあらずやと問へバ。答て世智介們ハ。那盗児を趕走らして。皮箱を奪ひかへしぬる。旅人達を
ゐて來にたり。快開てよといそがせバ。応と回て其侭に。残ミ近着て鎖を披きて。誘とばかりに二犬士に揖

譲とて先ず立て書院の架へ案内と志當下世智介小才二们ら幾名の壯客も咸二犬士の後ゐ跟て俱ま庭ゐ入りける小程ゐ現八大角ハ又若黨ゐ案内をせられて雜貨庫の後ゐ。横柱深ゐ細路を推續ぐつゆく程ゐ。思ひもかけぬ共侶ゐ大地を禺斜と蹈破りて吐嗟と叫ぶ程もあら志愕然と仰反ぐら。坎窪ゐ陷りて後方ゐ立る衆人ハ獲ゐや心と走る寄ゐ。ゐ中ゐ魁を爭ふ壯佼のミ件の穴ゐ跳入り折重て現八と大角を先ゐ斜々と細ゐ事る吊して推抗るゐ上る衆人受合て志ゐ俊撞と推居ゐ登時現八大角ハ怒れる声を発ゐ立て其逢ゐる壯客们鄙ゐ言を巧ゐして賺て這首へ誘ハ這等の計較ある故欺偽ゐ知ハ愚人の本性賊ゐ知ゐ非義非法今ゆゐ又若们ゐ道理を述んハ益ゐ似ゐ主人を喚ぶ。對面して市虎の疑惑を言下ゐ鮮ん快喚ぶと敦圍て立ちまゐと牽禁る壯佼们の後方ゐ小才二ハ世智介と共侶ゐ我寄て現八と大角を左右見て冷笑ひて這盗見们ゐそのざまゐ。ゐ中ゐ俺東人ゐ對面を願へと。誰ゐ怕れて孰継ぐ縱あらく欲せぬとも。ゐ面前へ

○文溪堂藏

牽居ゐ。脆て敷ゐせられ志要ゐ頭を喝んゐ覺期極めて念佛ゐ唱て俟と窘れば世智介ハ一度ゐ。意氣揚々と三犬士ゐ対ひ髯撫捫て。ゐ盗見们本支を知れり。然ば末期の念乖ゐ這鼻さゐ名ゐ智慧を揮ひて衆人を鎮めて首尾ゐ計り課せ。綷ゐ段を説示さん鄙ゐ俺们ヨ勢ゐ一も身ゐ鐵を帶ゐるゐ。捍棒農具ゐ志れば若们二名の両刀ゐ捷を取ると日ゐ志毛を吹て疵を求んゐ咲ま如ゐと尋思ハ志ゐゐの搗鬼ゐを知て陽ゐ羨ゐ。ゐ宿所へ人を走ら却東人ゐ綷の由と計畧の趣を報知ハ一票せゐ這里ゐ志ゐ准備ゐ造措ハ坎阱ハ近屬倉廩の修復ゐゐ。這頭の壤を穿取られる。迹ゐ仍ゐ思起せハ俺妙計。穴の上ゐ薄板を並べ壤を掩ゐ志れば綷立地ゐ成就して重く骨を折ゐまでゐ。ゐ人の隨ゐ這個穴ゐ陷れて生拘ゐ。現若们ゐ打扮ハ旅ゐ武士ゐ似ゐ出没不測の盗見ゐ。ゐハ支當ゐのゐん鄙ゐ窟ゐ衣箱を偷ゐ措ゐ。ゐハ快ま。ゐ臓ハと欲ゐ。ゐ折の舉動ゐ。

○文溪堂藏

ざる面魂の外物に似げなく大胆不敵なと怕るべき癖者なりとぞ罵るに大家急に推禁めて
せちとのぬーたち世智力祿和主の挿花を摘捕る盜賊とぞ談義に要るー東人の寝刃磨りて俟ぬる快
哉ぞ
牽立てゆびやとふふ世智人領花で寔に然に快せよといそぎー立て皆共侶に庭の假山うち巡りて
やこ大士を書院に縁頼近く牽居けり然も現に大角いらく怕て氣色なく左でも右でも
這衆人に理と演虚実を辨ずるも炭氷合ねば多くは愚の惑に解がざる主人の對面
せん折を俟んぞめとぞ思さる心いかで勇士の窮阨默然として爭ぞ大川大田ぞ去歳の
夏那片貝の別館に力士に捕捕まーも低ありけと後に知る此彼寃屈の郷縛縄孔子も
陽虎に似ざるぜが陳蔡の阨あるべーぞ白龍魚服をせぎもあらば余且の網に入るべーぞ海
蕾春に魁たが雪霜且れと痛めぞ後に微妙の香あり豪傑いまだ時とぞ遇ざれば造物連
に阨に遇て終に一世の功名あり看官下まぞ讀に果さぞ片貝の一段に似ることあるよも
ぞーん狹とぞ作者の自注と下ぞ水滸西遊に重復と異ると知る人に知べー問話

休題却説當家の主人と雪えー氷垣殘三夏行に郷に盜賊と捕捉よとぞ後僕農民此
彼とぞ許りの人と部ーに四方へ出て趕せーに千住のぞに赴ぞる世智に小才二分火家の
壮佼二名ぞ内通にぞ沼れば猛可に坎窪を造らーて今ぞと俟程に世智に兩
個の賊と欺詐りつ倶ーて來ぞ計りーぞ件の穴へ陷ーて捕捕るーに若當黒に報ーぞ
嘗ぞうち鳴ーー雀躍ぞる這夏に行ぞるーの齢も既に長濱の七瀬過ても生憎に風
急に波の立騒ぐ乱ーー世と衰及武勇の三鬼人に捷れて最も逞しかりけれ肚裏に思ぞう俺知に
あらぬ四下の盜賊に怕れて徘徊せるとあーと心寛せー由に勝に大敵ぞるも青天白日に潜入て東西と竊
ぞー其奴們を今斬て棄ぞに何ぞ捕ぞる新刃と鉄ぞ究竟ぞに東
西と獲ぞる。と宣ぞ准備とーつ等程に老僕世智に小才二分ぞ復ーる衣箱と一個の壮佼に
うち駝ーて衆人と共侶に大飼大村三勇士に鹿縄被て牽立ぞる先衣箱と縁頼よりち卸
さーて声高に大老爺ぞ問ぞ欺計りーぞ盜賊と捕捕ていぞ生きぞと咽りけり登時

あも戸
るつあ
夏紛怒く
二犬士を斬
んとも
小オニ

現八
ぜんか
大角

主人夏行は鄙ふ折戸を開くる。那若皆黒某甲ふ斬柄樅る刀を持て。縁頬近く坐て来るを。
現八と大角は瞬もせず熟視ふ最堅固る老人を。皎々たる頭の霊相は枯野の小草と紛れ
ど。如く。骨立る松の膚は深山ふ立る杣木ふ似る。赭石を面の色三重を欺く眼の光は蒼い瓠
仁ふ似て一枚も纏ず脱ず腰は梓の弓を。猶反るまでも太し。身は段々筋を深ぬる。仁田
山紬ふ厚綿敛る。衣を被て。絣組の圓帯を。胥高ふ結びる。上は煤竹色る道服を。下は短
袴を被領る。その為体田舎備て。鳥帽紀嶋の蝙蝠羽織は。ぐ紀世中は。胃毛を紉と組
糸は管を串る片襟。斜ふ樅て苛めり紀武弁氣質の起居も昂く。四下を睨て。大家敬
ひ跪くぞ。中ふ世智介小才二両個の老僕は。女人び頭を擡げ膝を找めて。大老父郎御面見せよ。
竊去れ衣箱は。千住堤の頭を。急復ひ紀又這両個の盗児を。稍宿所を誑引寄せ。
穿ふ樅て生拘るまでの。計の趣は。郷尚ふ注進の為まるを。壮佼們ご呂状を大抵知らせ。
捕捕る盗児們は則れでは。とひて傍と。これは百夏の屎要頭を。ぶる優る若們ぶけ。

挿ふいと愛た。俺本邑ふト居を。地を紀農を勧め。穂北梅田柳原の三郷を再興せ。
既ふ七四十餘年。上ふ侍領主る。下ふ叛徒民は。今戦国の沿習を。耕ものも刀を跨へ
転るのも戟を携へ。畋畝ふ妻子を艱ふ。皆是武藝ふ疎く。就中俺三郷人の心一
致て勇敢る義を守り。質朴る足を知れを以。争いる。夜は鎖ぬ。盗賊入る路ふ
送せ。東西を拾を併俺武勇の致を所。生遠近人ふ羨れるけるふ。近蜀河る這方ふを
盗賊あり。徘徊を生。言るめ。鳩鬼るんと。ふ。その言果て違を。人ヨ。
俺宿所を賊の上足ふ汚さて。剣武器を窃れ。名実足り衰て。郷郷人ふ侮られ世ふ
安らぬ。彼此を部て。趕せ。の吉左右を。獨侯不樂ふ。西北南三方へ遣
なるいまを還る。然を東へ。世智介小才二隊の才覚ふ。逸速ふ。剛る。両
賊を誑引せて生拘る。大功賞を。餘り。其奴們両名の面兎悪棍めを打
扮も亦異様るねど。則是外視を欺く。老賊の致を所出処姓名舊悪を招道せ。

頭擊き落さん程よ死処(牽居)よ快々せよと性急る武勇ふ誇る倚老の決断羨りぬと荘客
们又立かりて二大士と牽分んとたれども現八も大角も立る侭ま動ねば噫戻かやと世智介小
才二身を起し来て二大士を推退けと左右より找むと奔引外現八と大角いらい合さねど
勇士の奮激足を飛して礮と蹴る蹴られて世智介小才二苦と一声叫びもあ此彼
齊一身を轉して二間あまり左右ふ庭樹の幹ふ投着られ腰を折り腕を傷り苦痛ふ
堪ねば蠢動くのを早ふ起ぬ沼ぎ手ける本支ふ懲りたる衆人ふ古を掉首を注して重て近着
くのもなく取る索を放さで豪ぎりふ阿容々々と四下を囲ま戍ぶとり登時現八大角を
佐と夏行ふち對して和殿ふ當家ふて主人よりぬ姓名ふ衆人の告誇るふより少知ぶ菽
麥ぶ辨ぶ紫昧愚痴の僕役ふ諺て俺们を疑ふのあるとも綽の虚実を向糾
さで俺们をも不良の人とせ云ふ是甚麽の道理を知ぶ具ふ説示さん膝を找ゆくよく
听ね俺们も亦盗見ふ行裏を奪れぬるもの故ふ箇様々々と告ぶと夏行少肯ぶ怒を解

声を張り立て噫盗見们ぶ悍々ぶも筋ふ虚談を正しけふ瞞めと欲ぶとも其頭を
壮佼们ぶ注進ふより俺も亦總て送ぶ少知ぶ今ゆ詞を巧ふ懸河の辯ふ儘ま反
とも証人ふければ誰ふ信ん今その口を鉗ぶ正ま証拠ふ有ぶ天罰ぶ思ぶ考ぶ恐ぶと罵り
ぶ遽く懐を探りて歩を襦衫の片袖を引伸し又含抗て安れ盗見れを知ぶ欲ぶ
胆の渋ぶまぶ駭ぶもせめ悔く思ふ是笑ぶの哀ぶ衆人の知ぶ所べければ説示ぶ皆共倍ふ
听ねか鄭ふ這盗見们ぶ厮ふ趕れて逃し折慌ぶけ枸橘の樹墻を推破して潜り出
んとせ程ふ襦衫の袖を枸橘の下枝ふ縫れて引断離りしぶ俄ふ逃亡る迹ふ送り
這片袖を俺ぶ歩せふ驟雨の天霽耳りし比ぶ見ぶ必其奴们ぶ襦衫の片袖ぶ所のあ
らん衆人少ぶ思ぶと問べ大家さん剛才這奴们両人を綑ぶ折初て左ふ立る盗見の
襦衫ふ断離れて片袖ぶ有ぶ此彼相似ぶ浅葱木綿でひとふと大角ぶ入ぶ人々
知ぶ所ぶ俺這襦衫の片袖を喪ひつふ堤ぶ両個の賊を捕へんと挑て折ふ引断

離られしを風に吹れて川へや落けん索れしかども有ざりきと反せば果で夏行は呵々とうち笑ひて。係まで證据分明なるに争ふは無慙の癖者骨を拗で招道させん跪せ殴倒せ噫な覚しと敦圍けども既に懲りたる衆人は兼てよと答るのみ又近づくもなく蹴られやせん棒もて足を拂れん欤左しもやよけん右せん欤と困じて進を難しかる夏行はいよ〳〵焦燥て何れも〳〵弱虫們がまだ宴会の知をたる両個の賊に今ゆら怕るゝとはある壁言ば保輔張樊に捉たる勇あり術ありとても重宗掛て縄かけなば檻の獣に異ならず俺ぞ夫せんとて後方にゐる若党に持せ刀を撈合て勢ひ猛く縁頬より走下んとせし程に出抵る屏風の背に竊聞たる女子あり忽地にあと声かけてやよ等よ家尊の大人亘くべきすゝ待る奴等権且留ませねと喚禁めて遽しく屏風の端を撈遣りて見れば是則別人ならず今玆わる年招婿して落鮎餘之七有種に妻せたると呼える主人残三夏行が獨女児の重戸なり當下重戸は縁頬に跪きて父に對ひて喃爺々公係亘宗さば淡き女子の身の程もしらぬ事ながら舌長しとて叱らせ給ふな欤知らさはれど盗賊詮議の御声の高きに胸安からねば端近く出て已前より那里にありし一五一十を窃に見つ聞つるのみにあらず出ては疑ひなきにもあらず人の心の好歹は相貌によらぬものなれば摘捕られし旅人達は何でふ人柄さへ竊盗をすべきものに似ず勿論断離し襦袢の袖の這里に遺りてあるものは左ても右ても動がたき絆の證に似たれども那人々も堤中で提燭なし盗児の為に引れて片袖を喪ひしものならんか実左もあらずば那身に由縁る是禍鬼の所為なるべきをよくも糺さで只管に憎りて命にかけなば最憐むべきものにして後悔其首に立がたかり是等の虚実を糾さべき證人は外ならず絆の初に盗児を見出せし小厮の還るを俟て那人々を見せなば墻を潜りて逃亡る盗賊は那旅人欤別人なる欤立地に分明て疑ひを解ば捷径にしてはべるめれ既に這義をおもふにつきても禁めまうすは名も知らぬ那人達の與のみならず罪疑しかるものを殺せばその子孫の世まで祟を受るといふこの物の本にもはべるを賢慮を旋しめ給ねかし。と理りを演る義を推て獨惑ぬ賢女の諫言耳に逆へど夏行は然しも恩愛父女の情腹に

泊立を諾ひもせぬ。尺くらるゝ冷笑ひて。憐むまでなりとも。敗れる是婦人の仁。なほ隨ふ
做さるゝ。雖言ふ刃を借さふ似く。世の胡虜ゆるゝ。墻を潛りて盜賊を認し。小廝いる
ゆ吉ん。他ハ南へ遣しる。一隊の追捕と倶みまぐかへれと還るを候てん。さるハ易えとゝゞ正
さえ證據の片袖ある。葉て今ゆくいふぞ。二十ふ足らぬ小猴子の一言隻句を取るより
らんも朝の炊ぎヨえ寡えに或ハ衣の脩えに短えに費を厭ふて云云とのゆえに相応しかゞ。ふ傷痛え
女子の裁判ハ盃えに意見ハ聆く耳めらに快々立ちと窘るを。車戸ハ言ふも推返して然まで
思召るゝ。力及ぎられども。餘えに力称もいまゞ還しぎ況やけの母刀自の忌日ゆゑ。憤らふ紛れく
立れのひ。狹いで習まで呵責て禁めぞ。那俤繫措えゆゑ。遂ふ虚実の安定を知らまく
御後悔あるゝも。ゆゑ信誼ハ一入願しえと。允さをゆ。とうち陪話く浮世の秋を身を占る。
脆えに涙の夕霞ぞ。茨ゞ下の女郎花。ねるを直く怜悧さを側聞る。二大士ハ憶ぞ目と目を
對るまぞ。竊ふ感じえ。十室の邑も忠信ありとゝ。ふハ悍ゆ。夏紂も言の道理ふ

迫られて。沈吟ぎるを。平晌計ゆう。孫くふ領えて。やよ車戸ハいゝて。趣意ふ由あり。日屬萬事を
任しふ。有種もいまゞ還らぬ。亡者の命日忌辰ハ非如罪人ゆとても。殺生ハ要るえ所
約るべ。慌れば你の願ひを儘し。習まで一室ふ閉籠措ん。涙脆えも折ふてそよう。めてを
泣くと狹と慰めて。外面えゆ。それ衆人ゆとりを。ゆえの盜賊ハ那里ふ。金樹
室ふ閉籠て。緊しく鎖して。一両名迭代ふ。ゆ成えと又那奴ハ両刀と。ハ一箇を包裹ハ
重戸且く預り措て。有種がかゆるべ。と告てゆ。倘亳ゆるも憐愍を被るゆ
俺女兒ふあらば。然ゆとあらば。仇とゆゆ。衆人も徒ゆるゆ。ゆ。其頭ゆ事を
做し果ゆ。食共侶ふ奥へ束ゆ。賞祿ふ酒を飲せんぞ。太義ゆ。勞して引提し刀を
若黨ふ持して奥へ退るゆ。若黨も亦身を起して。主の後ゆ。後ひける。介程ふ衆人ハ二
犬士の両刀と裏を。重戸ふ遞与ゆ。又縁類ゆる。衣箱を積藏ふ斂るゆ。這餘の
壮佼幾名狹ゆ。索含ふ縮て。一天士を牽退るふ現ハと大角ハ既ふ重戸ゆ心標の世ふ

捷れしを竊に感じて。胸膈豁け怒氣理り天奮勇初に似ざりしハ。倶に時運を天に儘して。慾ても再争ふ牙奮ろく随まう運ぶ程に。盆樹室に赴く人食送るその中に世智介と小才二六。撲傷に堪ざ。捍棒を杖に衝て足引の山あり水ある庭なる。二三十歩の程卒しも人各笑ひそけなさる。千町を過る心地せと喃ぎつ面を醜めて愁しげなで辿りけり。

第八十四回　夜泊の孤舟暗に窮士を資く　逆旅の小集妙に御豪を懲す

秋の日なれバ短くてよや黄昏になる随に奥に吹播めく衆僕の醼會。主翁と一席ぐも。恩賞ハ免許の不空ると。今這折に喫ざもあるべ何の時を期すべきやとて。迭に挑む献酬に沙量も浮れて高笑ひして酒菜を果茶を猫脚の折布空しくなるまでに啖盡して又啖ふ箸さへ暇なかりけり。然バ重戸ハ折を得て。獨奥より出て來つ。四下を屡見かへりつ。携たりし袱包を且書院なる縁頰の戸袋に推隠して。外面に立去る戸脣なるに。夢介壁藏其首尾やする快哉と喃立れバ。盆樹室の頭に土居て張番なる両個の小厮ハ応と答て共侶に遽しく出て來ぬるを。重戸ハ招き近つけぞ。やよ夢介よ壁藏よ。你二名ハ盃をまだしも含らぬ沙量なれバ。菓餚にせられて徒然に堪ざるや。東西の欲しくありけん。然とて奥で酒宴の最中なれバ誰もかも。代らせる人ハなし。這里ハ那里と目融しと遠くもあらぬ程なれバ。俺身が這里より見ていとらんぞや。く庵漏に赴きて夕飯たうべて來よかしとのりれて。然ハ夢介壁藏含笑ながら手を搓りつゝ。それ悉ぎ御心操仰ぐ悖るべうハあらねど。倘大老爺に知られなバ我閑也とて叱られん。影護きを這支のことのみと重戸ハ等あへず。其頭の遠慮ハせずもあれ。爺々公叱らせ給ハぬも俺身が口を鉗てをらんや。好もあしも這身のうへにあるなれバ。ものを快食ねぞよかるなるぞやと急せバ。ようよう歓ぶ夢介壁藏欲然ハ仰に従ひまつらん。その宜くよろしくと憑む詞の露路の間も。重戸ハ心のいそがれぬ。ぬし遣りつ。戸袋なる袱包を搔合て抱きて。閃りと下る縁頰より。そやくも後の巷石に裳引して潜かに盆樹室に近着て。帯の間に隠したる鍵を取出つ。戸を推開きて。恭しく二大士にうち對ひ

声を密出めて支度をすれば詳に告るあらまを暇も惜く郷に奴家が父親に別るゝを悲
めけん竊に出て見るに身達の両刀と行裏は這里にあり快く出さるゝとのこと躰と二天
一の郷縛の索を解捨まば数多なり現八角ヨヌクに沒賢女の慈善に感じ星躊躇て
言語齊一答るまう岩ケ谷に忍たる身の明察俺們を那賊なりと知られて放遣はくとも主人を
はゝ衆人の無明の醉の醒ぬもあらんその後に身を隠さば何の日か恥辱を雪んかくの
如く武士なるの最も恥辱なれば今はゝ教に従はんかと這度と猜ゆひよと推辭むを
重戸は少あへて宜ふよりは然るとなるゝ怒に道を守りて死を待のみは疎鹵なるべし徒らに奴家
さへるに疑ふ似れども非如ん身に悪支あるとも奪去られ衣箱をまう復ゝれば這里に損
る然るを執念深頑に斬んとのひゝ父よりも良人を心よく悍かの今ゆもれかの来とりを安
く忽地に怒りて屠殺とのそゝさえその折奴家が諫るとも聞ふて聴るべ徒れば雲霧時暗
身を暗して近郷に杖を駐めく密々に那真の盗賊の所在を索ね生拘て親と良人に

あせのつゝその折まを疑ひ解て俱に先非を悔ゆる人這度と必ひゆむをとのれて悟る現
八大角共伯は歎賞して通微妙に賢女の教誨いとゝ趣皆理あり遊莫教に従ひて
俺們這里を出て西の外なん身のうへを及ん身を殺して仁を做を義侠なりとも俺們が心に
これを忍んやとのふと重戸に推返して其の美を豫て思念あり願ふは身達這室の壁を
内より突毀て背門より出て見るに奴家の又這室を鎖して髪を乱して倒まく人の
来るを俟んこれより親も良人も皆うち駭て走り聚ひく喚活とうと問ふ奴家則
詭りて室を成りる小厮們ゆ飯をたうべさせんとのふよりて雲霧時の程奴家が代りて縁頰
より那里を目成て偽りて那旅人們の術やあり件室の内に紳縛の索を解捨壁を
毀て出く這方へ来まければ奴家は吐嗟と駭て人を喚んと身を起す程ゝもあらばを近
つゝを推禁んとせ折ゆ胷を撲れて縁頰より落て黒白も知らぬまでなるを件の旅人
們は郷は奴家が次の間に措る力と行裏を探食て逃亡し弥黄昏時のまゝと奥に

酒宴妄庵酣なる比に及ぶ暇ある折なれバ、今まで人の知らでやありけん、危かるであらざりけるよといひ、必実吉文にせられて、奴家は外にあらず候べし。快く壁を出で急ぎ玉へ。女子に稀なる思慮才幹に、現八も大角も、ふかく感じて推辞に由なく、然らバその意に任せんとて、袱包をうち開きて身につく、とり出せし両刀を腰に佩るその中に、現八は行裏を駝ひて四下をうかゞふに、盆樹を擔ふ杇あり。是究竟と合す杭て力を極めて室の壁を突摧く、三尺ばかり又大角も身を拵て絳よく拵へたりければ、共に重戸なる方に對ひて、再生の恩知己の義を演る間なく、辞別猶豫しく人に知られんと要心のいそがれて、詞短き秋の日も、はや暮て隈なき月影は潜ぶに便り蓋垣の陰に添ひつゝ出て行くを、重戸は霎時目送りて、手ばやく室の戸引よせて鎖しつゝ、縁頬に頭近くかへり来て、鬢髪擾乱し櫛笄を捨て地上に臥て居り。當下重戸はおのが事はさらにもいはで、家尊の大人は勇悍を旨とするものなれば、老人の虚実を猜するとの思足らバ、やうやう縦襦袢の片袖の此彼似たることあるとも、更に那人達が真の盗児なるべきや。倘亦真の盗児なりとも、

奪去られし衣箱の舊の侭に復りしかバ、只その罪を罵懲して追放ちなバ慈悲ある人といはれんに、諌めて用ひられずバ已ことを得ず、胆太くも女子に似げなき計ひハ罪怕るべきことならず。亡母刀自の命日に必死の人を両箇まで救て、追薦冥福のよすがにならんとて、夢に奇しき数のありけるを、日属蜀の氣質に憚りて、只で親さへ良人さへ欺くまでの不正を又もせしたるへと胸に納めつゝ、弥陀唱名の持念を凝せ、夕間朧庭の千種に鳴く虫の音枕に聞つゝ、湿冷に痞發りてなどいひて、郷導の夕飯を齎べよといひて誘き退けたる、夢介壁蔵両個の小厮のかへり来ぬるを、今ぞ遅しと思ひけり。話分両頭。尓程に犬飼現八犬村大角両個の勇士は、賢女重戸が惻隠忠恕の資助によりて必死を免れ、氷垣が宿所の背門退より、密徧に走去りけれども、なほ已ことを得ざりし所為にて、武士たるものの本意にあらずと思へば、迭に耳語くいひて、又那盗児の往方を索ねて生捕りて牽のせて這里に帰来て主僕の惑ひを解きもせバ、何の日にか恥を雪めん。今宵は千住に宿を投めて、商議をもせんとて連

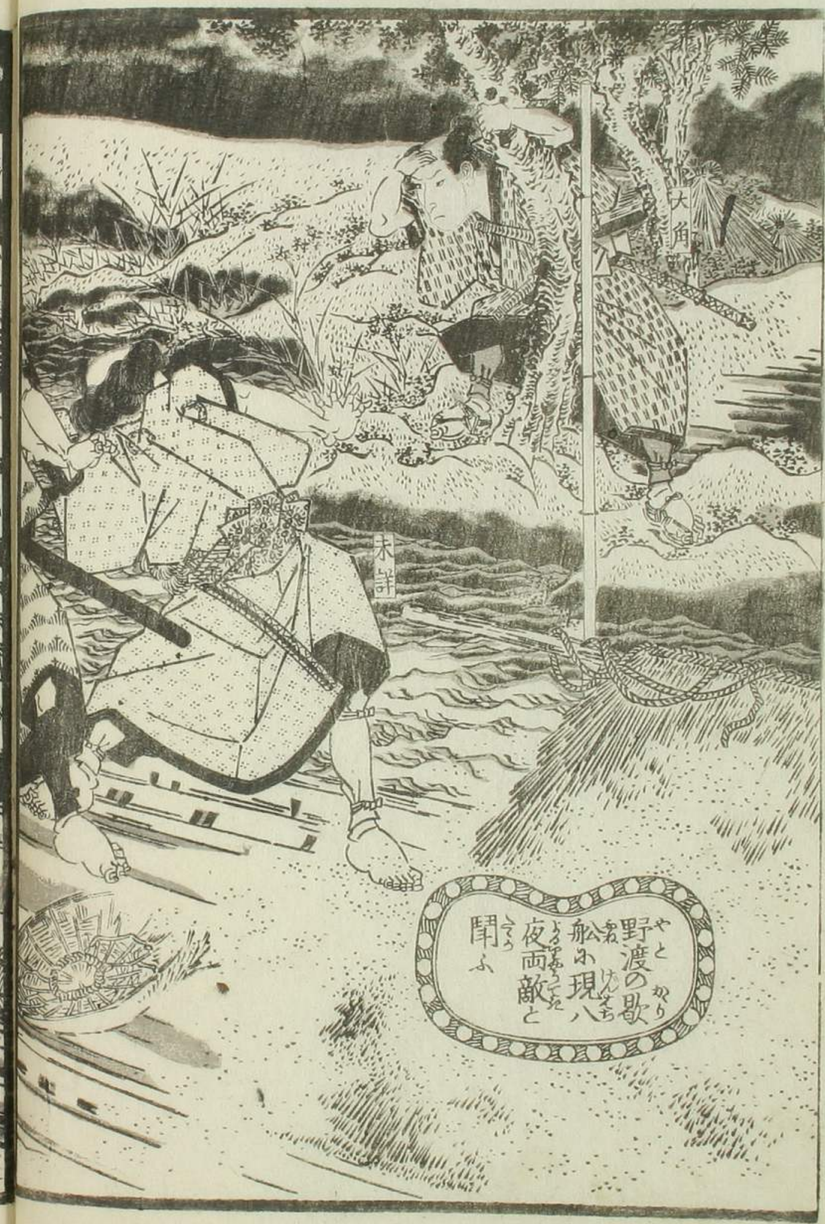
ア与路次どいそぎて夜いまだ五鼓まゐ下り一ホ千住の河邊ホ来るれば。いそぐ前岸へ渡さんとて屋船と喚ぶこれども夜川の渡さでだにける。這方の岸ゆい船もなく答ほのめもあくぶまれば倶よ堤ホうち登りて彼此と見亘せば一町あまり河上ホ苫葺る船ありければ走りて其首ホ赴いて船と寄せよと喚るに水際近く繫ぎたる船のもとに人在らねども寂寞として答もなきに心いとく焦燥る現八を遽しく大角とりて這里も筒師處らぬ猶豫せば氷垣ヅヨ勢とれて趕来るとあり。せん仆ば難儀よ及べし。俺那船ホ乗移りて漕寄せて和殿と倶よ渡さん水際よ找もとめよと答へかば現八を腰刀ホ両手と抓つ身と跳らして岸と離れて歇りたる船ホ閃りと乗移りて竿高と拔んとせ程に船苫の内よ人ありて盜児等と喚禁めて苫推抗つ猛然と見れば一個の屈強男走蒐りて現八の利手と下と扼るとうろ覚えと身と淪して振拂んと角とる程もあれば又一人左のうしより衝と出て組んと找む左右の挿ホ這方の岸ゆ大角とり見て驚く再度の窮厄いそ力と犬飼ホ勢と仇と拉んと思ふもかと見る陸と水浅瀬と索く彼此と走入まくあれども不知案内ゆ夜川の深浅測難く村脛の心ぞりホ惴るのみよるべの便りあるけり。ホ程よ現八を敵と左右ホ引受て熟得の巻法術と盡せば揺めく船よ水入りて入る板子と踏留め且く挑争ホ折ら雫妥時隱れて又業取雲と拂ぶ出る秋の月の清光夜水と照りて金波流れて細鱗跳る。氷輪激瀬ホ俵りて玉兎競ふ晩潮落ホ金天変化瞬間ホ隈なくなり一月光よ人人面と佶と見て共よ駭く声も齋

一句　和殿ハ犬飼　句　現八ゆ

句　あるくいふと呆るまでホ捉ら捕られ

句　然ハ道節。信乃ゆ

句　長沢別と今あホ環ゆ迭の欽び比んとも南麻與民の甲斐ある世と出げ登時現八先ゆ進ら出るけるに今宵の再會旦元ハ原是何なるの故ホ孤舟の内よ入る。俟人あり欽甚麼ぞと問ハ道節微笑て不吾俺ゆ這船よ乗りてあり。ホ後れて来る人と俟ぞ



文溪堂藏

與ふ。あらじ這筈のなり姑く置て和殿へ亦何者の故ぞ。岸を離て數条の船よいと慌しく蜚
の無りしるを。あるべきなりとて問復されてもいとけなくも不慮の大阨あり。辛く必死を免
れて這河邊まで来つれども航船のあらしふ稍這船を乞て寄せよと喚びぬ応せざれば
うち漕て渡さんと思ふよりて蜚乗うの綜の難義は俺のみうたとのひく出岸邊をたつて見ぬ
那里ぞ立うの。是同因果の義兄弟犬村大角の用ふ礼儀と唱倣を文武の俊傑へ他も亦感得の霊
玉あり。痣もあり。鄙ぞ某下野の旅宿せし折避迫へ犬士の一人うべきよりと迭ぞ悟て義を結び
云ふ。他の則家と乗一所親ふ別れて只管ふ和殿へ目餘の犬士ふも環會まくいふだろふそれ
以来某と俱ぞ諸国を徧歴の先陰二稔ぞ及びうと報れば然ぶ信乃道節あらべ船を岸ふ
寄せて犬村生ふ對面せん吁愛さと諸声ふ合笑うら壽祝へ。數条の綜を解笠高を接ぶ
撐へ船を岸ふ寄せれば現八を遽く船より出て笑げふ大角ぞうち對ひて犬村生立疲れて
そ候不樂しかりしかども既ぞ這里ぞ至れば如く其船ぞうち無りて支ありけるへ没怪の福ぞ料

ぬも大塚犬山二兄弟ぞ再會をうう快々對面をのかと報ぶと大角うち笑ひて先ず欣しぶのうに。
初和殿ぞ船の内ぞ敵を左右ふ引受うう勝負をふ測り難て最大ぞ氣を問かぶ遠くも
あり程ぞ。俺身ふ山里ぞ生育て水技自由ぞうぶれば部語ぞふ漢水ぞ閑話ふ似ぞ綜れ
不便ふべうもあらじと安ぞ解けて和睦の光景ふれしうも少ぞかふ憂を轉しく歡
びあうのうとの憑しさとのふ間ぞ信乃道節も岸ぞ登て共伯ぞ身邊ふ来ぞ大角ふ恭
く找迎へて犬塚犬山二賢兄某犬村礼儀ぞ二兄のうふ豫ぞ大飼生ふ美知へ景仰の懐び
已ぶて。俱ぞ諸国を巡りし甲斐ふ今宵面會の歓びを殷ぞ幸ひ是ぞ優のうしとへぶ信
乃道節も礼を返へと却ふ犬村生の来歴を詳ぞ生ふ詳ぞうねども俺们ぞ異ぞ思王あり
痣もありとしぶけば亦是異姓の弟兄ぞ生れし時日ふ同じかぶ異郷ぞ成長をうとも今ぞ
後憂を分ち禍福苦樂を共ふしぶ皆同郷同日ふ死を願ふ外ぞ他支ぞし。分るぞ大飼共伯ぞ。
危窮の尼を免れて這河邊まで来のぶ思ぞ後の安危を具ふせざれば胸安らぶ

義を知らぬひとと同へに大角歎息して。縛の起本は俺身に在り。犬飼生の連累なる。その故は箇様
箇様とけり。驟雨のゆゑ。折行裏を盗賊に奪去られ。縛の趣又這河の堤なる三個の賊と合
へんとて。且く挑戦の程を那盗賊們は逃亡て行衆さへ。ゆくゑ迹なき件の盗賊們が近郷なる
竊合みてのち来。衣箱の送りなるこれ。ふたりの盗賊を追隊の衆人疑ひて大角と現八を欺て穂
北なる宿所に伴ひ寄る。稲刈の光景并に襦袢の片袖の。悉くのあるをそ。彼暗
合をなるふたりの那衣箱の主と。ものえ。穂北の郷士氷垣残三夏。彼がその辨論を聽ずして。現八と
大角を。毀る果さんとそ。敦圉に。女児軍戸が賢才良智の詞を盡して諫めしかそ。その堺落點
餘之七の還り来るまで。俟んとそ。現八と大角を。盆樹室に禁獄をする。黄昏時に件の軍戸が。資
助をよりそ。脱れ出る。縛の顛末。悉くそ。崖略を説示せば。現八も亦共伯に軍戸が婦徳を賞
賛をそ。俺們憶ず寛恕を身を危くせんとも。一婦人の資助をよりて免れる。幸ひと不覚を命を
惜まず。ひとりで又那盗賊を捉へて恥を雪んとの。潔く身を暗くして阿容なくして脱

して。這里まで来つるなり。その義を猜ぬれと。告る詞の不樂しかぬ。倶に嗟嘆に堪ざりしを。信乃道節は
つくづくものて。憶ぬ目と目を合して。奇なるかな。妙なりけり。犬村犬飼両兄弟の話説ふ。就て又一條の話説
あり。且ものへと慰めて。迭代に説示せるその顛末を。原るに。這朝信乃道節は栗橋の旅舎を出て
千住堤に来かけるに。既に日は暮て。河を前面へうち渡して。千住に宿を投んとて。航船を索
ねしに。航場は船もなくて。這里に。数艘の船あり。両個の篙師が何かのあらん東西を論
ずるを。云云とのの程に。信乃道節に。喫ひけれとうち敬厳なる声ありて。心をつけて来由を問て。夜川を渡さ
ぬ。制衣度目なれども。船賃を多く賜らば。竊に渡しまるせん。誘ひ無せのへと。船を撐て寄せられ。信
乃道節は。遽しく。件の船に乗りしに。篙師們。又ふたり。竊に渡せ船なれば。客人迭に無せま
おもせ。人をそこれとて。厭なる。前面の岸へ漕寄せるまで。権且せんの下に臥て。音なきのひとと論
ずるを。信乃は心に訝りて。密に道節の袂を引て。道節も亦意中に悟りて。疑ひ怪しむ。然氣なく
共伯に。苫を被て横臥する。登時両個の篙師は。持る篙を引抗て。信乃道節を咽

吭を刺串んと閃めく走を信乃はちらと道節を臥つまく身を反せば寛外れて篙師们は板を蔓煞
と串ぬらるるその船篙の石突あ稍と製作て鋭と鎗に異らねばかくれ如き利害あり既に
て篙師们は突外せ不心慌て引抜んせ程に信乃道節は些も透さず身を起て篙を
繰て此彼共を引つけて組んとする横面を撻悩一蹴倒して縋ると旋回巻を推雙へ綑を流
船を撐止め篙を建數条を抵て却件の賊篙師们を息も吻せず鞭撻懲して緊く拷問
をすれば二賊は苦痛に堪ずして遂に招道をつる小可们は宿もなくて這船のを起臥をる
尻肛玉河太郎笠伯貓野良平と喚做るのでひく毒筆算の癖あれば世渡る業に疎き賭
釣を好み酒を嗜む徳は底なる性なれば俱に悪事を宗とて夜毎に這里の河辺なる又ある時を
黒田河に船を數艘て旅もく人の渡りを求ることあれば猝徒と欺詐りて船に臥さて這篙を
と突殺し盤纏を奪ふて屍骸を河へ投棄し河に幸ある折を近
郷の人の東西を竊みしも屢なりけり實四割終に免れず武蔵に長する刀祢们とは知ず流

髯を曳損ね綑められ後悔のさらに立ちあれども今より野心を改めず法師のをんと呼ぶを願ふ
慈眼視衆生の佛心と無ゆえて許さゆと同音に哀請ぶ已ざりしを信乃は冷笑て俺
が這河に違ふまでに折若们は這船を引管に東西を論じと云云とふ声の洩ぬるを今あるべ竊
み東西を分えとそその損益を論せるを這笑は甚麼と又責問れてそれを隠さゆるざる
野良平がのひけるを御推量に違ふとなくけ河太郎と共伴に穂北の郷士の宿所を頼ひ潜門
より竊入り折河太郎は逸速く其頭にありける衣箱相の表を出てあれけるを小可は東西も沿
取ふ鉄や小厮に奪されて笠離笆に潜りて逃去ぬ却その路を小可は旅もく武士の送りに祇
包を搔攫ひて走る武士は遣りどと捏蒐来る堤の頭に河太郎は衣箱を御と憩ひ
ぶ援を乞て那武士を數る什えを挑みるがも呉に倍る猛者なれば矢庭に左右へ投伏られ
命も俱に危ふと河太郎も小可もぞ低河に滾入る辛く必死を脱れる恁る折に小可は又那
武士の祇包を搔攫ふて逃れる河太郎は御措ける衣箱をも捨て再会を期して

是より河太郎が小可ぶめ去る秋包の内なる金を二分ばかりせよといひて小可その議を役ぶに那衣箱を捨ぬもあらぶいるべし如く彼共に二分ばかり去られども俺がのもとる金をその半分かを取せんやと推辞を他亦諾ずして噫身勝なるとこそ那折ん堤も倘俺カを勅せぎ和郎が包を奪復されて命果敢なくなるべきを悪もあらぶその包さへ奪ひ俺功然るを吾を今はこゝに云云と論ずるに吭下過て熟と考るに只是烏許の誣言に四も五も入ぎ三ツが分よと論じ果てゝ折刀孫達を喚ひ寄れて口と鉗ろ又梓一梓せぞやと呼ひ胸筆用の玉が狂て細められ縛皆画餅なる包が隠し船當なれ金と刀孫達がまろ生命を助けあれとのみなれも肯志道節が眼を瞪ら一声苛立て這奴ども苦し此に隨ふ我ども盗児の虎肉毒蟲と呼ん狡かの如紀畜生が理義を説んの無益ぞ人剣ふ積悪の報ひを思ひ知せんぞと敦圉悍く身を起さ信乃が雲霞時と推禁めて今這奴ども推並て斬るが輒に所為なれども素より急遽旅なれば程遠ゝ及村長ゝより渡と地方の法度を儘ゝ這奴が竊ゝ行裏を亦その主返し遣を縛の便宜もあらんか。

性急なるが要なるぶのるべや。とふを道節諾ずして。介ぶ船を岸が寄せ舊来ゝ里へ赴ん同是その行裏の内を検めそのそもくべ然と躍て野良平が板子の下が隠し措る秋包を索出ゝるゝ。ゝ捩んとつゝ折岸を離れ船るが忽地内りと乗るのあるゝを。信乃道節が驚ぶるゝ。亦是野良平河太郎が火家の子人なるべ。とゝなければ些も擬議せに道節を蹶ゝ立て推捕へんと程が信乃も亦古屋形の内より出て共倍が捕捕んと挑ぶる。その時明月雲を入ゝ雲霞時朧影ありけるが迭ま爭ふ折れば信乃道節がその人の現人多ゝと思ふ。なぜ現人は這両敵の信乃道節ゝ。ん知で同士鞍手とゝ。ゝ雲忽地が月と吐て光隈なくなるゝ。ゝが迭ま面を認得ゝ。方僅再會の本意を遂て這話説が及ぶ然ば信乃道節が件の縛の趣と太角と現人が迭も説示ゝ。結れが疑べくもあるが野良平が贓物が大村生の行裏を穂北の郷士が衣箱を竊盗て千住堤へ卸措ゝが河太郎ゝ又只這ゝ我のゝ郷高が件の両賊を細る折初て見る。那野良平が被なる襦袢が左の片袖ゝ。ゝとゝなるゝ穂北の郷士の宿所が迭ゝ襦袢の袖が是野良平が迭る

品物を破られて送りし大村生の片袖と此彼暗合まつるを郷士の疑ひ解ぎ難く絆の難義に及ひけん。その所以をよくあらぬか。今宵野良平河太郎と郷士の宿所に牽ひ去りて密屋を諦きぬ。愉快とのたまへり。那行裏ハ船に在り且両賊を一見し行裏を取收めん。俱に穂北に赴くべし。とかの日大角現八を雀躍きして不勝の欣ひ共に満面笑片向て額を拆貌に改め信乃道節のうち対ひ宿世の契憑しく今宵料らずも和君ハ環會めの三賊を捕捕りあひ実ぬぐ死幸ひに誘然ハ船に到りて俱に三賊を牽立て氷垣に宿所に赴くさても。とかくの思感ども已ざる志信乃道節ハ先に立て共侶の船に乗り。古反落して船桁に駕ぶる野良平と河太郎と大角現八なるを大角ハ先月に燭に乗れハ果して這三賊ハ郷士千住堤に水を潜ぎ逃亡る。五人ハ立向ひ睨へて安堵れ盗見認忘れ甲俺ハ若ハ送措ぶる衣箱と襦袢の袖の懐に分明なるハ皮箱の王冠夏紛ハ疑れ因れて不慮の難義に及びかも神明佛陀の冥助なるに一夜を過ぎ若ハ是所に在獲るハ是俺異姓の弟兄の賜のなるを

知らぬ。やと辞せずして罵れば野良平と河太郎いうち駭ぎて仰視て忍請んと呼ひけ立ち膝を折布て跪ひ程に現八も亦找寄て三賊を撲地と蹴倒して怒る堪ぎ声高ふ這盗見ハ今ハ何ぞ。ハ若ハ故ぞ俺に永垣に因れて美里の呼ぶに応れも免を伸恥を雪る因果ハ環の旋るる如く善悪必応報ある天罰怎ぞ知らや。と罵責て蹂躙ると。大角急に推禁めて大飼生ぬ俺ハ濡衣を乾す時ハ。ふ那憤に洩さんそ。撲ハ要ぬ所ハ。大塚犬山両箇の理會ぬ。儘ぬ。現八有理と応て舊の処に退ぬ。当時信乃道節ハ大角ぬ対ひて大村和殿の窮れる行裏ハ這里に在り快展検て受取べ。ハ九両の金も。彼替の衣も。ぬ喪ふとも惜包の内ぬ当用の為ぬ中置る。むに足ぬ緊要ぬ一祇に藏め一親の木主ぬ。ぬ祇包に扱て。東西皆ぬ。總て水に濡ぬ。半分ハ乾ぬ。当下大角ハ実父母親父母両家の木主と

恭く取出て小高き処に掛け、うち對ひ合掌して涙を流し、額を地に付て某疎忽の失ひ、姑くも四尊の霊位を賊人のために汚されて、勝河水に濡されと朽ちく思召されん時の不祥といふ事、勸解するも面倒なる罪を償ふ由もなく、そもそも數ならぬ未見の義兄弟の資助をもて尊霊位を迎取るとなるは、先非を許さぬ弥陀仏々々と唱へる孝義殊更実に礼儀ある誠心を信乃道節現八も齊しく感に堪へ謹慎徳行多くは君子と仰ぎ敬ける。既にして大角は親の木主を拜し訖て、又袱を包みかの道節に照る月をつくと瞻仰て、噛犬飼大村生平万言も盡がたし。過去来の話説は迭に笑まれ、欲かれも、その目今の急務はあらば夜いたく二更に及ぶとも其盗賊を捕へ和殿の與は寛恕の怨を雪ん快々准備せよ、とこそ立の程しもあらば穂北の人許多這方を投て来る事あらん。蕉火の光見ゆるは四大士逆ふ佳と。那の穂北の夏行は、まうねく趕蒐来たるふとこそ。とにて此も驚かるる中に道節は呵々とうち笑ひ、やよ大村生犬飼も那奴は何

とか思ひ、俺は水際に立迎へて、よりと報て盗賊を牽遮と遣ふ那奴は趕甲斐なく、要は敵ふ敵はれども然では御尊和殿は解よりも聽ぎて武勇を誇る偏見のそむけ、返報を計るとは、足るべくば、怪れば俺先立て那夏行がみづから来たるが箇様々々に相計ん。犬村と犬飼は推續て水際に立て、徐に他は對面の折、夏行怒て礼を及ぶ、拉て懲し、犬塚は雲時の程、船に乗て好潮合に、その盗賊は牽出て夏行主僕をめ這宅の内に徒らとその進退を説示せば、現八笑て笑坪に入て、その説寛にあらもあらず、快く立出ぬと、心ならず身を起せば、信乃は笑て點頭の、大角は然ざるふ、ものがたりと思へども不吉といふ、ものさびを現八と共侶に進む道節は推續て、水際に下立ける不題再説氷垣夏行が宿所なる重戸が虚仆ぬるを、半晌ぬる知らで在りし小厠夢介辟蔵を、駭誤して連れ人を喚び、夏行は并に奴婢は沸ぎたつ周章たる大家重戸を抱起して共に喚活け湯液を沃ぎ、療術等困ぬるばかりけれども重戸は逆謀り如く稍甦生りしかば、ちまち葬儀と報る折ふ

女壻なりける落鮎有種并に郷尚に部せられて那盗児を撻蒐て彼此へ赴たる衆人も共侶に這時かへり来まけれバ夏行ハ有種と郷尚を捕へし盗児のために衣箱のために片袖のために重戸ハ胸を擂られて死べかりしを剛才さく喚活されども盗児ハ逃去たりと云まで敍圍暴く説示し俺等ハ那奴們ハ西南へハ走るべからず千住河をうち渡して遠く東へ赴んと欲せしともあらん河より東ハ他領なれバ俺們が届ねどもあれバ其頭の用意ありしやの遮莫夜河を渡さねバ輒く前岸へ赴たるかゝらの時ハ聊後れたりとも今速に撻蒐なバ手に入ることもあるべし餓ては進退不便なりみなとく〳〵こゝらへて推續け河原へ来よ先に還りし壮佼們ハ俺に續けと吩咐る怒氣盛りる火急の隊配なり伝納戸に走入て身装して出んとすれバ婿有種も立ながら湯飯をたうべ身を固めて器械合まて共侶に只門外に立出る後方に従ふ血氣の壮佼方僅に遅りしも相加えて其隊約莫二三十餘名鋏叉捍棒なんどを携て利器を挾みて先に找むハ篝火を掉照して河原を投て飛が如くに趕ふ程に千住堤に近着けり。さる程に道節ハ早く船より立出て水際を距ること三反許追隊に主

僕に声をかけて其首に来るハ人々ハ穂北の郷士と聞えたる氷垣殿にあらずやと問かけて誶る夏行有種持たる鎗を横たへ歩を駐めつ佇と見て亦その和殿ハ何処の人ぞと問へバ道節阿容たる色なく某ハ近國より在土へ赴く逆旅の武士也甲夜に料らず這津にて両個の盗児に會しが佶と捆めて責くるほどに那奴們苦痛に堪ずして做来し悪事を招道ぬ。是によりて那奴們が要老の宿所に潜入て衣箱を竊みしなり。その折襦衫の片袖を喪ひしとふるまでも初て具に聞えたが聴て貴宅へ牽もて出るべしよと告んと思ふ折。置塵として衆人の這方を投て走来ぬれバ是必盗児を追隊の人々なるべしと猜して這里に立迎へ縁由を示んの為足留の事に覚ある耶と問れて歡ぶ夏行有種共に莞尓とうち笑て。その天然なる身元其則穂北の郷士氷垣残三夏行之実に示談に違ふことなくけふ未牌左側に衣箱を窃て逃去る両個の盗児を生拘りて既に禁獄せたりしに黄昏時のことなりけん索を脱け室を踰て又逃亡て徃方を知らず程経て悟と聞えしが聊時の後れかども他們が去向ハ這頭ならんと思ふよりて女壻共侶に多勢を催して撻蒐来つ。

陸奥料らぬ和殿ゐを知られて。這吉是左右を呼ぶゐ意外な出る歟ぞとのまま落魄有種も。道節ようち對ひて。某い氷垣が女婿。落魄餘之七有種。その盗賊い何処に存るや願ゐ為く遮与ーぬといへば道節合笑て。ちい勿論のるぞ。那盗賊を生拘りゝい某一個の力ゐまた同名の武士三名ゐ。皆是異姓の兄弟ぞ。某と共ゐ四名。その内中二名い那里ぞ。且他人も對面と。又詳ゐ所の誘い這方へと先ず立てちが仮水際ゐ倡導ふゐ夏行も有種。もあらばべと応た。俱ゐ堤をちち跳。既ゐ水際ゐ赴く程ゐ從ひ来つる衆人い堤の下ゐ聚合ち登時六角現八を夏行ようち對て。ゐゐ氷垣老人狭其们い不幸ゐ。疑似の惑ゐ虐られて辱を受れも料らぬ令愛ゐ扶出されいで真の盗賊を捕捉ん為ゐ脱れ来て不思議ゐ本意を遂る折ちも揣ふて光臨ゐ。ゝいと歓ゝひといはせも果に夏行い怒る声をあらて這盗賊们が胆太くも。趕綱られてせんかとゐ火家の賊と誤合て。あらきんと欲る欲甘鍋ゐて艱んぞと。四馬ゝ鎗を打て面も掉らぬ大角が胸前望て刺んとゐ方。絶這絆の為体ゐ有種も亦三大士を強人と恩

ひゝぐ。此も擬議せぬ共侶ゐ。持る鎗を振回ゝて。現八ようち對い勢に両虎の見来る如く。當るべうもあらぬを現八も大角も驟ぞ敵を引受て電光石火と衝ぞ鎗の刃頭を彼此と遣錯。反喻て一上二下と術を盡ぞ修煉の剽姚瞬く間ゐ且く敵を疲労ん。大角い既ゐ。腕乱ゐ夏行の鎗の蛭巻丁と抓て閃りと凍入る至妙の掙ぞ現八も亦有種の鎗成戛哩と踏落ゝて。透ぞ共ゐ引組て。又姑くい挑ゝかとも。三階松山城と大村鮮之守の奥義を極ゐ就中緝捕ゐ世ゐ敵ゐと稱られる犬飼大村両雄ゐ捷を取るべようの為れば既ゐて夏行ぞ大角ゐ組伏られ。有種い現八ゐ膝ゐ布れて呻吟のぞ。反復さと掙れども。壻も男も穴居所を捉られて。然ゝも餓る昆茶雁鳥の羽節の下る野鶏ようち。脆かけゐと差ゐ。ゐる憤ゐ堪ざりけり。徳ゝ程ゐ夏行ゐ從ひ来つる衆人い。二大士の力も拔て。氷垣落魄壻男の烈ゝ鎗を物ともせぬゝ海内無雙の胆勇武藝ゐ驚ゐ足れて。醉るが如くちち目成ぞとゐけるゐ。脆も夏行有種ゐ持る鎗を打落されて。ゐ組伏られるれば。吐嗟と再駭ゐ諌て。各々鍬又ゐ両ゐ。ゐ群立て

信乃
道節
現八
のら平
大角
四犬武勇と顕れ
孝と貞行有種の徳

あろう
ろうまん

ヨヌ勢と憑む姦謀の力戰大家弁一咄と嘯て競蒐らんと為る程に道節を推隔て若們牛糞馬仕の小人玉欽石欽も別て為く身の程を弁へず敵對做さず先若們の兩個の主は頭を擡て考へて後は推並て屠りて這里の河を埋ん然でも我が援る欲漫る謀ぜて後悔せんと且俺們の做ようと其首を斬やと怒めて声百千の霹靂歴の頭の上を隊るが如く耳を貫く胆を响し勇士の奮激當るべき進難る衆人の今爭ず兩個の主は斬られやまらん刺れやまらんと思ふ心のうち後れて一言半句も返さず咸阿容々と立返巡て一縮ゆ出りあけ居る。その間ふ大角現八は大刀の緒左ゆ解出て夏約と有種を見取も緊く細めて水際ゆ拉る二株の楊柳ゆ繋留て夏約も有種も堪ず怒ゆ声狂く若們殺さず快殺せ俺們命運あふ竭て強人のゆ死ん。生前の恥身後の怨辟言るゆ物ゆれども勇士の弓折れ勢窮る例ハ世ゆ為れヨ。寃魂雷神夜叉とも做て怨を復さで休ぐやそ蹉跎為て罵る。現八と大角ハ互ち對ひ左見右見て永垣の谷塀刀祢も怒を鎮めて聴れ俺們素より害心ゆ。先度の恥を雪んと思ふ心ゆて仔細に示さぬ。ゆゆ戲るゆ似れども疑似の惑ひの覚ぎて人ゆ寃屈を搭れば人ゆ報ゆる寃屈ゆて為ん善ゆ善の報ひあり悪ゆ悪の報ひあり天網疎ゆて漏さずゆ。今實料ゆ義兄弟の資助ゆて那衣箱の盜人を捕へ耳を洗ひ目を拭ひ少も為て善人と寃げる。徳を思ひ知りゆ。後方を考へれば信乃ハ野良平河太郎ゆ索合縮て牽立て船ゆ乗て夏約們の面前へ推居てやれ夏約ゆ為ん這一人ハ尻肛王河太郎と喚做る出没不測の強盗ぞ。鄭高ゆ和主の衣箱を竊ぎて這頭の堤ゆ立て三番ゆ逃る則是這奴ゆ又一人ハ姦宿猫野良平と喚做て居ゆ。ゆも河太郎ゆ又當ぞ鄭高ゆ和主の宿所の垣離笆を潜て出んと為る折被る襦袗の片袖を樹枝ゆ勝て断離て為ん尽ゆと逃亡る。盜見ハ這奴ゆ。これゆ襦袗の片袖を。初咱們ハこれを知ぎ這里ゆ津を求め折這奴們ゆ竊る謀て殺て盤纏を奪んと為る。その機を猜て生拘て毆て積悪を責問て苦痛を堪ぎ任て招道ようと野良平ゆ襦袗の片袖ゆ情由も那衣箱の

なきへに些知はとゞめられども。思ひの外なりと思ひしに俺二箇の義兄弟は和主の息女の資助により。脱れて這里に来にければ。絶て久しき面會に素懐を遂るのみならず。御尚に這犬村が竊れたりし行裹を。取復し給ひし歡びの折から和主们主従が。疑似の惑のまだ醒ず偏見愚痴の心を師として俺兄弟を疑惑来つれば為に耻辱を雪んとて。故意と奴隷を起させつゝ先や再盗児们に。なりかへて些せんとて聴ねと言奨に説諭して。腰より出せる鐵骨の扇を抗て二ツ賊の背を割る可に鞭悩し。又捷悩しつゝそれ強盗前の如くに今一番做出て悪事をなさんやと責懲されて苦と叫ぶ河太郎も野良平も疼痛に堪ず傺々と那衣箱のなる。袖のなる又大角の行裹を竊し折のみまでも。招道分明なりければ驚思に夏行有種初て夢の覚る如く今ゆら慚愧後悔の頭を搔ぬがけり這段はなほ長ければまだ言に姑く筆を輟めて。編を聲ねて巻を更め第八十五回の改筆に説果せを聴ねかし。

里見八犬傳第八輯巻之五終

南總里見八犬傳第八輯巻之六

東都　曲亭主人編次

第八十五回　志を傾けて夏行四賢を留む　夢を占して童戸讖兆を説く

再説夏行有種们は四犬士既に證據を取て冤を伸恥を雪る智辯勇敢飽までに。譴懲されて共侶に羞て頭を低てをり登時犬村大角は道節に威伏せられつゝ堤の下に退き聚ひし夏行の従僕们にうち對ひ。やゝ招きて若们衆人這盗児が招道の趣は皆推並て听つらん。郷尚に這野良平が籬笆を破りて逃し折認得し小厮ありと欲ずなれ件の小厮も這里に来てその一隊にあるなれば。找近着て這奴をみよ。那賊なるか欲なるか熟くみて分明なる實をぞ快々来よといそがせば。衆人は二個の主を保質に念られる勢ひ推辞べうもあらざれば大家斉一応と回て一個の小厮をえらみて得たる吉那折盗児をみ出せしは和郎なるかと、出よと目昆に

指る。得ぬ吉ハ困ド果て頭ど撫たく冶巡ら老。速ぬ立も出難ーと。衆人聽お。推出ハ
きく。却已ハ名ぬ〻ぬれハ。持る棒をうち捨ておもく大角の。身邊ハ杖ど近着て。細められる
両個の賊ど。左さぬ右さぬ沼とえて刀祢さぬ御禹ハ小可ど則ら。生る折。正可まそる盗見ハ是ハ這
奴ぬそひとのひく野良平ハ指ぬ。大角ハうそと領ぬて。介らば汝ハ。ハ用事ハ。両個ハ賊ど
成るべーとのれて沼ぬ吉固辞ハ由る。信乃ハ代て野良平ハ紫ど。食ら成たら。低而ハ大
角ハ夏行ハうち對ぬ。氷垣老人今這小厮ハ。ハ狗太郎と野良平ハ招道
分明ぬとハ。這盗見ど認得る。小厮ハ。ハ疑ぬ〻
めぬ〻ん。ぬ〻ハ面目則ハ這小厮ハ。ハ糾ーたら。低ても怒ハの解ぬ。ハ又道節ハ。ハ舊ハ
水際ハ退ぬ歩ら夏ハ有種ハうち對ひて。頑愚の老人ぬ智の壯佼ぬ。ハ脛ハ洗れけ。俺ハ
義兄弟大飼ハ勇士ぬれども怒ハ乗ーて人を害ぬ。ハ欲ぬ。況這大村ハ料ぬ二賊ハ
獲ぬ。和主ハ疑ひど。解ぬ〻ぬ。折ら和主ハ主後ハ這ハ。ハ来ぬ。ハ絆

低々と說ハ。二賊ど。ぬ〻ぬ和主ハ飽ぬ君子ど虐げる行ぬ
知るのぬ〻ハ。大飼大村二兄弟ハ恥ど雪ハ。ハ足ハ懲ーて思ひ知せぬ。ハ思ひ
說ど。ハ考ぬ。ハ如ハ計ら。疑心暗鬼ど生ぬ。ハ世ハ常言ハ違ぬ。ハ疑ハ迷
ひど解けども悟らぬ。ハ身ハ破滅ハ及ぬ。ハ愚ぬ。ハ所ハ。ハ低ても先非ど悔ぬ。ハ
ぬ〻ハ甚麽ぬ。ハ詞徐ハ責ハ問れる夏ハ有種ハ。ハ義て今ハ。ハ後悔ハ外ら
ぬ。ハ中ハ夏ハ。ハ嗟嘆ハ堪ぬ。ハ肅然と四大士ぬ。ハ某暗愚ハ思慮足ら。ハ女児
重戸ハ意見ど用ひ。ハ漫ぬ二君子ど免げる。ハ罪実ハ萬死ハ當ら。非如自今ハ。ハ
縛頸ど。ハ撃ら。ハ自業自得ぬ。ハ悲ハ。ハ重戸ハ忠恕惻隱ハ。ハ顧て
壻有種ど。ハ許ー。ハ身後ハ。ハ辜ど。ハ眞府ハ後安ら。ハ考ぬ。ハ這美ど海容ぬ。ハ憑む。ハ
有種推禁めて。ハ〻ハ。ハ初ハ。ハ二君ハ。ハ諸君願ハ。ハ聞ぬ。ハ某ハ。ハ
那盗見ハ。ハ提難て。ハ日甚春て。ハ宿所ハ。ハ折養父ハ。ハ君逐電ハ。ハ絆ど。ハ簡様々ど。ハ報

旅によりて共侶に這里へ趕蒐来つる。虚実を糾すに暇もなかりし。縡倉卒に起るといへども倶に惴りし這身の不覚罪を免る所なし。只某が首を刎て親を許させ給ひねと咽語がましく孝烈慈愛に死を争ふをも已ざりしを。四犬士亦一感じぬる中に大角現八は歎息して左見右見つ。氷垣老人落鮎生儞にのいはしと労ざる歟。俺們素より害心なし。過て改るに憚ることなかれとある聖教をしらずや。先非を悟りし怠状の趣を労らへ俺們も亦然なし。今はしも死活を論ぜんやと詞等く慰めて夏引と有種に被たる索を解捨て分捕なしたる両刀を誘とそ返し與るにぞ夏引も有種もいよゝ羞て左右なく取らず共侶に跪きて某們幸に寛仁大度の意を示されて首を續しめ給ふは是再生の洪恩なり。かゝれば四君子は素是何州の豪傑ぞ。願ふは本貫高姓を具に知らしめ給へかし。子孫に傳へて後の世まで永く武徳を仰ぐべしといひて名告らせたまひねと請求るに西二度真実帰伏の心操亦他事もなく見えしかば歓びあへり現八大角倶に莞尔とうち笑て適變し纔悔の誠心衍心を知るものは誰も

かくてそあるべけれ。身不肖なれども犬士の一人某は下野なる赤岩の人氏也。義に仗て故郷を去たる大村大角礼儀也と名告れば亦現八も俺は下總許我の浪糧人犬飼現八信道也と告りはて倫をとふれば信乃道節の共侶に武藏豊嶋の大塚人犬塚信乃戌孝同國煉馬平左衛門倍盛主の残黨に然るものありと知られたる犬山道節忠與過世に結びし義兄弟なり。その外に三名あり。相別れしより往方を知らねども年来諸國を巡りし甲斐ありて今宵料らず犬飼犬村二兄弟に環會ぬことをもつてみなとるゑと名告るをうち聞く夏引有種驚きてまづ目を合し原来五六年前に氏這頭に風声隠れなかりし那大塚より程近なる庚申塚の法場を脱ての隨に閙まく同盟冤枉の罪人を拯合ぬとききえたる犬士なるへをまち欲と向へば信乃現八と共に合笑領きて問るゝ如く俺們が拯合たる義兄弟は大川荘助義任と喚做し一箇の俊傑なりし。這外に大甲大江の二犬士と倶に七名忠信孝義も伯仲も優劣のなきものと報れば。いよゝ驚き感ずる夏引は恭しく。道節もうち對ひて犬山賢君某が女壻有種は煉馬の

舎兄豊嶋刑部左衛門尉信盛主に仕へるのみならず、亦有種も道節まうち對して、
烏許がまくひとも某が父落魄山岩水員種と喚へまつり、則豊嶋の家臣之三親を奉く世戎
去りければ、某も亦総角より、信盛主に使れて童扈従でひとり豊嶋の一族滅亡の折、怒に
數ヶ漏されく、身を措く所なくまうふ艱父永垣殘元妻に某が為に伯母なりければ竊に這地に
落留りて、女兒と妻せられ義父と稱へ義子と喚れて今日に及べる、和君が豊嶋の一族
煉馬の旧臣なりとのせしとおくに初て教諭せられて懐舊の情大に起こ先考大山道策大人と
江五田池代の戦ひに比類なき挺ぬきを陣死せしめ、故
あるを相譚ん。詞敵もまうふ君家代與に舊縁をのせ賢者に因て結ぶ這身光を増
さまほしうる今まで諸君に事あらば一臂の力を盡さまほしかりけり。肝胆を吐素生を
演べ世に隔てまうけ、道節も亦怡悦に勝ず這年来義兄弟と索て諸國を徧歴
に豊嶋煉馬の殘黨ぞ名告あるとまうふ憶ぬ和殿の素生を問て故人に偶ぬる心

地ぞまるらと憑しくひとその強ひて給ふ信乃現八大角も共伯に稱賛して然雖憂て知己と
る世の塞翁が馬なりけり。是に愛ふ。ぬきとて弁一奇偶を祝ひけり。早て現八を又夏幼ふ
對ひて。衢に衆人のいへれば知る和殿に這頭三郷を冊裴の功あるあらばやなの氏も皆まく
ほめられと問まく夏幼さに某原に丹治當黨ぞ弱冠の氏鎌倉の管領持氏朝臣に仕へたり。
余れば持氏御滅亡の後春王安王両公逃のおん與る結城の城に盾籠りて武藏の人氏大
塚匠作二成と共伯に城の一方を成りに公逃御武運冊せめぬ諸將の防禦画餅とまうて
落城に及び日某は憑に寄隊の囲を殺脱て遠く這地に落留り地頭穂北氏に身を富
せ。做まるもまくもりけるに結城ぞ某が隊に隷る士卒百名許某が迹を慕ひて俱に這
地に聚合なり當時穂北梅田柳原の三郷に年来の兵火に荒れて一歩に耕ぬまく豊農
商離散まうに地頭も亡ぶ妻子眷属を携て愁訴の為に京師に赴く
室町殿に仕へまうに応仁の乱ぬまうに戦死しぬ。その妻子ぞ亦なりまぬれば這地に

草野なりたり。當日某落人們と力田を薦め地を闢して倶に心力を盡せしに年ゝ水旱の
患なく利を得る事の大かたならねば人咸某を徳として推て三御の長とす是より先に某は舊
地頭穗北氏の徒弟女の獨迭されて這地に在りしを娶りて女兒を産せしを不幸にして
男兒あらず妻は近屬身まかりぬ介程に豐嶋の落人落鮎餘之七有種は亡妻の侄にて
して武勇の壯佼なるのみ含藏措くこと両三年その行状を試るに心ざま勇悍くして人の尻馬に
乗るものならねばよく耕農を奨して資助となすこと尠からねば女壻養嗣にせしに又那豐嶋の
落人們が有種のうへを傳聞て身を寓せ托に來つもの八九十名に及びしかば又公們も田地を
取せて斂に昌都曾に劣らずなりぬ。然れば某が結城を落て穗北氏に寓居せしより今に至
まで四十一年慈而三御の長に做りしより十四年を歷ぬるを報れば現に道節は倶に當まで
鳴らして名も亦一奇偶に氷垣老人のまだ知らざる俺這兄弟犬塚生は和殿が共に結城で
城の一方を成ぞあれどいはれる大塚匠作三戍の爲には嫡孫その嗣大塚番作一戍の獨子なり

ひそやかに百夏の胆を撲して原來亦是舊縁あり。嘉吉に結城籠城せし比某年尚弱なり
けれど匠作主に指南せられて師弟のおもひを做しつ其日に那人は戰歿して忠誠武名を世に知られ
某は存命て田舍翁と做りたる識者の爲に羞るところなれど大塚主は何ぞもの故に番作公の
時より家系を損て他姓を冒しぬひたると問れて信乃は愀然と目をおさへて嗟嘆しつその疑
ひはあるべけれど父番作ゞ又病によりて故郷に退隱せられしに姉夫大塚蟇六の奸曲不義を
忌しあまりて大塚の大の字に一點を加えて他姓を冒したるにあらねど是より俺身に及ぶまで犬
塚をもて家號とせし。偶然に出るといへども是宿因の致す所と易らぬ奇縁故なり某に甲
斐にて旅宿せし折外戚に舊縁ありける四六城木工作と喚做もの名告あふところなり
なし今又さきに大父の舊友氷垣の翁に値遇せしは思ひがけなき幸ひにてか叙世のなりゆきまは
感悅ならずのよろこびなりとて翁に夏行有種某們は衣食足て這地に年を歷しのみ
親類ならぬもの多なり犬塚犬山二君子の舊故を厚らせらるは犬飼犬村自餘の諸君も介意

ろくろくとして願ひくれ恁のぐ身の程を思はずして武芸を嗜みく強
敵を侮とへども後れを取るとろろーふ今宵大村犬飼の三君子刺んとせー折その胸前より
忽然と光を放ち眼を射て働出る鎗の狂ひ飛ぶ此も捷と攬るとるるぶ大刀を抜き三君の
為ふ組伏られぬ武芸力量その差あって勝負は尉ぞ某ども今宵和殿們親子は
ろるくいと疑惑とく向ける信乃道節八尉は武芸塾の疎ろーふあるねども大飼は二階松の高弟にて緝捕の敵るーと稱せるる大村生の
修煉の程は今宵初てぞるるのまいまぞその師と詳はせざれ是も赤犬飼の伯仲去は武芸塾
且俺們七犬士は感得の霊玉ある各々懐ふ藏めるる是ぞの故欲と説諭せざる夜行と有
種は亦復驚と感服と原来諸君は尋常ならぬ勇士にあらざりけり既ふ夜は深る宿
所へ伴ひまるるとのひつ衆僕とるるて若們は三四名大ぞ宿所かの由ぞて聞つるーを重
戸ふ報て賓客儲とせよとのひ快くあれと言せば義りぬと壯佼們は三四名身と起て穂

北を投て走りけの登時現八大角は又夏行ふ対て義兄弟の資助まるる生拘られる這
二賊は地方の法度もあるべふ和殿の隨意計らひの夏行異議もるく貴教は趣義
地方ふ稀る兇賊を輒く捕られは是四君子は武徳ふ憑る俺は郷の幸あるるふ思を
鋤に害を除く鄰郡まの慶祥るるん此の如く草賊は速ふ首を刎て彼此人ふ示まーー權且
等せのれと心て躯て有種はもるるさるる共伯ふ河太郎野良平ふ対ひ罪責て俱ふ
刀を抜閃めるる有種は河太郎は首を磯と斬る落せば夏行は野良平は首を刎る力を斂め
却得る吉ふ分付て船の板子を拿寄せ腰る黒羊は筆とて板子は件は徒と三賊の
罪科を記着て又壯佼們を召よせて箇様ると分付れば壯佼們はるるて二箇の首級を水
際る樹枝ふ梟並べて板子の札はその樹の幹は索のそ括着ふけ四大士は夏行の決断ふ
礙滞るる且神速の計は老功あるとぞ思はるる支果て夏行有種は四大士は相俱にて穂
北へ帰せる程は三十餘名の従類は夏行有種の鎗と摧る或は船笠高と拿抗て鋸又とるる

共に一膳ゐしを荷擔ふもあり又續松を乗もありて先に立後に跟に陸續として從ひけり。
くてこのよ
偖而這宵の更闌て信乃道節現八大角が氷垣親子に伴れて穂北の宿所に来れば。
家僕(しもべ)ども玄関に出迎て客房に案内しまたもや歎待態大かたならず且て夏引有種が衣裳を
更め出て来る。准備の夜飯と四天士に羞めるをせ程ふ暫曉ふるまひ客も主も共に契
て。辞て枕に就ける。却詰朝夏引が荘客們は吩咐て那賊船を破却さ。這日宿所に
酒宴を儲て四天士を管待る。野蔬海錯數を盡して田舎に稀なる調理なり。四天士も
相稱へて盃を受巡らしけり。その時世智介小才二は足の撲傷なれど四天士の接待の趣を
偖守て駭怕れて。有種に就て現八大角が今日の昨日の無礼を陪話せば。現八と大角が今日の
烏許を聞て。
その痛所を問慰め。人意なるべんを為ふとて共に不血を取せければ。世智介小才二は歎び禀て初て安
心せり。信乃道節も是迄の情由を知て那計畧を誉めかば大家哄と笑ひ

奥に隔もあるべきなれば。然ば現八大角は這折とて夏引が車戸に人を知るオあり。囚徒の
内に拯出せ。德と稱へ恩と感じ。いざ一下び面前に這欺びを演まく欲。餘の七主も共倡に
冥く待へるべしと。憑めば夏引合笑て。犬飼犬村二君子の拙女を療養美に分過ら勿論他人
負実に親に不孝の幼ひ者。良人に不遜の事もあるを母親の世を去らしより呂に内を理る
のみ。這地の字を樣野と喚び做す甲斐のあるに似れど何でふく虚実を辨じ人を知るのオあん
や。然るに昨日に他一人犬飼大村二君子と那賊を捕へ捉へ。某を諫めに聽るもあるぞ
けれ。謀りて落しまゐらせ。その智慧も亦廣大なり。日屬に十倍をうけ故ある支欲あるに
似ずとて。とのへ有種真実立てその左まれ右もわれ車戸に這里に系らせ姑く等せ。
他に奥に退けり。そ侯程に道節が夏引に向ふ対ひて今愛の慈善賢明犬飼犬村の拯
出する那件の趣へその崖畧を少知りたるまゐ。善行方便人食感佩せざるなし。
今試にその可否を論せんに聊破隙るに非ず。坐奥に這義をいべ欲といへ夏引うち

夏行有種
四犬士を
歓待を
信乃
現八
大角

道節
あんたら
おも戸

笑て。その何度欲知らねども。願ふい教ゆへかと。心で膝を拭ふ。道節肩を筋ふ把て。恁いで善を喜せで。猶且人ふ備らんと。求ふ似れども。今愛の初より。犬村大飼の賊ゑらめと。知りゆひしい世の人の是及びる所。知ずゑる故ふ親ゑ隠し。放遣りゆひい。寃屈の與ふ人を殺し。後の出ずのあらせーと。思ひ。誠心ゆ。是も亦世の人の及ざる所。然ども。昨宵和殿親子共。犬飼犬村を趕蒐て。千住河原ふ来ゆひ。折犬飼犬村某們ゆ。只那怨を復えんと。和殿親子を許さとゑく。従類まぐも屠りゑ。是今愛の慈悲善行い還てその身の仇ふと。親を損ひ。良人を害ゆる。衍心とゑると。爭何いせん。かく。故ゑ知命者い。仁も亦做さと。勿れ好事もゑ。如ぎとい。現仁を做さと欲て。危殃ふあゆ。宋襄の敗軍。微生の橋梁。仁と行ひ信を守れとその機変を知ざる故ふ。遂ふ身を殺ゆ。禍あり。好事い吉事。善事とよ。事ゑれば。凶事ゑる。仁を做さと欲ゑるより。不仁を做さと慎むゆ。如ぎ好事あれと願んより。凶事ゑ如ぎ。仁もゑく。不仁もゑく。好事もゑく。凶事もゑを名つけて。吾為とふ。這義より。蘇東坡ゆ。

宋の襄王。微の河を渉ゆて。敗軍せゆ。左傳ふ。微生が女子と。約束せゆ。三年ゑ。橋ゑ。抱ひて。死せゆ。説ふ載ゆ。宋襄の仁。微生の信と。蓋の辟言ふ。

事い。静坐とい。ゑ。恁りけれども。大飼犬村及某們ふ至ゆて。和殿を害ゆる心ゑく。怨雖言還て。知己とゑゆて。欲ひ。盡を。主ゆ。客ゆ。幸ふ。免れゑるふ。ゑ。と。藤柏鳴て。論ゆを。信乃ふ。忍ふ。推禁め。大山和殿の辨論。是刑名家の旨ふ。と。今戰國の人。意ふ。ち。もゑ。と。ゑ。俺ありふ。然ら。昨主人の今愛の科ゑ。衍ゑ。者を。衍て。殺さ。遂ふ。出ずを。禀て。親い。ち。ゑ。子孫の與ゆ。宜。かゑ。と。思ふ。れい。勉て。仁を。做せ。ふ。ゑ。ゑ。是。その苦計い。他人の與ゆ。意い。親と良人の與ゑ。恁れ。他人ふ。厚く。て。親ゆ。薄く。と。ゑ。べく。べ。その。做を所ふ。ゑ。ゑ。ね。親ふ。叛くふ。似ゑ。と。ゑ。その。親の。衍を。補ふ。旨い。是。孝。孝ゆ。義ゆ。慈悲。廣大の。誠を。以。二天。十。戮。放遣りゆひ。大村大飼甘木們ゆ。恩を。感じ。德を。喜て。主人を。害ゆる。心ゑく。恥を。雪めーゆ。ゑ。ゑ。ゑ。ゑ。ゑ。ゑ。ゑ。則賢女の致を所。天鑒虛。かゑ。ゑ。ふ。ゑ。ゑ。ゑ。善ゆ。善の。報ひ。ゆ。悪ふ。悪の。報ひ。ゆ。宋襄の仁微生の信と。旨を。同く。ゑて。語ゑ。べく。べ。然い。出ずゑ。と。徐ゆふ。理義を。演ゑる。討論ゑ。道節耳を。傾ど。現ゑ。ゑれ。その。理ゆ。愚心論い。思ひの。足ら。ゑ。ら。ゑ。氷垣。王人某ゑ。醉語を。意ふ。

揖ゆるると陪語々呵々とうち笑へば現八も大角も信乃が議論を喜ばるるそぶ中ゆ夏幼を。
聞果て貌を改め信乃道節ふうち對ひて大山主の宏論ふうち学く所分明やちのうへあらじと。
必ずや犬塚主ふうち超て道理を聲ーぬこぬる妙論耳新やそ。仇と老学ふるりぬべー実ふ
感服つまるりぬと稱て亦復四大士ふ盃を薦めけり浩処ふ主人の女児重戸ハ衣裳を更めそ。
良人ふ引れてやうやく容房ふ出て来ふければ現八大角ハ遽ーく席を避け相迎へてうう落點
生の御内室良善の御志念届そて某们幸ひ老大人御親子と友垣を結ぶと皆是賢
婦人の貺るり最歓ーくいとへ重戸ハ額をつ紀て浅紀女子の計ひも葉さをぬる刀祢達ハ海
成を御心廣けれ怨を解そて風波の立ぎるふーけの囲坐ハ千金ふを待るめれ素ふり田舎の
ゆるれば歎待態の疎ぎまるふを東西もゆるれど父も夫も日を経るまぞよ只ちん宿をせすく
ほーと稟をうう外ハ待ぐぎかとのやうちぐく信乃道節も共ふ名を告り對面ときのふの計
ひを巻めーぐ夏幼ハ笑ーけふ女児を身邊ふ侍らと。重戸听ね賓客達ふ係ハ人を知る才

ありとて太く誉させるひかども親ふ年来日蜀係ふ然ぎまるふ眼力ハあるぞハ名ふを
那禰祢の兵袖の明証あるぞう退けて大村大飼二君子を那賊ふ敵ぞと敵定めハ故ある夕歓
いうふぞや。と問れて重戸ハ羞白ぎるる頭を擡げ衣領撥拊てちん疑ひハ理ふ奴ふりとぞ初ふ
那人さるの賊ふるぬを知るべうハ待ぐ拉ぐ隔昨日の暁ふいと美ーな神女の枕ふ立せ王ひく奴を
喝て宣ふやう羽立木中の仇及ふ箇様々々の旅客二名你の親ふ疑れく脱ぐぞ大尼あん。
他们ハ決ーて丈人ふ俺與ハ過せる志氣潔白の義士ふーてぞ義を結びて弟兄たる
の他们と共ふハ名ふ這们ぞ尼難ふ折毎ふ俺影ふ立形ふ添ふて救ざるこ言うーかども
なるまま習ふ尼難ハ疑似の一種ふるとそを解んとハとかうう你先ふ這意を汲く面を
犯ー親を諫めて身聴れぞハ便直ふるく他们を放遣りれふー怪計らぐ憂を轉ーく歓び
と做を福ハやぐん然ぞを惑ふて共ふ狐疑せハ福還て禍とるを瞬く間ふて親も良人も非
命ふ死ん奴謹ゆよ忘るるとと妙音高く示ーあふとなるハ夢ハ覚待ふ覚見ての後ふ胸事を

宍動して平なるねがひと怪しくも惶さに心に秘てありけるに果しくきのふ盗児を穿鑿て事猛に起りし旅ゆゑ両個の刀禰達の這里に囚れあるしが原来正夢なりきと心に悟りて雲妾時にあらば性起るをあやしみ身を諫て詞を盡し給ふしかども泡沫夢幻と世にいふ果敢なき事を告示さば只叱らるのみならんと做よく聴ねども亦いはなりにはこ優くてわらんと臥べかりで又夢に神の教に儘して示現に逢ぬ昨宵の夢を告ぬ固堅も皆是神の神謀にありけるものを知ず倒為なる賢女よ才女よと宣ひまするも恥しけれどもいよいよ驚く夏行有種原来然なりしかける鉄奇なりと感歎式声よりも先に四犬士は皆目と目を見合して倶に悟りてその意を隠さず正に是伏姫上の神霊擁護に疑ひなし其則夏行有種雖戸に那姫上の其又の顛末箇様々々と説示して伏姫上は俺们が過世の母にてましませば倍る霊験あり今はしも犬塚が許我に行徳猿石の窮阨又犬川が犬塚にて軍木箙上に誣られし孫又道節们五犬士の芒芽山にてありし万死を出て一生をぬきしも又現八大角が赤岩返壁の大厄難も皆是那姫上の影に立形に添ての護

らせ給ひし冥助なりけんを神ならぬ身のはかなさも悟らで年過しけり許させたまへと各々念起て雲妾時合掌せしを解しく却夏行们に那物語を及びしば夏行有種は感じ雖戸も膝の找むと覚ざりしよく驚きまして感じて里見殿の姫上の神霊応験灼然なるを世に有がたき奇談なるに各位の幾番か危窮の厄に遇ひなからその志様らずして年を歴ることなく友同士の所在を索ぬるも亦是忠義士なりけり几眼珠玉と魚目を辨せぬ[illegible]昨の非をあらへば雲妾時と賊とそ論じし其の悔しけれ願ふは一年二三个月杖を駐めて看覚ならに謝せよと叮嚀に勧解ども終日相譚ける程に而郷食饌果しかば四犬士はその次の日に別を告て去んとせしを夏行有種推禁めてさるごとき強顔く速に出て去んと宣ふを亦復自餘の犬士の所在を索巡らんとかのみを申限り知られぬ旅なるは権且這里にとどませ給へ縁ならば居ながら再會の時なきにしもあらず冬に赴けば雪を犯し霜を踏て遥けき路を去んより春まで逗留あるべしとこもごも急ぐは要なきことなるべしと詞を盡して放さねば四

犬士は已とゝなるを遂るその意を儘しけり。是より後犬士們は人の側ゆとゝ迯折過去方城迷ふ報るゆ道節は五ヶ年前荒芽山の窮難より犬川荘介と共侶ゆ四国九州の畫処まゝも徧歴既ゆ四稔を及び。去歳は甲斐の石禾郡。大法師の寺院ゆ宿りて。大井ゆ照文ゆ名告あひ一支の趣。ゆ後犬川荘介は自餘の犬士を復索んとて石禾と音途を分ゆ。その冬信乃が窮厄。道節謀りて拯ひ。四六城木工作并ゆ里見氏五の君濱路姫の。淫婦夏引淡雪奈四郎。その僕媼内悃内們の。甲斐の國守武田氏の信乃道節ゆ對面の。あれゆより信乃道節は武田氏招待の催あるを聞知りて。十一月の下浣蜜崎照文們と共侶ゆ濱路姫ゆ倶して。石禾と立去く。武藏下總の封彊分る里田河ゆ來る道中四谷の原を。那奈四郎は悪僕媼内ゆ傷つけられ信乃を料らず奈四郎と。數ヶ果て姫のゐ與ゆ四六城木工作の怨を復せり。その日蜜崎照文ゆ濱路姫ゆ後ひまりて。河を渡て安房へ赴く。信乃道節は荘介を索ゆて甲斐ゆ在り。

ゆ。辨の由を告んとて。豫て約束の國郡を那須とうち巡りゆ何処ゆ在んのまだゆあらぬ。今茲は奥の會津より。白河を経て下野る那須三荒山へ向ひ。ゆ。甲斐の岑近く立る。大法師ゆ消息して荘介が帰來るを待を問んと思ひ。遂ゆ這里まで來るとの憂苦艱難瑰奇を過ゆ支の物かくらひ。現八と大角は耳を側て嘆唱く。聞くと約莫一晌許。就中濱路姫の一大奇支ゆ胸を淡く。左ゆも右ゆも俺黨は里見殿ゆ宿因あるとゆ。分節を合る如く犬山生の女弟と雪え。犬塚生と合巹の約束を遂ざりける濱路亡女と五の君と同名るも亦奇る。就て某們が〳〵は。箇様々々のゆあるとて。迯代ゆ説示も現八を五稔已前荒芽山ゆ。危難の折敵の重圍を殺脱て。獨四犬士を索ねり。その比行徳ゆ赴て小文五を訪けるゆ他は故郷ゆかゝる來ぬ。曳ゆ單節の往方を。竟ゆ知るよりるり。京師ゆ赴て旅宿りて。一稔あまり在りり。ゆ。ゆ後又岐岨路より下野ゆ赴く折荒芽山ゆ立寄り

る。細緒の茶店鵙平の。庚申山の奇異怪談赤岩一角武遠の。寃魂の誨まよ
ひて。返壁る柴門を敲く。大村角太郎あり。假一角牙二郎们の。毒婦船虫竜
山逆東太縁連の。又現八が赤岩の試毅。角太郎夫婦の窮阨。烈女雛衣が自殺ま
よる。礼字の神玉仇を倒して。よくその良人の危厄を拯て。且現八が豫て謀る。角太郎の淺傷の
鮮血を。親の髑髏ま沃ぎ。親子の證据掲焉。角太郎の惑を醒め。妖怪を撥ま發覺く。
角太郎は斃れ。是よりして。角太郎八字を大角と改めて。家を售り故郷を離れ自餘の犬士ま
遇んとて。現八と共侶ま。偏歴三稔を及びぬ。一大士ま。二
親の墓ま詣。并ま亡妻雛衣の三回忌辰を。佛事を執行て。小文五吾八今
も在ますや。問んとて。又現八と共侶ま。良久這地まで來る。頭より尾まで。現八これを談まて。
大角も亦語を續ぎて。閑談ま日の暮るを覚ず。説果て。大角八護身囊ま藏やる。那礼
字の玉を取出て。信乃道節まれを見て。又衣領を推開て。左の乳の下より。腋に邊ま

犬士の玉を見せ疵を見て且亦來歴を報ずと

及びて。疵さへ這折て。信乃道節八ま見る毎に共ま感嘆の声を。斷ま那折の勢を。粤ま
倩想像れば。現八の義勇。大角の純孝。雛衣の苦節。ひとつ那山猫ま。ひとつ暮未曾有の
珍説ま。憐むべく哀むべく。驚くべく歎ぶべき事情の然るべきを。又今ひとつまた心地の節を
拍て稱へ。當下大角又ま甘ま。犬飼と倶ま舊里ま立寄りて。世ま忘れ妻を。ひ續けて。
女ま。故郷を草莽ひけん。勇士の本意ま。思ひ。笑ひま。知ひども。那雛衣八甘ま。艱家孔
獨女ま。養父八小父を師匠ま。然るに亡妻雛衣八俺身の與ま。ま伏て。仇を仆せ。大功ま。
且甘ま八其比。まで父の非命ま終りて。知らず。変化ま仕へ。大飼主の好意を。父を仇ま
妖怪を撃捕ることを。ま忘れ。ま足ま。況養父の洪恩德義ま。報ひもせば義
ま。ま。そ。莊園ま。護られば。心ま恥る。ヨヌ。切て妻の三回忌を。故郷ま還りて。菩提を
吊ま。養家の與ま萬一の恩義ま答るとぞ。ま。犬飼主と。計りて。形ま。
ま。這意を。查ぬかと。報る詞の不樂げなるを。信乃八聞て。慰めて。ま。理義ま

稱へ。誰ゝ云ひとなりゝ。異邦に聖と呼えて。禹が洪水を理め。折六七稔歴佐隨ふ。
已が家の頭を過ぎど。立寄らぬりとのふるあるの臣る道と盡せがるり。犬村生いまゞ仕へ
君に同因果の友あり。と呼ぶ。索巡まるのに。進退不定の旅ゆきに非如然る意味あるを
とも幾番故郷へ立寄れぐ。思むと一切ふ。且大山と初て大飼犬川俺身はぐ。
皆故あり。て舊里へ立寄ると云ざるめ。然ば年来二親の墓ふ詣ると克ふ。いち歎く
のみるふ犬村生に異ふて。所親ふ置酒して別を告げ。公然として舊里を愛ゝ立去
ぬるひ。は最美しゝるるりと。ふ道節現八も寔ふ然と応ゝ。信乃が評語ふ身我不
樂ゝ。且大角の人と為り温順ふして孝義ふ厚ゝ。亦ゝ為ひ。

第八十回

道節再復讐を謀る　大巧ふ妖賊を滅す

復説信乃道節現八大角は主人夏目有種が留るとの懇切ふ。憶ゝ這里ふ日を

弥ぶる。秋に過ぬ冬も。十月の中澣ふ。なりけり。偖而有一日信乃道節は現八大角ふ
對ひて。ふ去歳の冬某们ら石禾の指月院を立去り。折蟹崎十一郎照文ふ
従ひ来ふ。雑兵一両名を留め措き。事ある折は相告げ。と約束せ。れ。ど。一
たび那処を去り。ぬ。まゞ。壮介ふ環ふ。会ふ。且某们は国の守武田殿の招ふ応ぜ。
然るを今ゝ立かへり。て那道場ふ到らんとは。影護ふ所ある。這里より脚力を遣ふ。壯介
那寺ふ還りて虞るや否ゝと訪ふ。并ふ今番和君们と環会ひる趣ゝ。大法師ふ報
まく欲ふ。這義をあるるるか。とふを現八大角は。ちらちら聞く。その美ゝ宜かん然ゝ。
人を夾ふ。て甲斐へ遣ふ。まゝ。ふ某们ら連立ゝ。指月院ふ赴くべ。然ゝ。れ。ば文書の煩
ひなく。大法師ふ對面して委曲を演るふ便よ。且大川ぐがう来て那処ふ在ゝ。ば伴ふ。
速ふかゝ来てんいまゞ那処ふあゝ。ぎといひ。時宜ふ。ふ。ふ。
儘ゝ。ぬ。ぎ。ぬ。ぬ。ぬ。信乃道節は。ぬ。ぬ。大かゝ。ぬ。和君们那処ふ赴ぬ。ぬ。百書翰ふも

弥倍意を盡さんと自由ならず進退随意ならずと相譚果て却徳をぞ夏行有種に
告しかば夏行们はよしと𠀋て左らば伴當をまねらせん俱して首途ならへと犬士を現八大角へ
共に推辞で従ふ伴當ありて只煩はしき程なかりて來つべしとてその詰旦別を告て甲斐路を
さして出て行く旅に熟たる壮士の行装も綰はぜ走舊の依たる菅笠と雨衣のみ携て急ぎ
送る夏行有種信乃道節も河原まで出て訣を分ちけり曰是より先に夏行は幹浄なる
小室を四犬士の出居と定めて東西不自由なく是を賄ひ三度の饌も等閑ならずその間ゆきき
𪜈しき果子を薦め酒を薦め折々ふは有種を侍らしてその身も倶に武を講じ兵を論じて慰めける
その用意親切なれば貳あるべくもあらねば道節竊に歎じて一日側に人なき折有種に云く
我儕はれしたりしもある録皇裏に某上もなる白井の城の郊外に家家扇谷定正を欺詐
寓りつ組伏て刺殺して首級を捕りしに敵にも逆用心ありてその真の定正ならで池袋の
戦ひに俺君煉馬殿に鎗を鋳る扇谷の家臣にて越杉駝一郎遠安と喚做もの𪜈

有けるに這折に父の仇なる竈門三宝平を殺しかど是まで宿志を果さねば猶剰敵の謀
臣巨田助友に謀られて荒芽山の危難あり俺のみならで犬塚犬川犬飼犬田も敵に當
りて四零八落になりしより今なほ全聚らず且猎平の世四郎とその妻音音も戦没せ
けん哉る單節も行方知らずなりぬ生死存亡詳ならず実に君父の讐は敵なる那定正を討漏
らし已に恕ぶ年を累ぬれども大敵ならば又ゆるかに狙撃る便りも無く過世ありけん義兄弟に環り
あひて後にそを思ひかゝれど立てよなる光陰五稔を過したれば今は番料ものは宅に
寓居するのみならで扇谷定正は五十子の城に在と聞も四番まで足ぬ程なれば虚実を
頃日も易く寛に便りなしもの王在は百名借しく他が外出を覗ひて短兵急に責撃べ
宿望立地に成就せん那大敵を討捕て家裏に安房に赴き里見殿に仕まつらば世に恥る
ところはべし這義を兼引ものかと思ひて相譚ひしを有種聴て異議に及ず且歎じて答
るやう盛なるかな忠義の寃甚なれども今ゆくに止及ぶ所ならねど幸ひにして用ひなりしも

あくべ驥尾に附く一臂の力を盡さん。那定正は俺亡君豊嶋殿の與に仇を報ずに白井城
あり。君が武勇の風声を知ざるにあらねども當時俺身は年も壱四二十に足ず疎程にて志も
定まらず資ありのもあるかを復讎言のもあるを乃びがてと思ひ今は進退一定せず支度行
ふに便りあり且豊嶋の残兵の某が迹を慕ふて當日這里に聚会するの無慮八十名
あり皆荘客にあらねども軍陣に熟したるもの他們に機密を其示して復讎言の日に従せ
んと他們も亦亡君の怨を復せんと望ずば咸欣びて従ふべし。某も亦親に告ぐ俱に定正を一
箭射んと這度を元さんやとのぶを道節推禁めて曰決して無用なり和殿は人の後とありて
妻子あり養父は老たり倘本意を遂ぐ敵の為に戦殺せば數代を没すこと養
家の與に不義とあらん縱本意を遂るとも其後に敵を知られて大軍這里に寄来
るあらば何を以て防ぐべき是災害を送ること疾し和殿の意あらば俺與に五十子の
城を折て喫すべし虚実を知せるべ。某も亦折て那里に及べ覘んと這義に儘

志は大義の念慮を轉じて猶又時を俟んのみとぶに有種困て果て然ばぶに思ひ出
らべ今はぶに力及ばず俺身は忍び止べく那荘客們に機密を洩んを御心安くあるべし
と相譚果て退散けり介後又道節は信乃に件の宿望を箇様々と告げ信
乃は听て頭を掉て曰其甚あらばべく豊嶋に和殿は白井に君と父とを害した原
越杉憲門両個の仇を漏さじ其首を獲て捕べ復讎言の義を果せばあらば今
ゆゑに思ひ起して定正主を狙撃んと揣るに危を支るべ約軍陣の常態にて計とも
撃ずとあり豊嶋煉馬の滅亡は小にして大に仕へ寡にして衆に敵する徐
争何いせん且和君は俺身と共に里見殿に宿因あり安房にまかりて仕へ約束あり原我
忘れて狭徒荘客君の與にその身を殺さんとあるべ忠義とも義に錯の誰か感ぜざるあ
らん又三省あるべかと密に諫めべ道節心に感じ沈吟すること半晌許頭を抬げ
歎息して和殿の意見もその理あり俺はかく里見殿の恩遇を忘れず人とし

道芳

始あり終あらん大丈夫とあざ〻ぶ曝ふ甘木白井を宛家定正を殺ふ漏せ〻折還て敵ふ駈
悩されて和殿们さへ難義ふ及ぶ。そと那伝ふ〻〻で里見殿ふ仕へ始あり終を做と
あるとせば是大丈夫の所行ぞんや。とい思へども今速ふ宛家を殺ふんとふ思ふ虚実と覘
こ時を候て折もあらば一笠前射ん時至らばい天の命その期ふ当り絶んの。然まで劬労ふ及ぶ
まじ。答て再這度とのゝ。信乃ハ隠と密々ふ五十子を赴て城の虚実を覘けり。左右
する程ふ十一月の中氣ふ及ぶ。有一日甲斐の石木なる指月院より現八大角ふ嘱力と。去歳の
冬照文が那寺ふ送〻措る安房の雑兵二両名永垣夏紀の宿所ふ来て現八大角ふ連里者の
状を取出て低々と報〻ぶ。信乃道節ハ遽く件の書翰を受合て。使役を労し留措て
退て其の書を見るふ現八と大角ハ指月院ふ到着せ〻日、大法師ふ面謁て。信乃道節
再會ふる其身那身の来路ふ送ふ〻く報知て荘介のまを向禀せ〻ふ犬川生ハ往ハ夏
六月の下院犬田小文五と連立て越路より来つれども目今いまだ在らぬその故ハ箇

様々々と。小文五ハ吉凶の顛末犬阪毛野道智のの。荘介小文五ハ越後ふ。萬丸を出
一生を終るまで兄とふ綽の趣毛野も亦同因果の犬士なる事分明ふ。智字の玉と痣もあるの。毛
野ハ石濱ふ。親胞兄弟の仇ふ。馬加常武一家のの。と慶金ふ。ふるの又信濃ふ千葉
大石家の佞臣们を殺〻。ふるの又宛家縁連を殺ふ果さんとふ。ふ青柳の獣店ふ。
詩歌を送〻立去る。文〻も漏さ低々と、犬法師の説示せ〻。ふる隨ふ書ふ〻ふ。
これふより犬川犬田ハ毛野ハ。ふる又自餘の犬士を索て遇ぶ。ふ這度ハ快本
院ふ。かへ来て。春まで過ぶ〻。とふ。ふ生て。是年の暮ふ音信あらん。權且這留
ふ。ふ犬法師の宣ふ。ふ先ふのよ〻消息を報まゐらるゝ。と最も細〻寫
ければ信乃道節ハ迭代ふ讀て俱ふ歎て低れば非如遅くとも明年の春まで。ふ犬川
犬田もかへ来て四犬士這里ふ来會せ。然ふ。ふ犬終ふ
具足せん日を慢て候ふ。ふ。ふ。

多き。就中小文吾は相模灘の破船石濱の危難越後片貝の大死は荘介と倶に萬死を
出で。実に一生を得るとは曳き単節は。ふるけん不便なり。又那大阪毛野と喜こんへ
智勇愉快の壮士と単身にて大敵と麾下せーとの兵法武畧浪々の勇士の及ぶ所に
あらざる。又殘る一個の仇を索ん與は小文吾們に従ざるーも思慮深く胆勇獨歩とのこ
つべ。ぐ宛俊傑なるると嘆唱あつて件の雑兵を召のぞー對面して猶且辞の仔細を問
ふ那雑兵們ぞ答てはまう。指月院の後住のるも望むめくいで来るけれ、大大徳の歓び
ゆこと。来春は寺を遍與く酒家は俺投ぬ。汝達は穂北より路の便りの左くれば安
房へ還りて照文ふ七大士のるを告よ。這宝の事は書中ふありとく。蜜崎主與くせあふ法翰と
遍与されて是迄の一説ふ及ぶ安房へ御要もひぐ羨らんとのけるを信
乃道節は聞て然ば亦俺們は言傳を漏むと時のまぐ至らぎーて守ふ拝見せざるとのく。蜜
崎生は書状をあらぐ。這度もあるるべーと叮嚀な意表を示しと。二封の銀子を取せり。

徒りー程は夏幼有種は荘介毛野小文吾們の事恁々と伝聞て駭嘆ド且歓ぶ。指月院
より来る雑兵は飯と啖せ酒を飲と牽生物さ與へけれ。雑兵們は受歓ぶ。その夜は這
里は曉く辞と安房へ還りける是ふより信乃道節は現へと大角は荘介小文吾は相
伴ふかの来る日を俟不樂て噂をく弥る日の今茲は多友は果敢く甘春て明まば文明
十五年の春寒は正月の十日あまるふるけり。話分両頭這時石木は指月院は現
八大角寓居して荘介小文吾を俟るふ年は暮れ春立かれと那二大士かの来ぞ折く後
住の老僧の入院は既ふ近ふあるそ、大法師は吉又ヨヌられば現へ大角は身を措難て且穂
北へ還りて孫徒ても這里まるべ宛欲とそ。岩に難く在りける程は正月の十日は荘介と小
文吾は又信濃路より かの来ふけれ迭の歓び驚くまぐそ宵は、大も園居ふ入のく四大
士は各々来路を報け。意表を演く。孤燈の竭んと者とあぐを登時、大法師のふ
呈襄は拙僧本院は。權且寄宿あつる折住持の老僧遷化と寺を預るのもるく且その

送囑の黙止かとかの憶ぞ這里の錫を住めて似而非住持かるのたるの是已上をゆざる所
為へ然るとそう啓く讓るべ元後住の法師あるとりてそぞ入院の日近つそろいまごたの日を
卜めねど下旬ろ〜んと必ず人住れば安く寺と遞与し拙僧の當所を辞し去り結城の故
戦場の赴く。權且那首の住人と欲そその故の拙僧出家の初より那八顆の霊玉に往
へ方〜索極ん與の抖藪行脚は三十餘年の星霜を歴れも菩提の勤如意ろ〜身
塵中は在るの似ろ方僅しも八顆の玉の往方を安定の知るよ〜ありてそ感得せ八大士の
出世姓名送もるく。少知るとを泊ろ〜ば稍宿念と果ま足れり。そぞ内中る大江大阪の
往方詳ろねど時至らば索めぞ〜と竟の来會ぞるとあ〜んろをのて拙僧の結城の故
戦場の庵を締びて義実朝臣のあん先考里見大炊介季基朝臣并ま大塚匠作三
戌信乃父井丹三秀直信乃外祖父の這它吉嘉吉の戦死あるる名將勇士勁卒の菩提の為の一
百日の大念佛と修行と罪犯救免の君恩の答まろ〜んとそ必ず去向の便り多〜れの穂北の

旅舍の立寄て大塚大山二賢者の面會して結城の到らん各位もその折ぞ逗留と
拙僧と俱の當所を立去りのとかを莊介ろ所〜あろ〜ん一旬あろ暇ある身の多りの
なの御国某道節と本院の一日の幾程もるく他郷へ走そ蓑生の它れ日大山天地と
一ケ所も登陟せ毛大江の小児八神隠しるく。往方もるく〜ば彼〜とへば某諸州を巡り〜折
山の遇へば必登りて那親兵衛と索ひろ他恙もるく存るるく〜ば今茲八九才の恩〜介ると
殊の山ヨリ降這地の夫場名山と漏さば送憾〜かく〜後住の入院ある日ぞ某们を當
国の高峯の登りて親兵衛と索ひて〜安かへの来て犬飼大田大村生八這義の從ひ
ん。とへば現八小文吾大角一説の及ば皆數頭ての俺们も同意の翌立の旦併は立去る。
二十日前後の かるべ。さぞれ大徳八是ぞのるとを允させの狩へるのぞと問へ大の微笑て
その左も右も隨意るべ。快諾て快還りの後。この結城の故
吾大角们の四大士八身枯衣〜と歩る時非如他山八漏ぞも先蓑生と去向と定ゆ〜ち連

立ていそぎけり。小程ホ後住の入院の下旬ハ障る事有とて。哭士の出ずあるべる。次の日ホ説定せら
きてオホ中一日偏ニ丈を入院と為ちけり。登時、大ハ必ず豫の約束岩藷ニて後住ホ
寺を遞与せホ那四大士の還るを俟ず。本院ホ在んと今ハ愛惜為るホ似て影護
所あり。乗当所を退去て穂北ニ到て四大士と俟そよけれと尋思と為て却念成と為我六ま
那四大士が帰来ず。猛可ニ入院と言れて後住寺を遞與せず。酒家ハ当所を退きて穂
北ホ到て俟ず在ん。とのハ事と侍へ。這義を為べ。と叮嚀まを沼き。後住ハ法師ま
別を告て准備の頭陀袋と項ニ掛け戒刀を懐ホして脚絆と穿檜笠を戴き錫杖を突鳴
為て飄然として立去りぬ。慥而、大ハ石禾を去て夜ホ宿の臭ホ歩を進て則一日ぬ武蔵州
豊嶋郡麻生の郷ニ程遠ず為葵岡と云ふ一村落と過ず折春の日既ニ傾ず下晡ホ形
ずして宿を請んと思て。村人の門ホ立よりて云云と呼内ホ当所ハ村の法度ニ。出家ニ宿と
借さずとの。ぬ為ぬ。ず。ず。ず

いま本邨の大沼より間なく時なく雲霧起りて屢大雨を降せり五穀登らず竈より
蛙を生ずるまでかるこの介ば村人ら歎て鎮守の神社を祈禱奉りて七日の神樂を献
て鉦を鳴らし鼓を鳴らして連りに請晴を催すに此も応験なしー日行脚の法
師あり名づく知雨老師と名告て村の戸毎に詣る村人本村な
ら水損なしと招く薛子は神の出崇のあるを知らず抑本村は大沼の昔より
是泰神あり是れも慈悲廣大なる自村他郷の差別なく貧民を憐みの大願を
ませると汝逆夢も知らずして是なる鎮守の神をのみ出崇る故に徒に崇あり今より衍を
改めて咱教に従へ憑を轉して歓びとなさんと躍と旋もよく速なべ徒に惑に醒べし
件の神を祭るべし村人総て餓死に及んと怕るべしとなるこそと鼻春蛾めりて示されい
人食所へ駭て怕れ〳〵あるべからざる祭祀をして出崇を鎮めひんとは管請問奉せりぎ
老師の論のまゝ件の神の祭祀を吹鼓舞踏る事なるべし約莫年は正月より永

樂銭五十貫文を分ちて五人の浦筈に敬め新衣十龍を分ちて不の皮袋に敬め
藻刈船ふたつ乗て沼の中央に流せり夏は又畑物の瓜茄子何なれとなく初生を十人に
筥に敬めて流せと前のごとくせよ秋は又新穀の精白米三十苞に味噌醤酒油三十樽を相
添て流せと前ごとくせよ這祭礼は年に三番供物は増減あるとなく正五九月に約せり縱
郷郷の凶年なるも本村は年毎に五穀登りて豊饒なるん努々怠慢なべからずと叮寧に教
あるを大家疑訝りて仰ぎ伏ぎ拝べども然ども村の東西没ヨるに勿論神のなれば供物の
銭米衣ども後に誰か取べきと問へば老師は笑ひて愚なるとのかな那神感納ある
ぞ供物は通てその夜村中に何処なく喪るとのみ大家又訝りて不思議なるのみ
ひ神は只ヨ火あるて形なしと呼るに然ども凡夫の了簡は徒なべし該なる件の神は貧民を救ひた
のみんとは老師は冷笑して浅ま凡夫の了簡は徒なべし該なる件の神は貧民を救ひた
まふ大慈悲あらとて凡夫のまゝなる銭米衣を受なべく自村他郷の差別なく貧者に

授けあると人よくこれを知るとなり。そもそも汝達ゞ夏作秋作野菜の類とかはり倍て價貴く賣る。國のヨリ所て折々あるい那神の授さをのゝ這度と査しと疑ふと。村人心一致して錢を出し米を裏ゝ三番の供物ゝ懈怠なく五穀熟して病厄なく敏者他郷ゝ優る。但那神ゝ外より来る法師と巫覡を忌あゝ一夕も留むゞ又那供物ゝその月の十五日と相定めて夜分の時ゝ船ゝ乗て沼の中央ゝ推遣らゝ此ゝ後をゝ食快きの宿所ゝ帰て。ゆゝゝ門ゝ出ゞ。當夜ゝ家毎ゝ灯を点ゝ門を鎖して謹慎べ。祭祀ゝ正五九月これ。今茲ゝ月ゝ拘らゞ這六月より與行して正月五月二度の供物ゝ今番一度ゝ為せよ。等閑ゝ忘ゝと神託がすく告誨して形ゝ消てゝ。ゝ未曾有の奇支れゝ村人駭嘆せゞゝ。信ゝもあり信ゝもあゝ。狐狸の所為ゝあゝ不覚ゝ怕れて妖されゝと。ゝのヨリかりけゝ評議商量區々ゝ。三十餘日を過せゝ天一日も雨降ることなく。剩十五六ゝ少女子の往方もなくゞゝ。両三番ゝ及ゞゝ村人総て駭慌ゝ。然らゝ那知雨老師の教誨の如くせゝと。錢を集め東西を整へ大沼祭祀を粉ゝ。今後ゝ女子も亡せゞ。天ゝ晴ゝ。秋ゝ至て半減の実入りあり。是ゝ足よりゝ後年毎ゝ三度の供物を闕とゝ。けゝ正月の祭礼日ゝ。今宵錢五十貫と新衣十龍を大沼ゝ。ゝ船ゝ乗て備る。是ゝ。ゝの東西ゝ村長の宿所ゝ集ゝゝのせゝるれゝ。咱們ゝ錢を出せゝ四鼓より戸鎖して就寝るゝ。徒ゝ情出ゝ。出家ゝ決て留めゞ。外ゝ宿を投めゝ。這村ゝ無ゝと心長閑ゝ田舎見の甚るも厭ゝ長物語ゝ、大ゝ呆れて鳥許ゝ。然ゝ疑ゝ。ゝ所謂を聞けゝ推辭ゝ。今ゝ無理ゝ。柳這里の村長刀祢の姓名ゝ何とゝ。ゝ宿所ゝ何処ゝ。ゝと問ゝ主人ゝ真実ゝ。然ゝ這里の村長ゝ盤井右馬の二と唱れる。宿所ゝ曖昧ゝ。ゝゝ約ゝ三町許ゝ。南ゝ。衡門ゝ長刀祢の屋舗ゝ又只投宿の所望ゝ。盃ゝ。芝崎村まゝ急ぎゝ。大ゝ応ゝ。別を告ゝ遽ゝ走去りつゝ。那村人ゝ云云と説知ゝ大沼祭の供物のゝ。ゝ信られねゝ必幻術ゝ長るゝ。村人們哄

あく東西を奔走ふるく。あるくとも是等のさまを明々地ふ論ーるべ素よりも愚直の田舎見の。
久つ還て酒家を爵悒く思ひく。怒ひいふ醒ざるべ要をあれと肚裏ふ尋思をあく。忽地ふ。
その計決りけれ。ゆてる隨ふ村長の宿所ふ赴ひ喚ーく。執接の老僕ふ。ゆる。愚僧ハ皇裏ま
村人ふ大沼祭祀を教ゆべし。知雨老師の徒弟を知風道人と喚ゆめ。則師父の幹
人とも。一大事を告ん為ま。今宵猛可ふ来つるか。主人ふ通達ゆめ。とふふ老僕ハ胆を
潰て。敬ふと大々ふるる。且く等せゆめとく。走て奥へ退りけり。黙燭時候へけまべ村
長盤井右衛門ハ。ようを聞て遽ーく。奴婢ハを召く客房へ燭奴二脚ぞうる出ーく。布
袴の紐結びもあへ。まみづるる。邊ふ出迎へ、大法師まうち對ひて。在下主人右衛門ハ。誘這
方へと先ふ立て。客房へ案内をも。登時、大ま草鞋を脱く。引まく上坐ふ着ーかば。
右衛門ハ。額つ地拜ま。老師の塵俗を忘れゆで。御弟子を差されーと。有がまを奈
ー。法體恙ま。ゆさまや。願ふハ慈教の趣を。俗ふさまゆかーとふふ、大ハ凡繰る数珠を。

止めく法衣の袖掻合ー。老師の法教餘の義ふあくば。量裏ふ教諭ゼーど。大沼の供物
等用るく。今宵ハ亦正月の祭祀を執行せるて。感心尤浅くば。あるま昨日沼の神の
俺師父ふ託宣あり。近曽不思議の妖賊あく。村人ハの献供物を竊盗ること。あ
いとうれいあく。必ふも。那癖者の術長くれハ神ふくるも立地ふ罪ふんを最かくら願ふる老
師俺輿ふ退治せよと宣へ。因く拙僧師命を稟て這里ふ到来あつる。今宵那沼の
頭ふ赴ひ終宵四下ふ心を屬く。癖者あくとなるるば討滅さん為ぞか。這義をあくるる
のひねとふふ右衛門ハ。驚ふ。そを必ハ。珍事ぞふ。然ふば大徳ハの癖者を法
術ふて退けゆふ欲。或ハ亦剣戟をあく。撥る平げゆふ欲と向ふを、大ハ呼めを拙僧法術
あくとハ。かくのごと癖者ハ鐵炮をあく。撥る捕るべ。本邦ふ猟戸の鏡術ふ修煉あて心
剛るめあるやと問復されく。さハ本邦の猟戸ふ種平嶋平と喚做く。両個の猟夫
あり。その心ざを勇悍くあて。百發百中のる。煆煉るる他ハを用ひのんと。とふふ、大ハ領

ひく。現在の二人よりめれ今宵時刻及び各々い例のごく供物を大沼ふのそ西北く船ふ
の乗りと退くと約二三町ふ一く路の樹間ふ伏駆れ其首ゆく暗踊を笠寺めの鐵炮の
音ゆ々く九响の響きん出大家ょ奉き走り来く。緯の容子を親めか。勿論心ぎ虚弱
ゆく。鬼胎を抱く嗚呼の者或いその性嘆ーくく。支ふ忍ぶ白徒い今宵件の隙を省そ
但壮健る壮客四五名和主と倶ふ留りてその它のめい返ぎ。支成るまでい推秘ーく。
叨ふ人ょ知ーまぶ。ぎの美を慎ーこのか。といへば右ぎつ三額をつ死て仰ぐけぶ心ぶ徒亶示
さえい恐けれども大沼ょ鎮りまぎい人の與ょ禍福を降ーく。賞罰訓殊ょ炯然る暴神と
二を呉めひふ何ぞ。その妖賊を怕れく師父を労ぎるまぐふ是笠の託宣あっらんとっを
、大ょ冷笑ひく。ぎぎ唐山戦国の時楚の大夫屈原い汨羅ふ投く神ふ祭けり後ふ
これを祭るのあり。五月五日ふ供物を備くその水中ふまぶ。ーふ屈原の神夢ょ入て。
祭らること甚よ。然けれども祭祀の供物い蛟龍の為ふ奪れく。奈何ともせん術ふ。願

ふい五彩の糸ょり。結びて水ふ沈めよか。然るとこい件の蛟龍ぶ怕ぎく。これを奪ぶ汚
るべこの美を憑むといれーく則五彩の粽を制裁く。形のごとふ祭りーと。端午の粽
即是ぶ倣る例もあるこれぶ。沼の旦茶神をとても妖賊を憚く。託宣あーと疑ふべくぶ快
快准備をおのぶ。と思まれる右歩の二八只顧かこと感激ーく。遂ふ此も疑ぶ先、
大ふ茶を着め。夕饌を美めるぶを。晋待極めく叮寧その間ふ右歩の二八。猶戸種平嶋
平と召来て。密談を示ーるるぶく。竊ふ准備をおけ。春の夜既ふ深初く。
夜の初刻ふるーるぶ。祭祀ふ関る故老村の壮佼幾名狩村長右歩つ二の宿所ふ聚
来く。五蒲筆の銭二皮笠竜の衣裳を。五疋の馬ふうち駝ーく。大沼の畔ゆ
程ふ蕉火二行ふ道すくめ宰領のめのあり。乱雑を制め清浄を旨とを。犯ー穢を
正と許さぶ右歩つ二八麻の社杯ょ五人服章ある黒綿布の衣を被く。藤柄の中刀を
瑞短ふ横佩く。一分反の菅笠を戴ふ。斑竹の杖を衝ぶく。伴當一名を従へく。陸續と

ちゑ大

あつまの路より
名をのこうも
水を氏かるの
あふひの関乃
道の地
国芳
たき平
きま平

（この大沼の事、迹合考ネ。菅名は拾遺の池なれど歌の上の五句なれば正しく考ネ）

徐ろに約束の祭祀に関るのは皆新衣を被て剪綵を挿頭に。あれども鉦鼓を用ひず人の観るを許さず。路次の煩いなければ。徒而件の衆人は大沼の畔に馬を駐めて。蒲簀と皮筵とを敷き。准備の藻刈船に積来りける一個の故光。布の白袴を穿て蓼草を裝神に採樹てゝ鈴を振鳴し。沼に向て跪く。中臣の祝詞を声高に許げに誦るを。一遍白幣を彼此に振動して。戴て水際に建る。大家齊一身を起して素裝時分に。今るを快哉船を推出せと。罵りつ散動めて。笠高に把るもの一両名。船を沼の中央へ撐て流し。咄と嘆じて。蕉火に乗て沼に投乗五疋の馬を牽走り。つ異口同音に後を顧るを。相整言を端々て逃るが似く。別に宿所へ還りけり。その中に右馬二。故老両三名と。心利く小膂力ある村の壮客六七名に。大の機密を箇様なくと。甲夜に耳に示せるが逆より食るを沼に。宿所までかへるも去らぬ途より窃に引外し。右の二に従ひて沼を距ること一町あまり。樹柱の間に伏隠れて。那種平が鐵炮を放てあらば

（赤坂は大沼の壮と呼做す。物ふるえ後の称呼ふなり）

竹漏さに。忽へ俱に耳を澄して。今かくと等うけり。余程に、大法師を。鴉戸種平嶋平を。霜に招て近つけて。件の機密を説示せば。種平が異議もなく。躯て宿所を走り還りて。身装を。鐵炮を。引提て再出て来る。盤井の宿所に躯まりて。既にして村人が祭祀の供物を沼の畔に。出て遣の過しく。大も徐に立出て。草鞋を穿て錫杖を挾み。種平嶋平を従へて。間道より找て近づく。村人が祭果て。齊一かへの去りし時、大を霜に立替りて。且這沼の光景を視るに。昔に倍て大沼の。周囲八五六町あまり。八九町ばかりの水際に。菰草菖蒲の枯て。夏は水葵もヨメナと。ひへ村の字を葵岡と。唱へるは。これに縁る歟とおもふ。時氣は正月の望の宵。月明に星稀に。風いと寒く。霜深く。氷を摧く。水鳥の立かゝ遠く向上るは西を。赤坂青山に降置く霜の真白なる。目黒に落る鴉が音も。黄なる朽る。豪塚に。鬱彫悒くや。夜視るが。五色もよりや。四方天南に麻生高畷芝浦近く寄る波を東へ

續く入江潟北の芝崎神田の代山漁郵樵徑相雜ひて日の見もあり定えなき征客常の腸を断べらける眺望も當下、大の沼の地理と進退さへの鑒定めて両個の猟戸共侶の小篠の蔭の身を潜めて那癖者が来るやと息を凝して覘ふ程の夜の丑三とおぼしき比麻生の方より忽然と癖者五名連立来て沼の畔の立在こなそが中の一個の癖者が草頭巾を目宵の戴き長き刀を横へ腰に頭領は賊の逃ふ指さす其に下と云へる癖者が腰の附る鈎索と船の真哩と投擲て引寄せて兼て蒲簀の錢を引抗て肩の兼せんとせし処を寛澄せし種平嶋平倶の敬ふる鐵炮の火蓋を撞と切て発せば寛差の那頭領と船の一個の癖者の乳の下腋下に彼ひと者の撃傷られる両銃丸の雷妙時の沼堪ぎ苦と叫びて足を張て仆れけり畢竟、大が智計の這癖者を撃仆なる後の話説甚麼そやら又這次の巻の解分と聽れり。

里見八犬傳第八輯卷之六 終

東都 曲亭主人編次

第十回 天機を談して老獣舊洞を惜む 蕉火を照して勇僧猟穴に入る

再説那癖者の種平嶋平が撃出す鐵炮の响と倶に頭領と覚しき船に乗なる一人の矢庭に撃れて仆れぬ這它三個の癖者は吐嗟と驚慌て頭領を掖起もあり然らぬ船の倒れて扶けて引抗んとせし程に連放被ける鐵炮に又一人撃仆され一箇の丸は那頭領の眉間を再撃て砕く勢い猶豫べくもあらねば残る両個の癖者は戸艪を捨て俄に捨て往方も知ず逃亡けり小程は村長左衛門三の方幾種平們の二度まで笠間音高く鐵炮の暗號を錯ぎ樹間より故老壮佼們と共侶に出て来ておもむく、大法師の身邊に技近着て。癖の容子を詰れば登時、大の那癖者

们の縛の紙箇様々々と有つる隨ふ報知て那五個の癖者と過半汀渚ふ斃る留たる
二賊い逃て往方を知れど息絶ざるもあり快々那首赴て死活を看届けあらぬと
遽しう先ふ立て件の汀渚ふ赴くぞ獵戸種平嶋平も鐵炮を引提て齊一走近着て
斃る仆る癖者们を此彼と檢まる頭領とおぼし船の内る一人い胸骨眉間を斃
きて即所ふれば息絶て統蔘よりも口よりも吐血鮮血を身を浸されて絳ふ染るそが
中ふ後ふ斃れ一人い膝節をあを碎れ五ぶ痛傷ふれるもまだ死るぶ身を起さんとて掙
れども種平嶋平も亦ふ佩よ腰ふ附る刻卒素
めて両ふ堅ふく細めて背を酷く毆懲し敲悩て来歴を問へば癖者苦痛ふ堪
ず遂ふ招道をる咱们今宵斃れる頭領と俱ふ五名長坂山の頭る洞中ふ
年来住る山客ふて此頭領い原修験者ふて我鳥輝坊と唱做る初舊黒在り
時好る技を旨とて地方ふ喜て流せるを国守ふ聞え捕捕られて獄舍ふ

斃れて幻術とて脱出て迹を形里ふ痕めて然ば這我鳥輝坊い母ふ蜥蜴を養狎
れて其ふ祷るとい雲起り雨降て日を男れも歌と舞又隱形の術とよく
形を隱て自由を因て其の術とて彼此ふ雨を降て其の村人を欺ふ神の出れる
よと告示ふ酷く誑て許多の米錢衣物と供物と倡へ備措て夜深て是を奪
ふと呂い是今宵のまるぶ這村の献供物も五年以来受納て朝夕の資用ふ為ちさべ
き教誨を疑ひて祭られる村あるとい又術とて村の女の子を醜かるを奪略て犯て後ふ
佳ずもあり或い左右ふ侍らて愛妾ふ為るもあり村人これを知らざれ忽地ふ駭怕
る神躰るありとて遂ふ供物を准備て祭祀を具行せざるへ咱们初い我鳥輝坊れ
術あるよと知られ祭祀の夜母ふ錢米を運合る人足を央ふ吟知て他
居ら衣食ふ富る然も快樂の羨ふ願ふ洞ふ留て却る下央ふ
火家四名い雨を降て形を隱る術を知て只頭領の隨意ふ法術至妙の老僧を命

運越ふ竭る狡那里ふ人の存し悟ぞ不意と撃れ西銃ふ胸前と眉間と脳と破り骨と
摧れ死るぐと仆れぬ又活くべうもあらむかとひて歎息あるし、大ハ笑て冷笑ひて
酒家推査ふ錯ふと云く這悪僧の幻術賊情世ふ未曽有の奸悪ハ若们ら如くなる
べ。我鳥鞭坊ハ始より丹の洞ふ住る狡若们ハ原何処のものぞ何の比より下ふ来て這
が悪と資ける汝と共ふ四個の火家の名ハ何と喚做ーたる具ふ報よ甚麼ぞと問へば
種平嶋平も一入声と苛立て快々亶せのいぶぞと引提ー鐵炮振抗て背と礮と敲脳せば
賊ハ堪ぎ苦と叫ぶ声戰ーとやゝ等ゆ今ハ何ら隠ぞ我鳥鞭坊ハ當初今の洞
より程遠ら谷蔭ふ草と締びて權且其処と住りけれども貧人家と近ーとく竊ふ
所住と穏せとぞ然而小可ハ破吹革風九郎と喚做る一所不住の博徒又敲れる這火
家ハ猟七とふ山客也。諢名と四貫目半と喚れ又逃亡る両個の火家ハ賽保輔
金山魔夫太と喚做るものぞ。皆旦足島許の間民也。身と措所なかりーば這頭領の

大沼の猶大池ふ赤蛇と
むりー赤蛇と
大沼ふ住と
ハ沼
ぬ今ものの
沼ハ送れり

て属て両三稔と歴されども只ハ這祭祀の獻供物と竊ふ洞ふ運容ると身の救ふ
るのみ這餘の悪事ハ老願ふハ上人法衣の袖りと掩て救ふ事ふ叶ぬと疲憊ぬ丐ふ
て鉦と敲ぬ念佛と唱へ徐ふ餘命と送るべいのみと哀げふ諄返ゝ陪話ふ忍び
かけ来ぬ這招道ふ村長右衛門三郎の餘の荘客猟戸種平嶋平們ぞ呆れて目と自と合
せるのみ怒いハいまぐ解ざりーと、大ハ笑て各那ら聞ら狡這風九郎ぞゝんが招道
ふく賊僧の仮価發覚れぬれども尚ぐうへと説諦されぬるぐて必ぬん郷ふ酒家村長
許より知雨老師の徒弟と名告て恁々とのいるハ這賊あゝんと呼ぶものぞ今宵必退治
て人の迷ひと醒さまく欲せー間の方便ぞ。酒家ハ曰甲斐州石水ふ道場と退院ーて
下野と投て赴く程ふ這村ぞ来る折黄昏近くぐーが宿と借ん必ぬ。村人の門ハ
立よりく一夕の宿と請ひかど皆強顔て美引ぞ事情と原れば大沼祭祀の供物の事
并ふ法師覡巫と留ばとぞ思ぬ初て詳ふ知りぬ因て来る五ヶ年

前大沼祭と村人を誘へとゝ行脚の僧ハ幻術を沼る奸賊也。形のごとく村人と呉しと供物を
窃むるゝ人今宵ハ正月の祭礼日なれば例の如く銭と衣裳を藻外船ゆゑ無しと備へるゝ
とゝ宣ふ。ものゝ情ぶ。偽痛ゆゑ。然るべ件の賊僧が衆人去て小夜深し比沼頭へ潛来て
窃盗合るとゝ。ものゝ恐いと毎ゝ亮査者れども田舎児ハ愚直へ那奸賊ゆ魅されて年来を歴
去るゝ人なれば縦酒家這意表を盡して明る地ゆ諭せども只先入を旨として還て酒家を疑ひ
信用るゆゑ。要てをれ深念をつゝ却村長許赴て此の隨ゆ謨りゝ長ハゝゝ。
這衆人も皆羨引て此も拒ぎ通て指揮ゆ従ゆゑ。汝達這们の賊僧を亡ぼを知ぎと賊
僧并ゆ小嚢囉此彼三名を滅しゝ。酒家俗姓ハ金碗氏也。法名を、大とゝ弱冠の比安
房の國守里見殿ゆ仕へゝゝゆ衍ぶゆゑ。脆く祝髪入道して関八州を履歴の星
霜二十餘年ゆゑゝゝ。神を偽り愚俗を誘して民の財帛を掠奪る這賊僧の徒弟
ゝゝ。今也ゆ狭甚麽ゆ壁ゆ今宵酒家単身也這沼の邊ゆ埋伏して是ゆ賊を

殺ゆ捕るとゆゆゆ

濡れたまぶに伏拜て又額つく。大いに急に喝立て。既に賊首を獲られども。逃亡しぬ。二賊は賊あり。莠草その根を送れば再稲田の害とあらん。這風九郎を御道すがら又那洞に赴く。二賊は其首に獲ざるべし。速やかに快々と遽がせば大家有理と諾ひ。故老們はいかに對して各々八一二名快村に赴いて。鄙に還り。衆人は是等の民を報知と。船に載る錢と衣裳皮篭を運び返さ。その餘は這里に居送りて。船に成るもよろめれと。はは此彼異議に及ばず。現年若き俺們は件の洞に赴くとも。賊を捕捉る資助あらんもあらじ。然は這首より罷能の還りて。熟睡を去けん人々の門を敲いてゐく來べ。ゐをぶまぶにあらず。洞に入るは支黨のヨリく在ん狭料りがさる。其頭の用心まぬれとあるを屬て恭しく。大に辞しあくもあり。這里に留るのもあり。當下種平嶋平八風九郎より對して。ゐをれ兇賊所なる狭汝と肩に引攜く。洞の案内は立まく欲を命惜くは去向を報よ。然は立さと左右よりゐと。命より恥て被立ぬ。荘佼二名受捕て肩に攜け足を持ち。金瘡人に熟いる戦国の民とく

陳圖るべしけり。小程は、大法師。右衛門二并に荘客們と獵戸と從僕。件の洞に赴く程に。天より晴て望月の光隈なく明るけれ風九郎と安内はあられ更に岐道の迷ひもあらで。半里餘りに。長阪山の頭なる一條の峴路に老たる弱き枝と多く。樹木間なる処あり。大家其果ぬ時風九郎が声をかけて。那首の小山の半腹に穿る洞こそ我鳥鞭坊の所躰でいるとぞ。大家左右に探し登時種平嶋平八倶に持たる鐵炮を。食る直に洞に向て火蓋を反んとせ。程に洞内より夫婦とおぼしき老翁老婆忽然と出てゐを抗け推禁めて。人々は平小家の俺們は賊徒にあらず。年来妖賊我鳥鞭坊に這所栖と奪れて怨腸を断とのべども他は素より術長くよく鳥獣を獣勝せると那唐山なる黄公の神符に捉るる段あり。その故に何ぞ今々とその妻と乳を避け躰て空に光閃を過ぬ。人なるに今宵善知識の那賊情を明査あらで。輒く仇を誅滅せれ。扨は何事ぞ是に捉まべ。初めの我を知らでありしに郷尚に脱れ。かの來ぬ。賽保輔金山魔夫太郎。その進退を決難て云云とうち相譚ひて心とも

○文溪堂藏

二賊を趕ふくる、大
老翁老婆ふ
遇ふ

るく竊聞く。然敵既に亡びる。縛の趣も詳に知れ。且件の両賊。那厭勝の術も弄ぶ。只い是寃家の残黨。我。俺們これを殺ーろ。賊徒い才ふ五名。他們が外に支黨ろ。洞内のいぬる比ろ。今ふれろー女子們。金銭衣裳家伙。ろの人か。とふま大家ホ驚ぶて。近着くめくるーを。獨、大い些も驚ぶ。樹柱の間を漏る月を燭ふ。ろくはらくと。件の翁と媼とを。ふ。瞽ま梓の弓を張る。八十の齢ろぶ。欣頭ふ霜を戴けども。色黒くまて。形肥膊。訥辯ふ。七引声ろー。身ホ海松の如く。撞垂まろ。布の薄黒衣を被て。ふふ。鹿杖を携へろ。必是妖怪ろーん。と呉ハ伝と立對ひて。ホ老牝牡何ろ。ふ剛才若们が説とろ。ホの拠ふ。以れども。いまぐ素生を詳ぜば。ハ衆人怪ぶハ。憶ふ是若们が狐狸狢ろーぶい。山魅木精の属ろーん。ろく素生を報ぜ。とろれて怕ろ。老翁老嬢い杖をうち捨跪ぶて。大德許ぜ。ふ。既ふ明査せられ如く。俺們い人倫ろーぶ。三百年来這洞ふ栖なる真猫ぶ。和名い素よりみの一字ぞ。猫ホ獣ぶ。ぶ。猫狸と

喝ぶのもあり。這頭の俗いすみとぶふ。性鈍ぶ。狐狸と遊ぶ。ぞと。髑髏を被ぶて。人を魅ぜ霊ぞ。形肥ぶ。真猫ぶ。ぞ。ぶ。ぶ。ぶ

這箇の奇異あるけるとても少もせず衆人は胆を涙し舌を掉ひて、こゝ、大の徳高うほを曉得く信心弥増しけり。登時、大は此彼と衆人をそゝのかして剛才老猫の云云といふは実古文ゆく洞ふ餘賊るかゞ。酒家先人々撿せんふ四下の竹を伐採りて快き炬を造らんとのふ大家あるゐて作り出せ。竹ふ炬ふ種平们ゞ鐵炮の火索を借つ火と吹移して振照らす壮佼们い、大法師ふ従ふく種平嶋平共伴ふ找て洞ふ入る程ふ右衛門三さふおそるく後ふ跟てそ入るふけり。徒而、大は壮佼们と俱ふ洞内ふ找入ゞ火を抗さて四下をそゝふ奥ふらと廣ふあそ。席蓆六枚を布るは我鳥蟬坊の臥房るべ。夜物あり。家伏もまゝらは只這東西のあるのまゝらで年尚弱ふ三個の女子の累り俯くと泣くと、大はうちそ右衛門们ふ扶起きてとりと問ふ則是五人年己前我鳥蟬坊ふ擒攫れて他ゞ愛妾ふせられとふ故郷と問へは葵岡ふ。這人々の相識れる某甲某乙の女兒るければ迭ふ名告りて教馬くあるゐ然ばと大くおりゞ然ば件の女子们い、大法師の方便ふそ。妖賊誅滅せられる。

譯と呼ぶて再生の洪恩徳義とうち仰ぐ感涙の外なりし。大は然いてと慰めて又右衛門二们と共伴ふその次の房と撿るふ這里ふは果て賽保輔麿夫太们の戸厳あり。俱ふ咽喉を破られて全身鮮血ふ塗れり。必是牝牡の老猫ふ咬殺されるけんと人食猜毒ふ嘆息ふ這餘は銭あり米さへまゝを、大は一切ふ奪ふ们を勧らて。躯く洞より出ふけり。當下村長右衛門三は壮佼们ふ指揮ふ。東西皆運び出さるゐ中ふ酒あり。菓子もあり飯もあり。と、大ふ羨めて餘れるを皆共伴ふ飲食むて。餓る腹を頤ひけり。小程ふ、大法師は洞内より出る賊物を熟視て米銭は是国主の至宝聊なりとも。葉べらべら這餘は汚穢れ不義の材燔捨るとよろめれとふ大家推辞難く椀碟盃盤家伏席蓆ふ出せ。隨ふ積累ねて大焚火を差寄れば折るゝ暁ゆく山風ふ吹れく燃る程てあれ皆灰燼ふるけり事ふ驚くふ果てゝ種平と嶋平は洞ふ入る。折樹下ふ敷系措ける風九郎と。牽立んとそけるふも亦咽喉を破られて何の程ふ

死してある原来又那老猫が漏さずとそ咲殺せーゐゝんとゐゝと、大の又ゝ了て、這風九郎い我鳥輝们と同悪の草賊ゑれども這者獨死ざりけれい我鳥輝坊が積悪もその賊巣さへ知られろ他勝節と毀破られて廃人ゐるゝれば命と助けゐるさせんと必ひけるを来いハ間ゐ那老猫が殺せーゑ正ゐ是天罰と脱れゐゝ死業報るゝん南無阿弥陀佛と念ゝ。却衆人とハゑゝーと方かゝんとせー程ゐ山峡既ゐ明まけの浩処ゑ人許ヨ這方を投く来ゐるとゐゝーゝ声諜ーゝ笑まけの此ハ是別人ゐゝ老獠ゐ大沼より返されるる故老二名い村人们の門を敲て有つるゝと報知せ更ゐ亦促ゐそ藻外船ゐ銭と衣裳を右衆ゐ二们ハ目今来つる村人ゐ洞の光景女子ゐゐゐ又小嘆囉三名ハ皆老猫が咲殺せ一綽の趣箇様々々と一五一十と報知ーゝ三個の女子を指示せゐ。その親ゐるゐゐ叔父ゐるゐゐ迎ゐ来つ馬隊ゐあり。往方ゐ知ゝ生存ゐ知ゝゝ五稔過ーたる。親子の再會迭の歓と孰ゐ疎密

あゝ言れゐゐと合ゐゐゐ。撐ゐゐゐ。外視ゐ差ゐゐ泣ゐ。ゐゐ心ゐけゐゐ金ゐ大德ゐ洪恩世ゐ有ゐ活佛ゐ引接せれ利益ゐゐと稱ゝ俱ゐ身を轉ゐ、大法師と伏拜ゐて齊一欷ゐ演ゐけゐ是ゐゐ殊ゐゐゐ人ゐゐゐければ弐十貫の銭ゐ分ゐ。藤蔓ゐ縢て擔荷ゐゐゐ又米苞ゐ駝搭ゐゐゐ弐、大の先ゐ立て連ゐゐ路ゐ同ゐゐゐゐ程ゐ、大法師い朝日高く登ーゝ比衆人ゐ銀請せれて又村長右衆ゐ二の宿所ゐかゐ来ゐけゐゐ一家兒の男女ゐ迎へゐ尊敬ゐ浅ゐゐ。脆て客房ゐ請待ゐ。齊ゐ美ゐゐ程ゐ主人右衆ゐ二故老種平嶋平ゐゐゐゐ昨宵祭祀ゐ管ゐゐゐ管ゐゐゐ推並ゐ老弱男女三百名咸這宿所ゐ聚合ゐ、大ゐ拜ゐ功德ゐ謝ーて願ゐゐ大德俺村ゐ葬ゐ造ゐゐ請求ゐゐゐゐ、大い聽ゐ頭ゐ掉ていゐゐゐ然ゐゐゐゐ酒家い年來行脚ゐ旨ゐ且志ゐ弐て去向ゐ急ぐゐゐれども這村人们ゐ妖賊ゐ魅されゐ苦ゐ忍ゐ窮ゐ智計ゐ旋

ら七。地方の患を除ケのミ。一日も留る暇いなしと強面く答へ別を告て去ぬと雖ども立ち去んと為ミ
アラバ右衆ハ三故老ども留難て商議て供物の與を集める。那五十貫の銭を乞て
金を兄布施と唱へて贈ん欲せ。大い此を受ずして詞正く諭て捨ハ是有漏の
縁ふ七法師と肥を毒茶に出家ハ菩提を寶と為る故ふ大集経ふ妻子珍寶
及王位臨命終時不隨者と説れ。西家ハ食行脚て菩提を
求るの為ふ千金を乞も何ぞ世利の縁り心を動て。その布施物を受納ず亦那鷲
鱞が奸計と相距ること遠く。五十歩百歩の間なり。近来ハ山内扇谷両管領武
威既ふ衰て東國一日も静なれバ奸民盗賊折を得て山ふ憑り海浮を奪ハ
飽ざるハ是良民の不幸と定正主ハ程遠ず五十子の城まで遠く軍旅ふ暇なる故欲
長阪山なる一賊も縛捕の沙汰の安ずれば代りて民の迷ひを醒て苦を救ハ浮屠
家の慈悲と報いと愛る甚ずんや願ハ村長故老輩要る銭と衣と散く鑁

寡孤獨と賑さん布施て浮屠家ふ媚んより逆ふ提ん功徳なん暇もなしと
捨て人林ふ出ん留ら袖うち拂ひ外面へ出て草鞋の紐を結ひ錫杖を突
鳴ら〻又回向て杖を投て立去りける功ふ誇ら利ふ疎なる這勇僧の挙動村人公く
尊信て。総て餘穀を惜まけ。怪而、大い旅舎を出て又只一日なれ肚裏ふ出
ふ。いなる日酒家石未る指月と退院なる折那四大士ふ言を送て穂北の宿所で
候んぞと約束と為れども。ひらく思へハ穂北の長なる永垣殘三夏ハ原是結城の落人
平嘉吉ふ竜城せしめと。ふ佛なるを立寄く逗留ず夏ハ必大念佛の施
主なるらんと詰ふるべ。約莫今番の念願ハ里見殿の奉為なるふ他姓の施主と参
へて本意ふ錯るのミなら〻ず俺君侯の瑕瑾と曩ふ君侯より賜りる般舟費も今ハ
殘れるあり。加るふ這年来募縁の一銭微塵蘊りぬ今番の費用を辨ず。怪れば永垣が
宿所へ立寄ずと上策と。非如四大士ふ壯介現八ふ吾大角信乃道節ハ。約束の差を重大塚の

成氏を一説舊録に童氏と書くは侍れど當時の唱へなるウヂなるべしもせの人なりしかと唱へ来れるとぞ久一にてゆゑ俗唱の從のまゝの也前輯は漏しそれは追記せり

大父大塚成は結城で戦殺せしの乱べ四月十六日の忌辰に招ぎそも信乃がいかゝ主は成氏朝臣の御方也今は結城の舊城に在の是も亦酒家大念佛の事情を穿れる。

施主はあらんとられやせん此は就て彼は就て今番嘉吉の亡魂を吊ふよりは深秘をそ。その期を及び熟幼女吁小弓と肚を同じ腰ふ答へ程ふ分別既に決りれば穂北の荘を過りかども氷垣の宿所へ立寄らば其頭は笠を傾け連りは路次をそいそぎける。

附ての金碗、大は長祿二年に伏姫自刃の折祝髪入道して安房を去の兎吕足年伏姫は十七歳、大は二十二歳へ是より以降今茲文明十五年に至て星霜既に二十六年履歴かくの如く年廻てその志穿らば竟は八霊王の止る所と大士の由来を知る上なるべきもこれ這僧の世ふ見れは第四輯の行徳の一段と第七輯の石木社段のそれぞれの類と書べは直是なるべしかの世の人只ぢ困ぶ看過したるまでなべ因て今這一段あり、大の與れ

湯島は今の地名なり武州豊島郡の部武蔵の郡名豊島郡湯島由方とぞ

演る所真面目と頭ーなるその智慧と勇敢と越る初て瞭然るかくの如くまあ伏姫の義侠と對せるふ足らぬ又犬士们を御道すの大先達と做せる足べ這書成るふの勘るねば婦幼の與る教員言もよく看る人は余が言を俟ぎしく分明るを能ー。

○按るふ麻生ふ合龍前坊と吸做せる所也。那里は三百年已前茶毘所なれと物ふ云へるそ。ちるべ合龍前坊は人の名ふあらぎるまは似る此は稱呼を借用れぬ字の同から。

ぎるが則作者の用心之這餘猶究の考証は本輯五の巻の附録ふ載る。

第十八回

湯島の社頭ふ才子芽を賣る
聖廟の老樹ふ従者猴を走らせ

話表は武蔵州豊島郡湯島の御ふ祭られる天満天神の神社は号文明十年ふ扇谷の内管領持資入道建立せる。這地は夫木集に見れる登蓮法師が足一人の刃岡の花を花靡くに招く心地とそ。

又廻国雑記にも。
岡の歌を云。と詠りける岡の邊の南まあり。

上野花篠分限帳ニ江戸還元方上野と寺ハ云ふまで都のゑ態知るよりも亮。紅下の田金ぞあるけれども。這神社のゑ月ゑ日ハ詣る道俗ヨメかりけれ。餳餅果子きんどゝ粥喜ぐ坊賈勘ゝぎ兜師放下師刀玉の猿楽ゝ做ゝ

ありそゞ中ゑ坐駄半鎌鎌の技ゝそ脇黒子ゝ除く茱ゝ磨歯砂ゝ賈るゆあゝ地方ゝ花と華ぞ。白面優美の壮佼ぞ。打扮ゝ精悍ゝ身ゑ太織紬の染衣ゝ被て裁着の括袴ゝ脛搭ハ跨做ゝ肩ゑ緋の繻帯の襷褌ゝ横て高足駝ゝ乗ん窓なりけ。這里ハ看官ヨメかりけれ。巨竹をゝて揭の埒ゝ締繞らゝ。戯駄場の界ゝ後方ハ八九尺ゑ花田ゝ薄柿の天幕ゝ仰反形ゝ張豆ゝ坐駄ゝ大刀ゝ鎌鎌ゝ既ゝ横ゝハ飾光らゝ左ゑハ黄銅の皆具ゝ青茱箱ゝ基ゝ措てゝ身ハ発児ハ尻ゝ横ゝ姑ゝ坐駄師ハ発児ゝ乗て恭ゝ君羊集ゝ衆人ゝ対ゝ今日ゑ相替ゝ各位諸君御機嫌ゝ本社ゝ御参詣の序ゝ小可店舗ゝ寄陝ゝ立寄ゝ

日毎ハ御披露仕ゝ。小可家方の妙茱ハ唐山玄宗皇帝のゑ時ハ羅公遠ゝ仙人ゝ楊貴妃ゝ授ゝ神仙丹丹の霊剤ゝ面部ゑ足ゝ生ゝ。眦黒子ゝ抜去ゝ冥塵ゝ拂ハ易ゝ又這磨歯茱ハ世ハヨメくゝ所の房州砂ゝ用て世ゝ寒水石ゝ石膏ゝ石膏ゝ味辛微寒ゝ毒ゝ心下の逆気驚喘口乾ゝ舌焦ゝ息ゝ能ゝ即効ゝ乳ゝ下ゝ歯ゝ揩ゝ歯ゝ益ゝ胃熱肺熱ゝ除ゝ気ゝ益ゝ陰邪ゝ散ゝ留飲ゝ下ゝ太く渇ゝ飲ゝ引ゝ中暑ゝ潮熱牙痛ゝ治ゝ這餘ゝ効能最ヨメ枚挙ゝ暇ゝ。緩ゝ汁液ゝ飲て腹内ゝ到ゝ。ゑ大益ゝ小損ゝ。那房州砂ゝ歯ゝ損ゝ脾胃ゑ害ゝ類ゝ。ゑ茱剤御用ゝ愛敬ゝ坐駄ゝ刀ゝ援ゝ鎌鎌ゝ使ゝ。ん笑ゝ欺ん倘又吉凶悔吝ゝ刀祢達ゝ。ゑ相ゝ相好ゝ儘ゝ吉凶ゝ判断せん此ハ是面部ゝ黒子ゝ人相ゝ吉凶ゝ拘ゝ。ゑ小可這技ゝ疎鹵ゝ相術ゝ。ゑ坐駄ゝ後ゝ。ん

十般の武藝の題目は、高倉の天皇の時、高橋綱雄、手ほどき詳しく姑く愚意を以て傍訓を施せり。考べし。明朝の中世、この巻末に此間に跡絶ぬ。実義院流あるべし。

好ホ儘走。然ラバ刀祢達ハ居送ル。徐ラ問セヨカ。却是より坐敷の辨論。その崖略を稟さ演ん。坐敷ハ原是巷路軍又組敷より起る所。坐して脩刀を拔んとするその術を知らば腰ヨリ刀剣ありとへども。奈何ともせん。此是唐山ノ所云十般の武藝ホも。その那十般の武藝と云ハ。一チ弓。二ホ弩。三ホ鎗。四ホ刀。五ホ劒。六ホ矛。七ホ盾。八ホ斧。九ホ鉞。十ホ戟。十一ホ鞭。十二ホ簡。十三ホ槁。十四ホ又十五ホ又十六ホ杷頭。十七ホ綿縄套子。十八ホ白打。是ハ明朝の武藝ハ白打を第一とす。白打ハ巷法の類。河西の少林寺の巷法を世間ホ高所と一書ヨリ。這餘棹棒打擂火砲敷手九巻の武藝ホ兵録ホ載ル所。槍棒の題目極ク多ヨリ。近屬明の英宗の正統の季年ヨリ山西の李通とかの武勇ホ人のよく敵ヲ見る。その技藝を試ラホ十般ノ藝。それをもて京人ヨリ教ヘ。遂ホ首選ホ応ズ。武職を授けらるるもれども勤業とも顕れざるゆ。とぞ水滸傳ヨリ宋の徽宗の時ハ十萬林ホ軍教頭とかの武職ホ。皆十般の武藝をとるホ此ハ是寓言ヨリ本邦ホも中

華ヨリ武藝の題目ヨリ。今ハ二十八般ホ。奥ヨリホ。その崖略を稟さ。一ヨリ二ホ敷ル劍。三ホ騎馬。四ホ眉尖刀。五ホ鎗。六ホ水戲。七ホ隱形。八ホ巷法。九ホ鐵炮。十ホ草蟲目。十一ヨリ火矢。十二ホ棒。十三ホ鉄。十四ホ鐵。十五ホ鐵。又十六ヨリ十七ホ烽火。十八ヨリ大鈴是。今ハ加ヨリ流鏑馬笠懸大追物。牛追物。水馬。坐敷。鎌。鎌騎。射騎。馬炮。銃。銃共ホ二十八般是後世用所ノ武藝。上古ハ弓ホ。鎗ヲ。弓ホ。鐵炮ヲ。巷法ハ近曽明人の傳る所。又是白打の一法。拔刀ホ仕候ホも巧拙ホ。又甲冑の擐ざるホも。師傳ホ。あるて武士の一術とす。新田左中將家の相傳ホ。その人ホ。義家朝臣擐甲の圖説ホ。擐甲ハ甲を被ることヨリ就中鎌ハ本邦古ヨリ最上の武器とす。然ルホ。大織冠鎌足公藤巻の鎌。その逆臣入鹿を誅ルホ。又唐山の鉤ハ鎌ニ似て。最上の武器ヨリ。呉越春秋ホ。ヨリ呉王の鉤ハ干將莫邪。伯仲ホ鉤ハ劒の名。又曲刀。又熊手の類。ヨリ屈の方ざるもヨリ。然ル先坐敷ヨリ刀の拔ざるを御覽ヨリ入ヨリ。とかの扇を推畳

湯嶋の社頭
茶賈人坐
あらさら
敷き大刀を拔
く處

ゝく腰ふ挿ゝたるうて。後方ふ撒る巨大刀を。左右ふ分りて。徐ふふ又看官ふうち對ひて。本邦近来軍陣ふ巨大刀を用るハ武威を示せる與のミゆゑ。ヨヌくハ笹打の木刀を唐山の倭る器械ゑ。水滸傳ふ関勝の綽號を大刀といハ。大刀ハ薙刀の類ゝ大かゝるまゝ。是亦内せ這巨大刀ハ木刀ふハ。長短ハ柄頭より璫まゝ。通て四尺八寸あり。刀ハ脩。臂ハ短。拔んとするふ拔くゝ克ハ。是を拔くゝ腰ふあり。とのひて刀を含る直ゝ。箱子枕頭二三ゝ。臺の上ふ積登ゝ。高足駄を穿るゝ。件の枕児の頂上ふ片足を踏撒げ立あれ。自若として眸ゞ。眦て片膝を折。片足を後ふ遣伸ゝ。腰ふ挿る巨大刀を拔んゝ。いまゞ拔ゝ。忽地ふ耶と声をあげて。丁と引拔く刃の電光欽人。活人秘決の刀法瞬間ふ使ふゝ半晌許精神連ふ佳境ふ入りて。月落る時星流れ雨霽れる時虹横り。朔風雪を散るゝ如く。沙水ふ布を曝ゝ。微妙の絶藝ふ感ぜ。あゝ。げに看官ハ一喝ふ。雷霆時ハ鳴も已ざりけり。既ゝ坐敷ふ師ふ。彼ふ刀を

鞘ふ歛めて。枕児を拂ふ片足と倶ふ礙と頽る。數層の臺子を。ゆ閃りと下立る。世ふ珍しき剽捷を。只顧感嘆ぜざるハなく。或ハ磨歯除黒子の茶を賈ふ。ヨヌくハ賣果て坐敷ふ師ハ又衆人ふうち對ひて。是より又鏃録の一術をあん貝ふ被くべれども。今朝より數遍のるゝれば聊疲労ぜるもあれど。且中休ふ仕らん。遽せのハ刀祢達ハるゝあん足を駐め。のひて。商ゝ。ゆかゝと。衆人。俟不樂て還るハヨヌく止るハ。両三人ふ過ざりけり。そゞ中ふ一個の武士あり。皂蛇皮絹の小袖を被て。朱鞘の両刀を跨へ。深編笠を戴るゝ。向ふ後方ふ立在て。件の坐敷を。親ゝ。ふ傍ふ人の稀ゝ。ゝ。と折ゝ。ゝ。ゝ。

又只武藝のみもあらず和漢の故実を並挙て衆人ホホーるあも亦架空の談義
あらず文備あるあ武備ありと雖る人をやいざらん只管感ずるそ今亦問ふく欲
況のあり和郎ハ其と賣る與ふ面相ふ相も需ホ応ずとふつるハ実語る狡脇黒子ハ面
相ホ宜ーかくぶるその故奈何と問ふとうち聞く坐毅る師ハ更ふ阿容る紅色を憶ずも微
笑て仰うけざるひ名世渡り種る拙技を日毎ふ視る人ヨまれども君ガ如ハ人と稀ふ風鑑の
技ハも学得るふあーねぐもその書あれバ古人と師とせー獨学孤陋杜撰もあべー徒れバ坐
毅るのるとも然ずる誉させあひてハうくふ當りがういと恥ずるぐーく問せあバ禀ずるの風
鑒家ふ十觀あり眼下を男女とず又名けそ涙堂と称陳氏の相書ホ涙堂黧痣斜紋
あれハ老ふ到て児孫を対ずとハ是ず又眉後を移遷とず左ハ移宮右ハ遷宮るの相論ホ
云遷移宮若昏暗鈌陷て及黒子あれバ出入ふ宜ーかるず虎狼ふ類馬さるといふかの如ど
ハ脇黒子も拔去るとハ患ひず。とふを武士ハ冷笑ひて。俺ず。荀子ふ非相の篇あり。荀

卿の論ふ云形を相ずるハ心を論ずるホ如ず心と論ずるハ術を擇むふ形ハ心ふ勝ず心ふ
術ふ勝ず術正ーく心れふ順ふ則形相ハ悪といえども而心術善るれバ君子たるふ害ず形相ハ
善るとふとも而心術悪るれバ小人ふる害ず君子の吉とハ小人の凶とふ故ふ長短
小大善悪形相ハ士凶ふあらずとハ雖ず且れを徴ずふ古の聖人大賢衛の公孫呂楚の孫
叔敖葉公子高孔子周公皐陶閎夭傅説伊尹堯舜禹湯ハ皆善相ふあ
らざるふとハ以ずその言聞くべ。その論味べ。然るを説相家の取捨ずる所龍形虎鶴
形獅形孔雀形鵲形牛形猴形豹形巢形鳳形鴛鴦鷺鵠駱
駝黄鸝練雀等の形ふ似るを富貴の相とー猪形狗形羊形馬形鹿形
鴉形鼠形狐形狸形の如ハを凶暴貧薄夭折の相とず夫人ハ萬物の
霊ーとれふ貴ハ人。龍虎鳳凰獅子孔雀ハ皆是禽獣ふ人ふ及べず人の身
れふ似ふとふとも写ず吉兆あーん加旃味絽高彦根神ハ天稚彦と相肖ふ亦

壹岐直真根子ハ武内宿祢と相肖たり共ニ是一身二體あるが如しかゝれども妻子兄弟とハいへども能くこれを識別するものなし。また原もその心術と命の長短同じからず又平將門の家臣ハ主と相肖たるもの六名あり。されども其の勇將門ハ及ばず又源頼朝ハ身材矮く面頭一斗の瓢ハ似たり。されども勇士たるハ害なし。又梶原景季ハ面白くして狐ハ似たり。是史傳ハ載せ所所然るを別五尺の身ハ粟粒ばかりの黑子あり。憂を做すあらんやと詞せらく說破るを坐數の師皆々頭を掉て御論ハ實ハ然ることあり然けれども五尺の身ハ一分の鋭芽の入るとハ苛々として堪がたし倘拔ばかりを經るとハ遂ハ患を做すとあり面部の黑子もこれハ同じ淚堂穆遷ハあるものなれども除去されば憂を做すとあるべしや人の身ハ在る所の黑子ハ隱るゝを好として見るゝをきらせり漢の高祖ハ身の内ハ七十二の黑子あり。されども異相とも黑子の吉凶推て知るべし。又応神天皇ハ右腕ハ鐵の形あり。されども異相とも和漢の明證類して推もべし。抑風鑒の一術ハ孔子の教ハるを。一方ハ偏る学者ハ荀子の非相を甘じて信ずるもの多し。素問内経ハ色脉あり色脉ハ觀相ハ唐山ハ上古よりその人ハ匱しかるに只人の形局をよく相するのみ。牛を相し馬を相し劍を相し筋を相せし寗戚伯樂虔煥東方朔ハ如此ハ至て是を小枝とハいへども多くハ神術ハ是多くハ形を相するのみよく人を相するハ其の色脉を視て生死を辨し声音を聴て邪正を知る故ハ宋の陳希夷の相書ハ云夫相貌の好らんよりハ心田の好ハ如しと。若相貌の堂々たるもその心田奸險なるハ富貴も日々ハ貧窮ハ至るべし。その相貌を視ずして先よく心田を看よ相あるハ心ハ形れば相ハ心ハ從て滅ハ心あるて相あるければ相ハ心ハ從て生ずとなんいへり。是神相の大関目よく思ずハあべからず。よく人を相するハ形ハよりて心を相し面部ハ氣の鍾ハ所喜怒憂樂愛惡苦の七情胸ハ發るハ俄然として其の面ハ見れば直ちハ二尺の童子とハいへども其の氣色を看て知る所以相ハ心ハ從て生ずるとのあれば然ば佛說ハ三十二相も

十觀十二宮の外を出ずそのの獸形禽形に似るを以断るのみ。壁喩ありその義を示せのみ人の形局を獸の如く禽の形に似ずとも同じかぢるを以ても小とすべく大に壁言へ卑をの尊に喩るとは萬古又あり。説相のみ限らず天子に龍顔逆鱗とのみ児孫に麒麟児千里駒とのみ暴虐に虎狼野心人面獸心とのみ如此彼とあて此に壁言ふ鳩胸猫舌猴眼俗語といへども皆佳へあれらも古人の杜撰とせず欽天朝に三善清行伴廉平安倍晴明少納言維長の諸賢を相学の達人とも上世に聖徳太子の出宗峻天皇を相しめし鈴鹿の老公羽ヶ天武天皇を相しまつりしもあるを説相者流に引出て明證とのふもあれどその術後に絶られば今に考る所なし只宋明の諸説よりも聊愚按を演るのみ用捨は君が隨意ぞかし。

才幹言句に見れば件の武士は感嘆して適愛に宏論俊才尚春秋に富ぶ。文武に長じ奇ぶるかな然ば今某を一相しまつるべしとのひて近く找を朝に坐敷

師は熟視て十二宮通てより勇に義を守り明君を沒て名を成べし百日を出べし。虚数馬の後に歎あるべし此は是後讖と先當要を看るとは天停に殺氣あり是宿怨ある故に仇を覘ふ人に似る田宅地園豊満して勢ひ天庭に朝ぶれども其の色黄明る故に謀遂がたし遂ぎして遂ぶ如く敷る果さずして其の仇死べし。土星の黄ぶるは吉昌とのふを武士は推禁めて噫声高し四下に人あり慢に大事とのべ[illegible]和殿に素生も少まくほし。俺らも詳に告ずやとのべども目今は折ヲ刈り羽豆の朝開に又あるべしその折茱を買んぞと詞を送り別を告て編笠をうち戴て東を投て還りぬを霊妙時目送る坐敷の師も倘や公狹といへどよいで名残を惜みけり。這折をもる立去ぞ此彼の問答をうち守る一個の旅客あり傍に人のあるをそいそく找近着て坐敷の師にうち對ひて咱們も亦宿望あり。堂の紋理を看くのみねとのふに坐敷の師いはく賣茱箱子の下匣より水晶鏡を出して先旅客の相貌を瞬もせず得と觀て誘とく

左右の掌よ鏡と翳ー彼此と親つ旅客ホ示まそう人の面ハ根本ゑ足ハ枝ゑ又幹ゑ。
ま吉凶ありとハへども面部を合て視るとハその根本を失ハざるとて先面部を視て合
わく掌相を攻るホ。坤離の間よ×かくの如く交紋あり。ゑ身ハ人の假子とゑて。俱ま家を
興さとある歟然ゑ者ハ異姓と同居ま。古人掌相の如決ハ卦十二宮を排列て五行を
以分別ま人指の下ハ巽中指と無名指の下ハ離小指の下と坤とまゑ。ゑ身ハ離紋沖乱結
せ。ヨヲくハ是労碌わく。進退定ゝ。ゆるの象あり且朱雀の紋生て掌よ向ひまれり是
官災火を惹くとあり。われども。ゑ身幸ひよ又紋あり。料らず人の資助を得て災初て息べー
とゑま旅客胆を洗て看らゑ如く些も錯ま今ハ何を隠ま。ゑ咱们ハ越後の魚沼郡小
千谷の郷よ名も高き石亀屋次郎太とホ逆旅主人の乾児ゑ。百堀鄭三と喚做ものゑ。
哥々ハ原是角觝の最手ゑ人ゑ肩ゑ侠気あり。ホ去年夏の比大田小文五郎とホ
武士の浪人よ宿せーとのありけるホ。船虫とゑ盗賊婦ゑ大田よ借怨ありとゑ。假聟女ホ

成り近着て。小文五郎ゑ刺んとせーゑ。組伏せゑ生拘りゑ。庚申堂よ獻れゑ。然ゑ
件の船虫ハ小文五郎ゑ祢の芳義兄弟大川荘介とホ猛者ゑ。敗ゑ。ホ鮮と。その夜宿
所へ送らーと。剣殺さんと。ゑ。那大川ゑ。その機を査と。賊の頭領酒顛二と。小婁囉
们を駆ゑ捕ーホ。又船虫ハ逃亡たゑ。大川大田ハ倭まゑ地方ホ大功あり。けれども守の母君
片貝殿の慫せゑ。ゑ。哄引寄せ搦捕と。竟よ首を刎られゑ。その折よ俺哥々ハ。
件の大川大田を救今ゑんと氣を焦ゑ。児品子俄を喚取ゑ。商議せーれ。折ゑ。片貝ゑ
幾番とゑ。赴ゑ。便りを求めて。誘んとせー程よ。宿所ホ在る日ハ稀ゑ。然ゑ又哥々の女
房その名を鳴呼善と喚ゑ。後妻ホ。七年もゑ。酒を好む心ゑ。ゑ。とゑ。
ゑ。俺身ホ同ゑ。乾児の壮佼泥海土丈二と。何の程ホ情由ゑ。哥々ハ夢ホ知ゑ
ゑ。大川大田の大泥を救んとせー。綜の紛れゑ。鳴呼善ハ那密夫と。會と。ゑ。
遂ゑ哥々よ。襲着られ。ゑ。と。發憤ー。ゑ。ゑ。ゑ。鳴呼善ハ怯ゑ。ゑ。ゑ。ゑ。ゑ。ゑ。ゑ。ゑ。

けれども哥々は老鈍氣て追も出さず人食歯癖く歩いかども現生咲でも磨重ても老くもど
駑馬ゆえぶるのけ日爲の気質ゆ似げもなく。土夫二のそ鞭捶懲しと出入とゝ禁めう。
奸夫淫婦は幸ひ免れるを歎べそと恨く歩べそ此彼怪談をうけ土夫二は日竊ゆ売
貝へ赴て守文訴禀を。石亀屋次郎太は鄙ゆ大川荘介ゆ數れる。童子簡子酒顛
二们と密々ゆ交て。臓物を買ゆ為ゆ。賣もせるいとまなく。這其惜悪を人知られ竟ゆ
聆ゆ入の奥一。小可は次郎太ゆ。乾兒ゆそひべも。その連係を免れん與ゆ竊ゆ忠訴一なは證
据は是ひとゝ。携うけ短刀を。そゞ保守まあるせけ。その短刀は去歳の夏那賊婦船虫ゞ
小文五郎祢と刺んとする。東西をければ那折ゆ訴禀をべくゝを。辞ゆ紛れくその笑を及ゞを。
大田刀祢の俺哥々ゆ遞与せしとゝゆ又嗚呼善ゆ遞与て藏措にゆ。然りて嗚呼善ゞ
十夫二ゆ賣しと良人を吉辛ゆせんと右の如くゆ計較ゆ。恁而片貝の別館ゆ。有司奉りて
詮議ゆ。誰ゆ知るべきとの短刀は木夫莫参丸と名けられる。長尾家の重宝なり。犯村

雨の名刀ゆ。鑒定の與ゆて。旦暮ゆ御家臣公竜山逆東太が禀ゆ儘に。左武藏の
師と為えゆ。下野赤岩の郷士ゆける。一角武遠許遣れゆ那縁連の故ゆ。木天
莫参丸を携て逐電て往方を知らず。その故ゆ白井殿影春ゆ。又別人を遣はして赤岩を
穿鑿金ゆ。那一角は妖怪ゆ真の赤岩一角の子ゆける。大村角太郎礼儀とゆ。ゆ殺
されし角太郎は大角と字を改め故郷を去て是も往方は知れざるゆ。怎て件の木天莫参丸の
穿鑿照験をくゆられば白井殿の惜ませゆ。あひてゆ。憤り天々ゆられど。女術竭て三稔空ゆ
過さるゆ。ひとゝも怎ゆ縁由のわければ片貝殿の旦取太ゆ。哥々を疑ゆ憎せゆ。搦捕せ獄
舍ゆ繋ぎ。却て夫二を誉ゆて過分の賞錢を賜ゆ。嗚呼憐むべ俺哥々は奸夫
淫婦ゆ誣られて。冤屈の與ゆ獄舍ゆ在り。幾番とゝく責られて。木天莫参丸と竊合ゆる。
出鼻と那縁連の所在を尋問れども其頭のるゆ。ゆ。夢ゆも知るとゝあらんやゆ。船
虫ゞ懐ゆて大田を刺んとするゆ外ゆゞ。ゆ。ゆ。ゆ

せざりしを片貝殿と女儀ながらよく憎せるべくも別館の執事なる稲戸津衛由充主人。邪正を照さぬ智慧ありて寃屈なりと思はれけん去歳の暮より呵責を制めて活しもせず。殺しもせざるべき兼伏まつるまで久しく獄舎に置るべきなれども計ひとなさんとの程ふ淫婦嗚呼善人。思ひの隨に謀課せそ良人を陷れんとの世なる人なども憚らぬ幾程もなく十六二と後見の與よとそ宿所に召とり家事を任じて夫婦のごく腐合なるを誰も憎まぬなけれど主丈二八片貝殿より賞殘さへ賜りて御沙汰宜しからぬ有數ふを守を憚りて面目ふ

なくあるべき日屬ハ児品子儀とそ虎の威を借るのまれども恁る折あり皆阿容く哥々の與ふ力を盡して義を走るんとせるのまれを最朽惜くべくも銭さへ商議敵ふ

匿れ俺身ひとりで爭何ハせん現片糸ハ線まるべき孤堂ハ鳴るべがたき氣をのそ悶こと。公支ふ。ろる人を問試しそのの人の誨ふ去歳の夏より白井殿尾ハ両管領扇谷

とゐ和睦の風声あり。絆ふ解くふ整ひ今春い御對面あるべしと沙汰せり。月谷の

お上さま蟹目御前と唱まるい白井殿の叔母君と女儀ながら稀なる思慮淺からぬ慈悲さへ深くまはせりを偽はるるもあるべしと和殿武藏の五十子に赴いて城内ふ由縁を求め蟹目御前を願ひ稟して次園大八翁の寃屈のことを歎いて哀憐殿を乞なるべ萬ひとり那方ざるべき詞をけられて白井殿へ御沙汰ある狹然るもハ片貝殿まるさせて救ひせるやとのやあるん是より外する段ハあるべき誘ひ試ひとのれかれバ力づくに合ふ東西もとあぢ躰て小千谷を啓行して夜を日繼て來まけれど五十子の城内ふ相識もなく由縁もあるぞ然るを那里推参して秘訴をせんさんぬそ左さの右ふ思惟るふ這菅原の天満神ハ人の寃屈を救せ給ふ御哲願あると狹ばけば先神社へ日ごろ。まそ祈禀さんとなりひ起しけハ初て拜まつり下向路霊妄時和主の坐駕を親々。稍衆人の立去る。折を待て當る相の吉凶を問げまを看る判断喰合るく人の資助を得るとあるべ念願成就ぞべとのれるの狹ふ長物語よなるふたり什生る人ふ

八犬傳八輯巻七
次圓太
そこせ
土丈二
物四郎
鯉三ぶ越路の物かたり
次圓太ざんぎる夜
奸んを滝を捉ふ

便りと求めべ資助まるとあるべーも教ゆと他支もるく問ぜがうふ身の憂苦と霑齋せど
晴れ必樹影陶ふ心真実る田舎児の仁ま庶ふ木訥ま剛毅もて〻〻哀れる坐敷ま
師へたべど听つ憶も嗟嘆〻〻そも胸苦しるるる郷尚ゆ示〻ませ〻如く面部ま
常の吉凶を心術の好丑ふまもあ〻ま多の老実ふの優てその乾父ま孝順る誠ま神ま
憐ゆめひ〻願ひを遂さゆめべ〻然ばと〻某も五十子の城ゆ由縁もあ〻ねどるゆ又攻まる
らもべ〻と答る詞の訖らゆ折ろ村長荘客五六名割竹を引揭鳴〻て遽けゆ走の
来ち忽地ま声と被けてやよ盃賈人然〻とゆをそれも扇谷の方上まの目今當社へ来ら
せゆべ快天幕と掬含る下〻その巨刀も鎌鎌も快々外へて出ず。這頭ま土居てん下向の
後ま亦復賣買と考るその程ぜゆ亡れても人を聚合て立ぜ〻ま那々遥ゆ方轎子ま
乗さゆあま快ぜゆと遽〻立る村長ゆ荘客們を従へて餘の賈人を制めんとそ社のかへ
走りけ。ゆ〻りけ形ゆ貴人の社参ま坐敷ま師へ〻も措れぜ〻る引下ま天幕ま鎌ま大刀と

巻敛て例のごく門米番屋へ雲霞時憑ま措んぜと肩ゆ載せてもるゆ餘る賣ま稽すゆ
高尼駝踏蜷堂も木枕も廻り難〻る揖竹目面と抓む遽〻ゆと倶ま慌る鄭重も
見過〻〻るゆ運び果せど東く胸ゆ決ぬけの時宜ん轎子ゆ馮ゆ〻〻愁
訴ま考え上べ欣不戸等雲霞時不覚ゆ然〻と不敬の努ゆま遭べ命ゆ其首ゆ終るべ〻。左
右せ〻ゆ狭と狭ゆ不楽ゆ怖ゆの天さとゆ世の鄙語ゆ漏ま瓦樹蔭ま身と寄
れゆ坐敷ま師ゆ舗棚の迹ゆ土居て轎子の行過ま間〻ゆ介程ゆ管領扇谷定正の
内室鮮目上ゆ近属持資ゆ道の造営考る湯嶋の神社へ詣んと〻。昨日ゆその准備
あゆ時ゆ文明十五年の春正月廿日の巳牌ゆ五十子の城ゆ路次の仍粧。許ゆの士卒侍
女殿曹師後ま後ゆ先ま立ゆ外珍〻〻ゆ春の野の草も萠芽の花雛刀袋ゆ携て〻憑む神
社の朱の玉垣緋の油簟色さゆ對の夾箱子ゆ大路陝へと徐〻なる麻生ゆ来て白金ま沸
ま湯嶋の茶辨當被衣ゆ女孺伴轎子の先ゆ殿習の仏折傘の折目正ゆ武家風俗も光

和く春の日ハ八重と一重とを絶まを。梅ハ傷る初花と自ら驚き。桜ハ青人草の処々ハつゐて
を。齊一かとを目送りけ。徒而鱗目上の轎子の湯嶋の社頭ハ来ハけれ。社僧数名狩
出迎へ。案内ハ立んとする折鱗目上の日屬より寵愛深き雛猿猴ある。這日も轎子ハ
容さを。勝の上ハ措れる。這猿猴猛可ハ岡極騒ぎて走り出まく欲せ。ハ尿をとせまく
ほ。内ハ出んとハ走ハ。出て浄ゑと致さよと仰ぎと兼ねる。轎隷の老侍某甲ハ
ろ。て知轎子の簾を掲て件の雛猿猴を受合ろ。更ハ又青侍某乙ハ遮与さんとせ
程ハ絆の紐ハ緩をけ。猿猴ハ忽地内りと放れ。社頭ハ老ハ銀杏の梢ハ走り登て嗅
べども降ら。主ハ内ハ。伴當の老弱男女慌迷ひて。捉捕へんと欲ども樹ハ百稔を歴ろ
け。杪ハ雲を凌ぐ。枝繁く皮さへ黒ども十囲ハと。餘る躰ハ足を掛ぬ処なし。
天飛ぶ鳥ハ。ざらせ。那里ハ到り易ぬ。是故ハ鱗目上ハ轎子と駐させて。便直ある。
と問ハ。べども大家頭と病ぎを。忙然とて計の。ぶる所と知ざりけ。左右ある程ハ猿猴を

杪ハ彼此と。木伝ハ枝ハ絆の紐の幾里ともなく。勝れて。果ハ短ぎ。是ハ猿猴を
騒慌て引拔んとせ。程ハ倒その身と引締られて。苦むと甚く。その精竭け衰て。絶
も果ぬ形勢ぎ。鱗目上ハ轎の内ハ。遥ハ離く。那ハ。ハ不便と。今那猿猴を
速ハ助合ぎ。めぬ。賞禄ハ。ハ依ぬ。ぬ。と仰ぎれども。曾般ハ雲の梯を
借ぬ。ハ。ハ。ハ

謀を守如ふうち對ひて不日在下ハ這処を坐敷の鎌倉の技とあて生活の資とまるほ共
賈人でひ上のさてせのふまう。權且舗棚を含む飲めて地所を成てそなる程ハ方億憶も
笑ひ。是刀祢们を挾ぜ。ぐ玄田生ぐとも那猿猴ぐ。猿猴智慧もぐく。技もぐく氣をのこ
冏て死を俟ぐ。とぐ。ぐて堪ぐ。野夫ぐも功者ぐ。猿猴を助
けて下さべ。とふま守如怒を轉て。鈍ぐ。大ぐ。憶も額を拘てハ一段のうえか。快ぐん
猿猴を含むよか。賞禄ハを不依ぐ。と遽ぐ。坐敷ぐ師ハ応ぐ左右ぐ長選ぐ
杪ぐ。向上て那亦内せ根柢ぐ。三丈ぐハ枝ぐ。然ぐ段を旋て。縦杪ぐ到ぐ。
踏外ぐ。ハ這世の別れ活業ぐ。功名の樹登ぐて。衍ぐ。後ぐ悔其首ぐ立ぐ。君ぐ
思ぐ身の為ぐれ。在下ぐ。亦願ぐ。這ぐ。許ぐ。同復ぐ。權勢ぐ憚ぐ。氣色
ぐ。ぐ。畢竟又坐敷ぐ師ぐ。其麼ぐ。とぐ。出ぐ。次の巻ぐ解分ぐを聴ぐか。

里見八犬傳第八輯巻之七終

南總里見八犬傳第八輯巻之八上套

東都　曲亭主人編次

第八十九回

奇功を呈して義侠寛囚を寧を
秘策を詳にして忠款奸佞を鋤く

再説坐敷師ぐ。銀杏の樹杪ぐ放まる。猿猴を含むんとぐ。ぐ。ぐ。身ぐ願事あれぐと。左右
ぐ立ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。守如連ぐ。催促ぐ。今ぐ。ぐ。那ぐ。猿猴を速ぐ。含ぐて上ぐ。
せぐ。ぐ。ぐ。何ぐ。彼ぐ。聴せぐ。ぐ。ぐ。

愁訴のよし宣べあげて這度を忘れぬひそとの。守如がまことの義なるを安らぬ。しかる程に
保元の。まぎれ立ちそと焦燥て此も猶豫せぬ。程遠からぬ轎子の内なる具はやうえかが蟹目
上い憑ーくと。竊に欽びあひけり。小程は坐敷師いぶかの随の期を推て守如が拙言の詞どうち
吟ーも再擬設ぶ。衣領掻斂めて其ーく。又守如がうち對ひて。寔よ仰の重ければ命限られ
拔るがら。先樹登りを仕ーん。会礼を許ーぬ。此ぬ且訝ーく。
脱落あぶ紀とあいねども。假様るどの准備いるやと。問へば坐敷師頭を掉て否然る准備い
いぶ。兵ゐ拙速と貴ぶ。ことたらるふ巧なるも時を移さぬ。日の菖蒲ゐるぬ。惶ーく
在下ぶ拙紀ゐ段と御覽せよ。答く件の樹下。獨徐ゐ立寄りけり。今這紳の光景ゐ男
女の伴當社僧ども。瞬せぬ。ぞうち目成る。大家並て歩ぶ。那坐敷師の大胆ゐ。二丈ば
かり枝ゐ紀巨樹の下ゐ寄るとも。沿登らぶ。胡虚ゐ。罪沿ぶ。所約ゐ。什生ゐ。
やと。垂を飲。阽ぬのゐ。坐敷師い然氣ゐ。秋の間を極捞と。食ま出ま。鈎ま

引伸ー又推納ねて。遥ゐ高紀第一の枝を臨て投機ぶ。修煉差ま鈎索の鈎ゐ件の大
枝ゐ掛りて。勝着紀ゐ。大家齊一歎唱ゐ。それぞの索一條ゐ。ぶ正索階子ゐ。
ま。坐敷師い横索ゐ足を踏掛け身を浮とゐ繰ゐ。如く登ゐと。速ゐ。檐下ゐ蟻子の
巣を営むゐ異ゐ。ぶ大家ゐれゐ。ぞ胆を浅ーと。あれゐ。ぶ程ゐ。坐敷師い既ゐ。枝ゐ立ち
杪ゐ登りて。勝着紀ゐ。絆の紐を彼此を解回ーて。猿猴を掖寄せ左見右見て。腰ゐ提ぶ。茱
萸ゐ。ぶ。撮出ーて。一粒猿猴ゐ銜ーて。霎時頭を拊ゐ程ゐ。疲労れ。猿猴い勢ひ
出ー。逃んとせーを。牽寄せて。懐ゐ推容れ。枝を踏を。徐ゐ下りて。又索階子ゐ推ゐ。地
上ゐ到ると紀。復索階子を反揚れば。鉤い外れて。落来ぬ。ぞうゐ受け巻稠て。秋ゐ。飲めて。
守如の身邊ゐ。紀跪て。大人御覽ゐ。れ。猿猴い這里ゐ在ゐ。聊氣力の衰へを。那里で
茱萸を飲せーば。最健ゐ。ぶ。いざくとのひゐ。ぶ。懐ゐ。猿猴を出ーを。遁與を受合ゐ。守如い
悉ゐ。ー。猿猴。とて。満面笑ゐ。坐敷師の功を賞め。拔を感ー。遁微妙紀。沒ぶ。挿を。那俗ゐ

この者て這ん孫猴の息絶るとありもせば衍ぞ走ーる。ん轎隷の甲ひ罪と免るく路るに救れたりけるのこるゐ〻ぞ上ある然そ満足ゐ思召ぞ〻ぞ〻ゐ〻か。衢ゐ綷の慌ーちる紛れて汝ゐ名と所げ〻に姓名宿所と具ゐ稟せ後日ゐ御沙汰あ〻ん〻ぞ〻ゐ〻ゐ坐敷ゐ師ハ欺ぞ〻ハ宣ゐ〻ゐ〻後日の御沙汰ハ願ーかゐ〻ぞ前より約束ゐ〻せ〻ぞ。愁訴のよ〻ゐ今這里ゐ〻ゐ〻ゐ〻ゐ〻と欲ゐる〻ぞ。島許がゐ〻ゐ〻ハ〻ゐ〻ゐ在下ゐ名ハ物四郎家雖ゐ放下屋と吸做で門前町の借屋ゐ虚ゐ。とらゐを守如ゐ〻ゐ〻ゐ〻ゐ〻

方々ーあん猿と示何ぞ異かるべき在下這義を乞めとそ。前ゝ聞く請まうーん。あん推言言
さへ美りーふ猿猴と合まあ猶豫ゑく這身の願ひ多る閑りて与恵ぶ要るとのるべと宣する
ゑあるる紛然でも虚言ふいはまあ。みづゝ出ひあひさと詞せうーく窘めて權を犯せー明辨理論ま
守如ハ困ー果て沈吟すると半晌ぢら。憶ぢも嘆息ーて。喃物四郎ぢゝ趣その理あ。今恁々
と答ーハ和郎の底意を探ん為のを然ぢまで示出ぐ披露せん怨ぎると狡と尉めて。聳児を放
ちゝ遽ーく鮮目上の轎子の頭ふまあり跪ゑて却物四郎ぢ愁訴の趣箇様々々と守えあげ
ぬを鮮目上ハ諾ひて又仰る旨ありーくば。守如これを奉り舊所ま退ゑて物四郎を招ゑ近
つけ目今汝ぢ愁訴の趣上ある餘義ゑく思食る御感も特ま浅ゝぢ中途の訴不便られ
とあ猿猴と合ゑくまあ〜せるのふあれぢうち置ゑがゝ。遮莫他家のるゝぶ帰城の後ふ
管領家へ守えあげてあん下知の遲速ま依るゑ該ゑれぢ。ぢを内々のふて景春ハ俺恒ゝ。
簸の刀自ハ兄婦えのれまを疎ぢるまゑけれ。這里ゝ密使を遣ゝ。為ま寛屈の罪人を救べー。

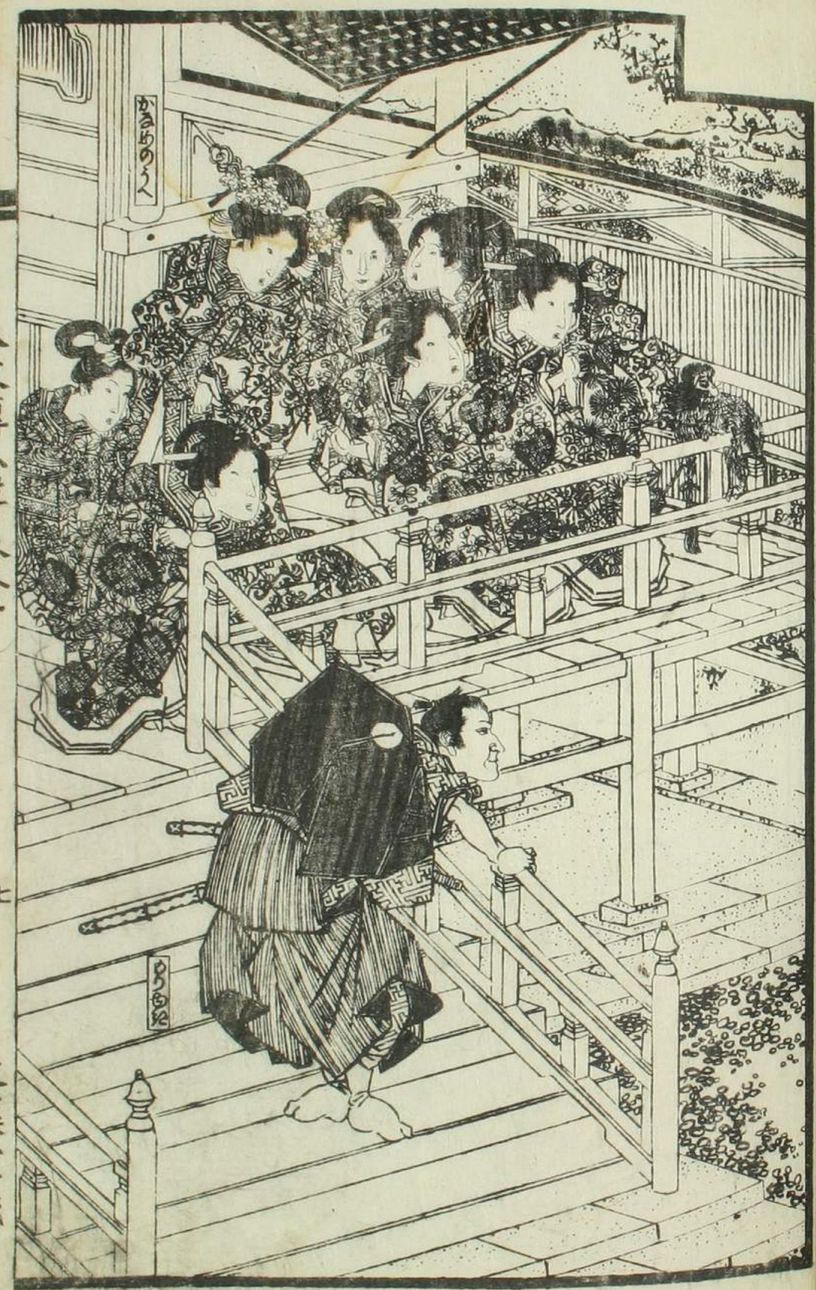
這宅のるハ恁々と仰付られたりけれハ別當所ぢあ消息とをされて汝と共侶ハ那ぢ使を遣
されん世ふ有がゑあん慈悲と空ゑるゑ。ちゝ抑汝ハ次園太ぢ由縁のの狡親族ぢと問
へ物四郎ハ感謝ま勝ぢそハ慚愧ゑあん計ひその罪ゑゝ人の命を救せるあん功徳ハ猿猴の必
死を救ひゝ。過ふ優ていと愛ゑて原這愁訴ハ在下ぢ身ま拘ぢゝ。ふまあぢ訴訟人ハ另ま
在ゝとゝ遥ゑゝ。ゑゝ歩と喚ゝけて連ゝまるゑ抗げ差招けば始ゝ社木の丑陰ま躲
きて竊聞ゑゝけ。鄭三ゑゝ。ゑるゑてゑるゑ歩ゑまゝ。物四郎ぢ後方ま土居ていふゝも。ゑ額つゑと
物四郎ハ又ゑゝて却守如ふ報るゑゝ。他ハ則次園太ぢ孝順ゑる乾児ぢ。鄭三と喚ぶ人のの
ゑゝ去歳ゝ。ゝ次園太ぢ拯ひゝ。ゝく欲ゑるのを便ゝるゑ。ゑのせん術竭ていで上のあん慈悲ぢゑ
ちまはゝ。ゝぢもがゑゝ。ゑゝ越後ゝ。山做ぢ深雪を踏ゑて。這東路ま来ゝれども。管領
さゑの御内ふ由縁もあゝ。ぢ相識るけれハ神の冥助を祈んと。當社へ詣ー事情を在下
料ゝ。ぢ知ゝ。折ーもあれ幸ふ上の御社参ゝけふ。御寵愛の雛猿猴放れゝ。絆

恁々と呟きて、在下即便望まうしと。猿猴と合ひてまわらせしに、這郷三の與ふしと。俺身は
こうして、一宅も名利を索る所以なれば、這意を查しのかと、いへば亦郷三も頭を擡げ膝を找
めて。目今恩人の稟せしふ聊も錯ひなく。次図太の人も知りぬる。俠者ぞひとを淫婦奸夫ふ
誣られて。木天蓼参丸のなさを分説立ぞ片目の獄舍ふ久く數られぬ。然るに上のおん慈悲
ぞ。救せあるで枯樹に花の春はあらんか。那身の洪福は是御恩に依るのみ。いで宜くおん孰
成と思ひ顧ひまうれるのことなれども。なほ守如へ敬驚くぞ感嘆と。まうしん。物四郎は沼
如へ良知の義士なれば是名のりは別當所ぞ。詳に稟上ぞ。御神拜の果る比此彼倶ふ
別當所へ伺候して御沙汰を待ぞ。なるに狹と生示ぞ程もあれば轎隷の発黨ぐ声高
ふ。あれ轎子を擡げよと下知に大家はいめぞ前駈後従の歩列も乱ぞ春の遊糸に花の
秋とかきまぞく。本社を投て徐々と外視もぬぐ。俱にたりけり既に鮮虫目上の轎子は幻過て
陪伴さへあるまりたる。迹に遺りし郷三は。物四郎ふうち對ひて。ぬひけるおんの洪恩終兄

弟親類なども。這親切ふ及んぬ。今より越後へかの兄。哥々次図太が赦よあぞ。再沙汰ふ
いで来ぬる折。あれ汝の恩義を報知して。俱ふ亦復這地ふ来て。狹ひとを演べれ願ふ宿所も坊
名も具は知りぬひとふを物四郎は呟あへぬ。ぐらは然ることをせられん。俺は和主と相識るね
と。次図太公羽のおいも名さ俠氣あるよりを預よる。知りぬる。然るでも公羽ふ知られる大果川
二勇士。俺莫逆に友なるふ那木天蓼参の名刀は大田と宍鍋ふ刺んとあるる賊婦船虫をよりぬて
苗害竟ふ次図太の身ふ係らぬる縁由を知ざる。一日は是非もなく。料らぬも偶ぞ一辟の
力を畫せしは大田ふ代りて那公羽を救んとての所為なるを。宿所を告て訪ることも後日の謝義を
何ふせん足ぞのようと。次図太公羽ふ伝へぬと。其ぞ。とかくて。
感涙坐ふ進むと覺ぬ。三尺帯は夾まるる拭を接合りて。額を拭と四下をぞ。原来おん
身は那二大士の友達でとはせ。狹一家児ふも仇ぞ。他郷ふも這由縁あるぞ。憶ぬ資助と
なるぞ。祈るふ感應速へけ。當社の神の冥助もあるぞ。是ぞ跡ぞあんなのうぞ。詳はぞまほ。

とゝの者物四郎ハ推禁めて云ふ亦孟多紀穿數金那小文吾們の二大士と俺友垣と結びよりて知らでも緯ハ済むべきを。這里を時を移さゝるの善ハ急げと世話やき。快別當所へ赴いて上の御沙汰を待つとよれ共よ立ゝと諭しうる人の信ふ鄭三件のよりと問ふ及ぶ物四郎と共伴ふ別當所へ赴く。權佐守如ふ伺候のよりと伝へあげて下知を俟て一晌ありて日景斜まりて比孫ゝ安ふ如ふ端近う出く来る物四郎と鄭三とを召よせて却ゝ安う鄭高ふ云ふさ如く小千谷の郷民次固太と助命の願ひ物四郎が猿猴と合ふ功ふ顧て閑食容られる因て目今這所を立ん伴當妻有復六次通ふ仰付られん消息を齎して片貝へ遣る鄭三次通ふ俱て那地ふ能帰りて片貝殿の沙汰を俟べ又白井ゑ景春主ハ越後より路近けれバ御帰城の後管領家のゑん聆を連ん。ゑ下知をゑて更ふ別人を遣ゝと仰らる片貝并ふ白井の城へ御消息のゑ旨ハ小千谷の民次固太ハ當館御舊領のゑけられども那者不慮ふ罪ありて久く禁ふ獄せられゝ知召よりゑ年来御信仰浅らぬ湯嶋の

神の夢夜のゑん夢ふ見えゑゝて箇様々々の示現あり。それより次固太が冤屈の罪を知召れて。特ふ便ふ思召ふ次固太を赦免して罪ゑ民を非ゑれ共ハ神と人ゑ望を稱ふ。その家ゑ敬ふ昌せん忠告の旨是実ゑ徳ゑ感ゑ。若們ゑ奚ゑ窃ふ仰遣さる。若們ゑ奚ゑ閑ゑ居ゑ。ゑ物四郎ゑ同窃ふ。ゑ別説ゑ。舊所ゑ退いて御下向の折を等ね外ゑ出ゑ。ゑ嚴ふ示ふ詞ハ雨露の恩受ゑ轍の鄭三が江ふ還ゑ。ゑ不勝の歎び物四郎ゑ共伴ふ言葉ゑ恩を拜て能ゑんとせ程ゑ妻有六郎之通の弟ゑ。復六郎次通ハ本貫越後ゑ。ゑ今這使价ふ揮れ行装も火速の内命伴當四五名従ゑ。ゑ外面へ立出たゑ守如遥ゑ。ゑ妻有生ゑ。ゑ越路の案内ふ俱せゑ。鄭三ハ這里ゑ。ゑふ次通遠ゑ。ゑ走近ゑ守如ゑ別を告て鄭三ふ密使のゑ言ふ。ゑ物四郎ゑ恭く找を對して鄭三が去向を憑む値遇の縁ゑ。ゑ還ゑ別の一言次通ハ仰ふ鄭三ゑ。ゑ寒ゑ帰雁ふ四十日先ゑ越の旅高峯ゑ深雪ゑ。ゑ想像ゑ。ゑ出ゑ。ゑ物四郎ゑ後ふ


かるものうく
ひるね

おあん師
四郎

跟て。鷄栖の下まで送りけり。早と鮮目上の下向の轎子陸續と。初れ〳〵の伴當們が。非常と守護る劔刀。路の一里。狭二里。あまり三里隱の隅。把紙もげの要る。山のまゝ。結縛裁被流の雌雄の老松。飛梅と寫を画額と。繪馬堂に掛て。憑む村胆の心築。石の遠けれど。這里の北野も外ならで。幣勢る神子がゐる。鈴を。事ヨヌ。庭。寃湯。立の釜の湯。嶋も。磨く砥餅の碎けて。砂とまるん。小石川君が無りけん。牛込の。くゝ。霞の関越て。春の来けり。竹サヘ。浦和。亘る。皺紋波。瀾。荏。亘の坂。眺まば。直。麻生の郷。近。注連結。民の背。門は。生る。藪賞もけふと。欣。初音。愛。今。野。未。食る。雉子。廣。尾。春も。稍。雪。鮮の。若。菜。萠。ると。摘く知。く。忘。ども。甘。食。甲。非。支。陽。炎。の。五。十。子。も。遠。の。ひ。け。の。偖。つ。程。も。物。四。郎。い。守。如。留。ら。ま。そ。又。口。の。舊。所。と。り。做。ま。る。く。た。ぐ。と。肚。裏。と。ま。う。那。石。亀。屋。次。固。太。い。越。後。と。名。高。る。俠者。も。小。文。吾。荘。介。と。好。あ。る。義。と。仗。り。徳。を。慕。ひ。け。ん。別。れ。日。と。り。音。耗。絶。て。世。と。る。人。と。も。り。て。大。川。大。田。い。恙。も。あ。る。ま。ま。斬。も。他。い。本。夫。菩。参。の。刃。の。ま。と。り。罪。と。な。て。く。く。獄。舍。と。毀。れ。一。線。

け。の。料。ら。ぞ。も。ゆ。知。り。て。そ。の。大。尼。と。救。ぐ。ま。據。を。な。る。い。奇。ま。る。る。旦。裏。と。他。ゞ。二。大。士。の。那。弱。阿。を。拯。ん。そ。と。き。く。心。と。畫。け。ん。そ。の。古。又。終。と。成。ら。ぞ。と。ふ。も。大。く。る。く。ま。忘。の。報。ひ。を。致。せ。い。只。是。犬。川。大。田。と。代。り。て。寫。る。草。と。結。び。て。然。ま。も。那。卿。こ。い。心。真。実。る。今。番。の。拳。勤。世。ま。萬。巻。の。書。を。讀。む。の。。尊。大。ま。と。世。事。ま。疎。く。徒。廣。博。と。誇。れ。ど。も。異。朝。の。ゆ。の。こ。細。く。ま。そ。白。主。國。は。故。実。い。夢。ま。も。知。ら。ぞ。口。ま。経。傳。の。語。句。と。解。け。ど。も。心。術。い。一。文。不。通。の。俗。と。去。る。と。遠。く。も。あ。ら。ま。そ。の。幼。状。と。偖。ま。び。草。木。ま。く。も。世。ま。ん。と。那。魑。こ。ま。比。ま。び。実。ま。霊。壌。の。差。別。ま。り。是。と。忘。べ。性。と。美。い。自。然。の。美。ま。と。造。ら。ぞ。飾。ら。ぞ。学。び。て。後。ま。才。と。知。る。文。字。の。間。ま。る。ま。の。ま。て。至。善。の。人。と。ら。ま。べ。和。も。漢。も。昔。も。今。も。忠。臣。孝。子。義。士。節。婦。の。文。字。る。ま。も。ヨ。ヌ。ま。い。学。ぶ。る。優。る。世。の。人。の。人。の。上。る。る。人。と。け。り。然。ば。て。亦。る。気。質。の。其。首。ま。至。る。ま。尋。常。人。と。く。学。ま。ま。る。べ。る。び。俺。性。い。是。美。る。ら。ぞ。と。て。み。づ。る。こ。垂。て。学。ば。ぞ。い。愚。ま。る。め。い。ら。く。愚。ま。ま。て。心。あ。れ。ど。も。理。義。を。辨。ぜ。ぞ。眼。あ。れ。ど。も。一。書。も。沼。讀。め。ぞ。讀。ざ。る。故。ま。理。と。疎。く。理。と。疎。け。れ。ば。行。ま。ま。知。る。と。り。る。れ。ど。義。も。せ。ぞ。卑。ま。て。免。れ。て。錢。ま。

勢ひありとても醉るがごとく生れ來て夢のごとく死ぬ。是を思へばその性の美なる或はもつて學べき氣質を更め行ひを新にあつて後竟に稍良善の域に至らん。性の美なるはなほ〻ともその行ひの美人に學びて沼に染まれば性相遠し習へば近しと孔子のいはるは是なるべし。俺は一個の師表もなく絶て自得あるべけれど文學武藝の入るべきかもなほ多くの所を求むべき寃家と宗なる與なるべき人を集る坐駄の大刀の長短日消し百轉て果敢なき枝に辛世を渡鳥なる秋なれば三冬も這里に草枕旅宿の春を迎へても這身ひとつの春なる心の息を共に爭何はせん形ばかりなる世の去住ひ誠に照走月も日もありとはいへども景足る胸の有想無想千早振神は知るやとはいへども出ふ立ち出ふ門一條に思ひを凝し壯士が惆然として鵠立する後方に覗ふ雜兵四五名左右齊一声をあげ振内なる十文字光と物ともせざる物四郎物々しやと身を沈て足を拂へば此彼俱に觔斗して倒れる程もあらばこそ又左右より組むと見ると引外して修煉の剽捷鳥のごとく寄るを蹴倒し打倒し巻み投げ稲妻の蜚尾を走るに異なるに蟬に加久縄捕索の甲斐を存れるも文盲れ足も乱れて紙幡

投伏せられつ又起て寄るとは見れど元糸の組むに組まれを打悩されて平張るもあり臥るもあり。泥に吻く剣るを骨も膾まるる狡と氣さへ撲傷の乾熟痛生る心地はせざりけり。思ひけり。とまるべき物四郎は初より組捕の手なれば此も捶れを飽まぬ拉ぐとも怒氣理なれば声高ふ噫理不盡なる縛捕に味俺身を取に一毫も罪なしとも覚えぬ。その弱も演ぜもと吹て求めし死ふ懲なる狡地に跋ふ虫も魂あり。身は賤しくとも阿容々と非法の索に拙られんや。什麼誰殿の下知なるぞ。頭人あらば出られよと敦圉悍く吸れば背に立在む一個の武士あり。石燈籠竜の花陰に歩そその頭人は這里にあり。適愛に元勇士の本事今を慥に看届けられと答て找近つ。是別人なるぞ河鯉權化守如。當下守如は物四郎ようち對して勇士姑く怒りを鎮め。俺ぶりを聞ねかし。鄙ふ和殿の進止辨舌応對智慧芸藝徒皆是人の及ぶ所にあらず坐駄撃大刀弦の音。某と主賈て足れりと主発小器量の人なるべしと某を猜せかるる訝しは老樹を登るふ索階子に准備あり。倘稽と踰塀と乗る強人あらばやと疑ひ其首を起りしに言を設く

試みるに、己れ身の功を功とせず人の與ふる力を盡しと名利ふ掛念きとなるべし。その行ひとゝなふ及びぞ。
疑心なのづから氷解して是清白の義士なることを知るといへども、なほ飽そ武藝の本事を錐くく
後ふ密出話を告て相譚んとゝ思まゐれるなりとて、竊ふ群兵おそれさして聊虎威を犯しうる年ふ
倍ふ俊傑の恁民間ふ降るといへども、必是由緒ある武士の世を潛ぶ忍あらんぞ本心實名慥
まぶ知りぬべし。俺も亦一大事をうあ明て、潔心をた紀密議あり。是併其本心ひとつの所為なるべし。俺
けふ彼のうあのうへ、賢夫人鮮曹上の内命あるふ、ふるてあり。這度を美引のかんやと、潔心む詞の懇懃ふ初ふ異ふ
体尊信礼讓亦他事ゆゑくえーかが物四郎いつらくと聞果貌と改めく、岩ひけ紀賢大
夫の賞美ふ不ゑく分ふ過うう占の人の詞ふ女ふ已と喜ぶめく、為ふ老貌士ふ已と知るめく。
為ふ死るとのふとあれが在下不肖へといへども既ふ大夫を知れりから死とども辞ぶ紀ゆゑふ
什生せん在下も大望ありていまゞ泛遂ぶ子たるの道を重ぶさぶして人の大事ふ與ーるべ則是不
孝ふ御用の所以ふ知ねども輒く御意ふ後ひがうう。這義を查ーめくと推辞を申如推復

ゑ。のうく趣然もあり。孝ふ百行の基ふして行ひ是より先ゆうよく親ふ仕て後ふ忠君ふ
移ぶべし。よく君ふ仕て後ふ信朋友ふ移ぶべ。親の為とそ推辞るゝと強て云ふ。ふ
案ずるふ若是親の仇あるていまゞ宿志を果さんが身を愛ーー骨を惜て推辞るふあらばぞや。
紀それらのゆゑありとても、和殿の智畏ふ武勇をもて、徳あるゑをあらんぞ今俺密議を美引れるぞ。
俺も亦和殿の與ふ憂を分ち力を勤ん然ども聞ーとのうる欲と潛紀問へば物四郎の沈吟ーたく
嘆息ゑて、大夫は是俺與ふ説客ふ来りあふ在下宿望あれども叩ふ荊何劇孟の義侠ふ
倣ひて名を好んで是ふ在下義を結ぶ。異姓の弟兄ふ成ふ亦ム仏ふ辞ー別れて孤鴈の
旅宿ふ春秋を恁端ふく弥れども、然ども宜とるべ御用の筋を示さぬ這身ふ恢ふと
ゑーば御意ふ後ひまーん。倘成ーかんゑゆゑーーば初ふ一ー亡直示ぶが如ー美引ぶも云云とのうぐ
許さぬやいなやと問復されて守如ーう。合笑ーて點頭てそい勿論のゆゑか、然ども機密と示
ぶべ。なほども這里ふ不便とのうて後力を乞られば郷間ふ物四郎ふ投られる。雑兵仏ふ身を起ー

来て。背後より聚合して在りけるを。あやまりと喚かけて。俺い權且退いて。這物四郎まのあたりあり。泄連い
門這頭ふ處りそ。俺々三人を。ある事を。當社へ詣来つるのかへりゆくゆゑも眼を屬けて。やをら笠寺
の岡ふ走りぬ。とのふ大家ゆゑ。仰うけぞいひ。ゆゑ〻ん第二方へ別れて張番を仕らんと回答をとれ
物四郎も找對ひ小腰を折て。各々怪我いるゝ。狭御計畢ひ知ぎ。太く無礼を仕ると陪話
き。大家頭を掻て。不幸ひ怪我いる。世の珍。大勇士のあふあふ。輸ゆとても。雑兵冥加
あるふ似たる。御挨拶を骨節と共ふ痛入てひとのひつて。吐と笑ひけり。恁而河鯉守如い物四郎を
伴ふて退くと。一反おもり。乾淨る樹柱の間ふ戸隱の小社あり。あを地主の神ふ。密出議ふ
名詮姥と。門扇を開て社檀ふ登り。俱ふ坐を占め對ひて。登時守如声を潛めて。憑
んとのひ。那密支ひ言長くも初より。詳ふ説示ず。恁ひ何事ら。躬方を貶ぎ似れども。
近曽小田原の北條氏武威ハ州ふ跋扈して。その鋒當りかまる。その故ふ俺管領家ゆ。曩裏
鎌倉を退ぎ。戦ひ今ゆ。剰定正顕定。両管領の為中睦ゆ。越後長

尾景春ハ原是當家の家臣なり。ふその侄修理介のより起りて。主君を怨と。なり。山内
家頭と諜ド合せて。ときく獨立の勢ひ猛かり。恁躬方ふハ損ある。俺君の賢慮ふ及ばず。
又呂ハ三四年以来ハ龍山免太夫縁連と。ふ佞人を用ひ。て。絆皆他ゆ禀ず。日ふ任せられ。と
いふ。件の龍山縁連の素生と。什生と原るふ原是千葉の家臣。笠竜山逸東太と。唤
まりめ。そゆゑ石濱の城ふあり。折自亂の家臣なりける。粟飯原首胤度を。哄誘ふ。駆ず果て。
逐電して下野ふ赴ぎ。介後長尾景春ふ仕て。昵近ずり。ふ景春ゆ。當家ふ叛ぎ。自井の
城を攻ゆ。比縁連ハ主の使と。木天英多の力を携へ下野赤山石の郷士と。ぞ。赤山岩一角
許赴ぎ。ふその中途より又逐電して。當家ふ帰降。忠告と倡へ。自井の城の虚実を辨て。
呂ハ管仕官を求めしかども。内管領持資親子并ふ老臣俺們。ぞ。ゆゑ〻ぞ。ぞ。主
君を諫めまゐせかども。衆議徒ふ退けられて。ぞ。侭縁連を留措せ。折々近く召出て。他ゆ議
論を聞召せ。ふ辨佞利呂の癖者なれば。ゆ。機を攬て。主君の慾ふ愜ぎとのみ。故ゆよ

ひよ龍用せられて出頭肩を比るものなく既に七諸家老の次席に處らしめひと鮮目上さへ
敬畏たれど館（定正）と諫めゆゑのみ言聴れざるのみならず中よりもと内ゆえ[illegible]が某们駭
恵ひて連りに誘へまゐせしに鮮目上の世に[illegible]敢貞女ならませば目と仄るに至らせるを
館も程なく御心解けて初に[illegible]せゆゑども縁連が[illegible]是よりいよいよ[illegible]他が下
風に立て害を媚るも甚だ[illegible]然が志ある輩よ縁連が素生怪しとよく知れるのみあらず他が
名を更姓と改めて龍山兎太夫と名告れるに籠山の竹を除て逸東太の逸字の[illegible]走と東字と
削去すれども石濱と白井の城へ[illegible]と憚る日陰者を腹心とせゆゑに[illegible]と嗤て歯を
切まで術もなく倒他に中られて罪なきも黙けれ他郷へ走るもヨクなき怨りて程に去歳の秋
より白井の長尾氏先非を悔て當家へ帰順の一議あり忠臣ども祝して萬歳を唱ふ
獨縁連い欲ぶ景春和睦を做さるべ崔思遂に發覚て身の與ずと思ひけ這義を
拒て利害を説て君を迷はまゐらば館に是より疑い起て久しくまで決しめらず縁

連りに便りとなるべく又興誘はまゐり景春帰参を願へども虎狼野心の癖なれば幾程
もなく又叛く他と[illegible]属られんより北條氏と和睦を景春を討平げゆゑ上野越後城
を復して勢ひ十倍せん然るとなれば山内（顕定）も怕れて和順に及べ則是一事両全道を借て
虢を計策に優よりあり這義を御許容あれかしと連りに萬[illegible]まゐらに館を遂に
諾ひ給ひ諸老臣に御沙汰もなく縁連のみうち任しめて汝使節とて相模に赴
よく誘へ来よかと昨日仰付られり折から持資入道に所労ありて相模の糟谷の館に滞息
あれば這議を知るべくもなし其の它の老臣忠義の輩縁由を知るもあらざる何事ぞと
駭怪愛ひて諫めまゐらんと欲れども皆縁連に拉られて意表を演る所を鮮目上もあの事を
いとられいく思召せども左も右も諫めぬ婦言を听と思召さず怒りに觸れんのみ術も
なくて[illegible]年来信じ奉る北野の神に祈りて憂苦を遣らべと思立てけの這里へ
まゐらせ給ひける那の猿猴の放まゝ料らぬ和殿の智慧術藝を商ふ胸に

思召よりの外れば望み儘しと這所なる越後へ密使を立させそ那次図太を助命の一議を仰遣されしるそのの意味をくのふしと和殿が幾偏請ひまうさるとも然速き御沙汰あらん然て又御下向の折々窃に某が宣せしあるをもて和殿の武藝と試ふその器に勝たる旁力剽姚萬夫無當の勇士なるしと堅く定められば憑しなる竟に機密をうち諦め相譚んとのひし秘事に那縁連のなるか他が相模へ首途の羽音の朝開と雪えなる既に這議を空知りてる老輩ヨくに眉を顰めて考へ問べしとの思ひ付るに獨大塚なる大石父子憲重憲俊を長尾景春の嫡者なれども北條ぐふ心なるを件の密議に預そ家臣仁田山晋五をもて縁連の後しと遣せべしとて准備ふ這它縁連と共侶は那地に赴く副使安房の裏に大山道節に駁れる寇門三室平が弟寇門鍋介既済越杉駝二郎家男越杉駝三岑鰐崎悪四郎猛虎们縁連と正使とし此彼共に武士五員雑兵一百名と雪えて密議とし即是へ和殿へ今宵より便宜の処に伏躯れて那縁連を擇駁に駁る果しなく相

撲へ使節は空とるそ皆徒に引返さそ中に鰐崎悪四郎猛虎は器械合せ妻雙に猛勇三十人の旁力あり之とその年来数度の軍功あり之の心術奸佞に縁連が腹心人これ亞の寇門既済越杉一岑仁田山晋五に至るまで武藝尋常なるねども縁連既に駁れるば勢に頭なる蛇のごく駭誤ぜて度を失ひその折和殿へ引外しを立退ぬかし恁做もとなれば大敵なりとも危なしとなる居べ。され矢砲まあ〜ばれば擇駁なる做せとかなる又縁連が相貌に恁々箇様々々と他に正使のるれば騎馬にて第一番にわらん和殿なの義なるに沿く駁る果しのひるば千金をもく報ひとせん殊に猛可の密談そ途中の齎し輕微なれども且亞の費用とも做しのひるとと叮嚀に機密に漏さ其を示しと遽しく懐なる紙に糊る金十両と種子嶋の小銃を出しと卒とそこれを贈りける介程に物四郎に膝を找め耳を側く所に約半晌ばまる胷豁け心勇まく満面連らふちに笑れる欽びふべうもあらばしと推鎮めたく送るく听果形を正うまく守如に對しての委しく。あん憑心の一條に異議なく美知仕る縦

○文溪堂藏

○文溪堂藏

憑れ来るぞとも。那縁連い年許ヨ索なりける親の仇〻方僅料らずも他が所在を具さ知るのを幸〻で斃る果もべた便宜を得るは武運ゐ稱こ一期の幸〻何事狹是ゐ優〻今
こそ明せ俺素生坐斃る師故下屋物四郎と告い這地ゐ僑居しを寃家と索る霊妻時の
假名寔は千葉家庶流の家臣粟飯原首胤度が送腹の三男〻父胤度が枉死の後相
模州足柄郡大阪村ゐ生れ〻べ。その村の名を家號とし大阪毛野胤智と改めもめぐい
こそ然ば禍根の内より来て俺身ゐ両個の讎敵あるぞ一人ぞる千葉家を逆臣馬加大記常
武ぞその父子夫婦従類まで。ゐる已亥の年の文明十年夏五月十五日の真夜中比某則単
身ゐ咸斃果したりけれども那縁連い這年来何首ゐ在りと知るよりも早く面貌ぞゐ認
られば心を苦め身を寞しとあるを限りと思ひ〻ゐ天運ゐ循環しを求ぎしを仇の面貌来歴
改名住所まで今詳ゐ告られい年来祈り〻神明佛陀の冥助なり〻ー欣然ゐその姉の
又姉一大奇事造化の加減行ぞ天定り〻人ゐ勝つ時到まりとこひつべ。恁まこそ

大夫の計略い見そ君の與られゐ某が行ゐ所い迎親の與るよ一金をりとも受べ死や勇士の
仇を斃ゐ及び名告被て斷戰し其首ゐ雌雄を決せぎしを矢炮をも斃る捕られ捉られ
ともる恥べ。然れが這島眼銃のるくても支い缺ねども是をも受まるぞ長者の
贈りのを空ゐ者〻血氣の男ゐ誇るとやのいまん因ることれをば留め措て敵騎馬るべ
馬を斃しを反落させて後ゐ斃るべ。有的い則縁連のをその餘を怨るーとい〻べ。開
戰の沿習ゐて己が死時宜ゐ至るべ咸斃る果もるもあるん敢這義を許りぬと詞せを
まく潛の死故を件の金を返ゐ守如連ゐ感悅して壯るかの銳志胆勇必是世殘
潛ゐ後傑るーんとい逆ぎ〻ーとるが伝ゐ石濱の粟飯原氏の子あるんとい知を密謀ゐ
その人を沿るいは鬼神不測の良縁恩臣が孤忠孝子は復讐此彼一事両用る。志願成就疑
なし。非如縁連るーぞを。竈門鰐崎越杉駿三仁田山晋五ゐ至るまで皆是阿黨の小人ぞ
國を賣り栄利を樂ぶ機萌を覩れば惜むを足らぬ。根を鋤て葉さへ枝さへ断いるを姑ら居

べし。されども深入まで。猶全勝を求んと欲せば衍あり。其七分を以て三分を送さば後悔なるべし。脱落あり。然るに今日の事を傍観人目助言は不敬の進退を堅く要るべし。今は恥じた這薄物を爭何いせんとの仮ふ顔の置て功ある後ふ必ず君夫人より重賞あらん春の日ながく長かるべし下晡ふ及まで。よく〳〵と畫たる快々宿所ふ退て翌の准備をあらんと心を屬て件の金を亦懐ふ斂しかい毛野が屋敷点頭て美諭の趣ありて縦我人駁を捕るとても人の與とは思ふいかに異日の賞禄を望まず平立あんと共伯ふ小社を出て別れぬ。守如彼此の立疲倦れ雑兵を召聚て合後ふ立て五十子を投てそのぶ毛野が去歳より僑居せる借屋とて欽還りける。且老て戸隱の小社の背に樹間より顕れ出る已前の武士何の程あらかを来て言皆寂鶴聞きて比獨領く編笠の深く思念も荒磯海の逆ふ寄る湯嶋坂飛ぶ似ふ下立て徒方も知ぬるふけり畢竟毛野が復讐の縁の光景甚麽そや其ハ次の巻の下ふ解分はを聽給かし。

里見八犬傳第八輯巻之八上套 終

水滸畧傳

曲亭主人著　柳川重信画本集六巻　来癸巳冬十二月發販

あの書ハ水滸傳る。百八人の好漢の畧傳を編述て。且出像あり。その画精妙。その文簡約ふして。聊も迂漏あらぬ。とりて。百二十回の長物語を。皆その數巻ふ縮められば。看官倦ざるのみならず。記憶の為ふ便利ふして。地理官名まで紛ふとなし。要畧めでたく。そのうへふ看て亦裨益ふることあり。水滸傳ふ始より。作者の隱微ヨリ底を金瑞李贄ら。これを悟らず。その故ふ那里の評注精細ふ似られども。作者の本意ふ違ふ。ハ罕なり。曲亭の翁ちふ。ふるよりあり。今本集ふ附録して。又略評を述んとす。一トたび是を繙くとき。彼ハ人の情由。これも亦かる故ありけり。と看官ふ。亮悟して。まもなく水滸傳の妙作なるを知るふ足れり。世ふ小説を愛る君子ハ珍重べき一奇書なり。

水滸後画傳

曲亭主人譯文　出像　柳川重信画　第一輯五巻　近刻

あの書ハ明の鴈宕山樵が。水滸後傳四十回を。國字ふ譯して。通俗して加るふ繡像を

文奚堂蔵

以ゑ。且後傳の趣向の立ざる宜らぬもあり。曾こそ筆削をて全美の一書ゐるさんとす。然れば後傳ゐ見しる。前傳殘剩の好漢三十二人あり。その公孫勝呼延灼関勝朱仝李俊李応載宗燕青孫立孫新阮小七柴進朱武黄信樊瑞樂和童威童猛宋清裴宣穆春蔣敬蕭讓金大堅安道全蔡慶杜興楊林鄒淵凌振皇甫端顧大嫂呂方郭盛の内中前傳第百二十回ゐその死とらるゝの七人あり。その呼延灼と関勝と阮小七柴進と載宗とは李応と杜興と就中載宗ゐその灵徽宗帝ゐ夢ゑ。ゑゑく御導をせしゆさゐゐ又後傳ゐ載宗ゐ皆彼作者の誤ゑられし錯誤ゐ作更て前傳ゐ死しるものを又後傳ゐ出せとるく更ゐ亦批語をのせしく彼拙劣を補きん譯しざるけゝせゐある所の通俗本と同じからねば唐山能繁疎ゑ姫御達ゐも筋よくゐるて公ゐその文鄙俚ゐくゐ伏稟ゐ賜顧の君子先ゐの書名を認て開板の日を俟ゐかし。

印行書肆

江戸　丁子屋平兵衛
大坂　河内屋長兵衛
大坂　河内屋茂兵衛

南總里見八犬傳第八輯巻之八下套

東都　曲亭主人編次

第九十回

司馬濱ゐ船虫淫を嚮く　閻羅殿ゐ牛鬼賊を辟く

話表賊婦船虫ハ去歳の夏越後ゐて犬川荘介義任ゐ酒顛二们が撃ゑ折獨媼内を伴ふく遠く武藏へ逃ゑ来ゐ豊嶋郡司馬濱ゐ程近き谷山の頭ゐ人の白屋を購求めく才ょ勝を容ゑて躯く媼内と夫婦ゐ為て生活もゑ虚々と半年許ゐ為ける程ゐ不義の貯禄ゑくゐ竭くせん術もなく苦ゐ況隨ょ夫婦竊ゐ商量しく又大悪ゑと計較け。是ゐ七船虫ハ十字街妓ょ打扮て夜毎ょ濱邊ゐ立ゐの客を招ぐ売與のゑゐゑゑその懐ゐ東西ゐゑ媾合の折脣をまぐく舌を咂斷く殺ゑく戸厳を海ゐ棄ゐ媼内ハ妓有ゐ為て初ゐその邊ょ在り。倘ゐ及ばざるのわれば

力を勢ひ拉ぎく走るとあり。かゞ恁てゐる人の知ざりけり。以あるゝ這四下い塩竈のゝ
わゝく家もあるゝ。做もとゝもぞ久しかゝざる。這同悪の虎夫狼妻ゞ天羅の中ゐ入ぐら
罪も数ひるゝ。波ゐ漕ゆく延蛋の船ゐ。で今宵も這里ゐ張る網の獲もがゐと夕
間臆。脚高蟢子の蘆垣ゐ夜風を防ぐ浦寒ゝ塩木竊ゝく焼明も火光と花の
夕化粧曇らぬ月の假眉もあり。甲夜闇の黒木綿。三十振袖四十嶋田五十の銭もゞ取
らで立ゝく見居ゝく見ゝ見ゝ見ゝ

過りを折、網引釣漁る浦人們ハ輪回応報の理りを叮寧に説諭して、をさく冥福を
薦めあひ、浦人们月毎に銭を集め年を歴て、竟に二座の佛堂を濱邊に建立ス
こゝに地蔵と閻魔ハ一佛二體慈愛菩薩殺異なれども、俱に能化の教主なり。世に罪障
ヨワかるものハ死して墮獄の苦しみあり。閻魔の廳に呵責を受て、永劫浮む瀬なしと。又
舊悪あるものも、先非を怕れ懺悔して心を慈善に轉せば、一旦地獄に墮るとかも地蔵
廿廿に救まして、竟に天堂の快樂あり。些小なりとも悪事をもか小悪も稍蘊まゞ大悪と
なりて、免る路なし。些小なりとも善事をか怠りそ小善も累積まゞ大善となりて果報
あり。然ば地獄も天堂も閻魔も地蔵もあのもの皆その心の致す所なりとを他に求ずして、
こゝその心に求まゞ佛とも成り、餓鬼とも成る。人世に釣漁を做すものも、宮戸河なる濱成弟兄
近くハ淀に弥陀二郎あり。あゝ佛意に悟ふるのハ日毎に江河に網を卸して、救生の罪消滅せ
ん足に暇なるものも口に佛名を唱易かり。這義を忘れざる輿に乗て那上人の説教をもて建

佛堂なれば、誰か疎鹵にせん。然ども船虫と媼内のみ一毫も忘憚らず地方も
わるんと両佛堂の間に立在て客を引く。邪淫に汚穢なるこゝ人を害して財を奪ふ
罪悪越に極まり。其も戰世の癖まゞ法度邊鄙に屆ずとても神を怒り佛も憂ふ
悪鼓那身に及ぶ。天道も亦賞罰に私なりとかまくのみ。閒話休題。折しも彼此の壯
佼の廿日正月なれば、こゝ漁戸農家ハ坊賈に使る。年期未満の小廝も遊ぶを
旨とする日なれ。然ども調戯を嫖蕩子の那十字街衢を挑んとて、来て狎て木兎囮の
木兎に引るゝ物狂ゝ前顧後を事ふ鎗頭尖く突く入る客出る客
連放蒐る鐵炮の左右に飛ぶ天外に登稠て復の夜を果敢き契る草の床草の
枕に草莚片布く袖に移香ハ牛の糞をと人ハ心ゝて憎ゝ鼓ハ麝香の臍
桓錢を二百卻舍く別をゝ這全盛も甲夜過て人迹稀なり。比連立来ねも近
村の者長農圃保甲齡ハ四十といそ傳ひ篭張燈を引提て、ゝ近ゝを

船虫やよと喚びかく。喃々刀祢達ようせよ寄せよと招けども此方阿容も立寄らず是ゲ
那評判高き妖婦と共侶ふ張燈抗く船虫の眞容半面はらくと観るとこ約莫
半晌許感ふ勝ざる面色しく錫右衛門主妙ぶもの乃者世間の評判を耳ふ聆けども
又ふ初く往還の人ふ情慾を商ふ十字街妓ふ現罕ぶ花の顔月の眉可惜縹
致をのちぶ。怠非類ある世渡りふ什生ある人の果やんとへば領く錫右衛門ふかり
ぶ。嗟乎七帳八翁の宜ふ倣く浮世の果ふ小町ゆく大雨の涸ふ金魚ゆ塵塚ゆも
生ある美人草ふ絶ふわ。近屬或の噂ふ浪速津の片頭ふ夜々ある十字街妓の
中ふ一個の美婦人ふ。何処ふ来るやらん火計のものまふ知らねども苛栗の中ふ真
玉ぞとく。嫖客達聚ひ来ふその美人をのく挑ふ約十夜許ふ竟ふも来ず
ぶ。ゆるぞ迹ふ遺せ歌ふ物の端ふ寫着ふ知るも知らぬも立寄ふ。わ
世ふ露のうたかたの草のむしろふ濡ふ夜ぶ。とありけふ人皆笑ふ憐ふく。

甚麽ある人の身をあるふ。怠形ふ呼行をあけんとく惜かるゆえとく。語継ぎ
伝ふ。話柄ふ倣せふ。遊莫世ふ怠る奇談ふ好事家流の作設ふく人を哄も
多ふ。寓言ふんとゆふ。方僅這妖婦ふ知りね那浪速津ある美婦人の二十四
孔ふ一孔を換く情慾を賣りある。這倚ふ。
ぶ。廉けり。とふを船虫推禁ゆく。やよ喃刀祢達空口利く。鄽前をふ塞げ。
延虫戸ふ塩焼く辛き世ふ方金の東西ふ時價を外く。短籍銭ゆふ入ふ。怠
客ふ馮ふ。然もうちふ方のふ。いでふ風味を知るよりわん徒空賞ふ寝ぞ
安きものぞとふ。迭代ふ誘ふ尚用口ぐ伝ふ。とふ。軈く帳八の袖を抓ぶ引寄
ぶ。俱ふ駁く錫右衛門。網笹竜ふ係りく友鳥を資けく雲時打擇ある。鏡ぶく
両声ふ身を脱ふんと前へ引く。鍛頭巾ふ片髻ふ。袖を挑ふ。郤舎ふ張燈輝
滅て。點ぶく還る素見客卒罷ぶ。子泣くらんその子の母ふ俟らんぞ急ぎ先ふ

文溪堂藏

立つ地蔵の王が錫杖右衽門間魔の笏と帳八も墮ぬ地獄が怖氣づく煩悩醒て善
提心南無阿弥陀佛と念ず。御堂遥か拜して真如の月八ぐ出ぬ甲夜間ぐら来
熟る。路を索やくいそぐ。船虫本意ぐ要時其方を目送りく。憶測の歩き
翁们ぐ年も羞ぢ空口嗜さ。問い覿面灯を喪ひく。間路を辿る鈍まり。是
かく来ぬるが。実が成る客。且焼着く俟んぜと。獨言つ彼此と塩木拾ひく。燃残る火を吹
起も浦風の寒さを凌ぐ程。もれ野寺の鐘の音響く。夜八ぞ二更ぐ過ぎ。登時
船虫が。今宵も既に深初るが阿定り。銭の合て掙ぎ栄ぐ薄情さよ然かもて
野良夫が今おぐ何首がるぐ夜を目とまる世渡りを知りて這里八皆善ぬ外が増花
ありてある欲然ぐ路が障りいぞまく。留やるて欲心と辛。俟不樂やとこいぐ
苦ぢ胸が焦ぐや塩木の薄煙立狭とんぢ滅くやく。空吹く風が雲霽く。二十日の月八
出ぬり浩処が高暖の。その夫が一個の旅客宿枝後ぞいそぐ人。肩が二箇の

行裏を前と後へ。ぐら担く。走り過んとせ。程よ船虫ぞ立迎へく。やが嘯要時寄りぐ
ねと。嗅ぐ裏包を披留ぐ。旅客駭ぐ。何めぞ夜ぐ人の濱邊が
憚りも。殊が女子の單身が。旅客を目ぐ留る。宿引ぐ。然八わ。ぐ。を船虫
うち笑ひく。疎図ぐ。宜ぐ。恥く。伝ぐ。奴家ぐ良人八武家の退糧人。這近
御ぐ僑居く。晩が立る朝夕の烟も細る身の病着が臥と一稔あまりが。竟ぐ世を去り
伝り。迹が殘る老る姑三稔以来聾疾や目も亦ぐ。薬の價が術を。
親が隠て宵々毎が這塩濱が。出く。情慾を賣る親の奥憐愍や嘯吉説くを
うち聴く旅客八限ぐ。月光ぐ。宜が趣ある色さ香さ憎ぐ。お々未曽有の
夜の花然も些小の價や。身を儘せんと。ぐと。音乾ぐ。空の山が入ぐ。空が還る似
ぐと。尋思を。ぐ。莞介と笑く。原来稀ぐる孝行實義剛才その情由を。ぐ。買て
いぐ。情も慈悲も。知ぬ夷狄とぐ。ぐ。假寝の臥簟八何処やと問八ば船虫ぐ。

恥ぢ盗賊の蔭に延を布寐のまに枕這方へ来まとまを含まく物の蔭へぞ伴ひける。且く旅客の慌る声多く立く。這衒妻奴が大胆者。俺の舌を噛退るぞ盗賊めぞわるんぞうん月舌尖を傷られまく血さへ流まく疼痛に堪ぬ近曾這濱に出る賤妓よさる所行を者く客を害まるものありとも覚えず窃に虚実を試さんとおもふ。よりて今宵俺旅客に打扮く引まく倶に臥まえ世の風聞に果て錯ぬ絶に結ぶ枕の價廉かる娼妓に似けぞ。音待態の大きなるぞ舌を吸せの吸よまく噬殺さんとせ一て知りぬ世に多くぬ賊婦へ俺は是五十子の放免善悪平まると知らぬ敵みぞ。覚期をせよ五十子殿へ扇谷定正に牽ひて行まく。許ヨの賞銭を賜らん動揚る腕を造せ。と罵りの推伏せく。隠持る捕索を繰出て既よや細んとまくけるを船虫怯む声多絞りく呼ひけるに人の疑ひ漫るの者なる奴家いでまる悪夏を醸まるものく伯らや。家も住境に入りしより。人の舌の糸断歯に障さりけんを怪我と宵毎に奴家が

全盛を土岐に娼まく。濡衣を被せられぬ悔て後悔ぬ。ぞとの瞬め又復て。携るを突退撞潜る女人の稀なる巻の持き播一播く逃走るを善悪平の為に脱さんとまく。暮地に趨の程に後に響く鐵炮の音と共に伯に憐むべ善悪平の背を駒に撃獻さまく。苦と一声叫びもわぞ身を轉く仆まるの呼ひけるの呼れば船虫の殊さるに胆を潰の及ぶて。忙然と立在まる程に種子嶋の小鳥銃を引提くあの這里へ来るのあり。是則別人なるぞ又那悪僕温内に最大なる駑駘牛を逐の既に近つと船虫の月光に人ムぞと認め一不勝の歓び再生る心地して。立戻りの迎へく好折に温内主危きの故に伯の故の箇様々と那善悪平が辨の趣一五一十を数知て。他に五十子に放免の善悪平とのめぞとよ這方の機密を鶯着く旅客に做て来に知けを然るのとの知るもく愁に多を知く。鈍や本直に多を結果にを没怪の幸ひ後産悩に似れども平の這里に立かり。

おんなは又何等の故ぞ甲夜ゝ這頭へ寄も来ず世渡煙を外ゝ。俺身空骨折
ある心長閑さ薄情さよと咄語かまり窘るを。媼内听ゝ微笑ゝ叱りゝ今宵俺ぶ
遅く来ぬるも亦所以あり。這月の好鳥も俺ゝ才る五百六百の仂錢のを挿ゝ酒も
肴の隨ゝ喫るをいで野鶏でも獲ん捉く。酒菜ゝ世ゝ尋思ゝ。けゝ年ゝ這
鐵炮を引提く廣緒を永猟ゝ。かも折ゝ多くゝ獲ゝ空日消ゝ腹立ゝ。
文さゝ酒肆ゝ立寄りて腰ゝ着る錢を限りゝ飲も啖ひもせゝ程ゝ夜ゝ初更ゝ
ゝ。低く酒肆を立出く冠の松の頭ゝ来ゝ路の傍ゝ。農夫の家ゝ立ゝ男女
迭ゝ罵る声ゝ高く。ゝ心ゝ立寄く背門のゝ窺ゝ夫婦閑話の
最中ゝ打ゝ打ゝ。泣ゝ叫びく四鄰を動も闔宅の打擇其頭の爺々奴々聚ひ来て。
打を拄ゝ和解ども妻も夫も醉ゝ。林ゝ敵るゝ云云と罵り狂
る。無ひ果ゝ。介程ゝ俺ゝ。今這課劇の折ゝ紛ゝ何ゝ

せぬけの不猟を補ひがゝ。好東西も欲得と看過ゝ。背門の内ゝ牛棚ゝ這赤牛
一頭ゝ。全身肥脂澤く。遲ゝ。大牛ゝ問ゝ。逸物潜
と牛出く賣轉ゝ圓金十枚ゝ得易ゝ。然て。這牛を編く背門ゝ出て
ゝを一家児ゝ奴ゝ罵る声ゝ。響ゝ。皆執逆上せ。折ゝ。
後々までも知ぬゝ甲夜ゝ。路程ゝ慌ゝ。這里ゝ
来ゝ。折ゝ中の月の影を便ゝ。遥ゝ。難情由を知らぬ人ゝ。趕
逼ゝ事急ゝ原來ゝ術を行損く。低ゝ難義ゝ及ぶゝ。猜く此一も
猶豫せぬ牛の追隊の用心ゝ火索を附ゝ鐵炮く。寛錯ゝ。留ゝ。這
火砲ゝ去歳の夏ゝ北越ゝ在り。折ゝ夜。
遮與せ。久く藏措ゝ。今宵ゝ。佶と役ゝ立ゝ又那善悪平ゝ奴ゝ五十子
頭の放免ゝ素ゝ好人ゝ。敷ゝ。殺ゝ。戸殿を躲ゝ後安ゝ似ゝ

他のこゝを這方の機密を躾着る人あらのやせん然ば翌より生活を更て這里へ出ぬもう。そゝ左ずまし右もあまし。俺八通宵這牛を遠く千住へ牽ひて売く。售く翌快々より走べし。其も那戸殿を海ゐ流し七後ゐそゝ〻ども倘牛王ぶ趕蒐来ば亦復縛の難義ゐ及ん要時ありともの牛を推隠もそよう。ゆまし四下ゐあろを屬むと。詞ぜうく其ゝき示まを。船虫听く笑げゐ寔ゐあまゐ好牛へ什麼何処へ隠まべゑと。向ゝ俱ゐ彼此と省り顧る磯邊ゐ塩焼の高屋あり。夜ハ鎖し七戌る人あり。是究竟。塩内ぶ立ちて鎖を操開けば。船虫もゆ俺ゐ牛と高屋ゐ牽入まけり。浩処ゐ六尺棒を引提て這方へ来る者あり。塩内遥ゐ見ゐ〻。他ゐ必牛の主ぶ趕蒐来ゐるゐわんぞん。俺ハ權且躾ひて遣過しく那戸殿を流さんゐ。其ハ其頭ゐ〻るとも。氣色ゐ悟らまゐ。ゆゑ〻ゐ〻ゐ〻ゐ〻園覺堂の背へ〻く躾を。程もわゐぞ一個の農戸年歳ハ四十許ゐ〻べ。面の色ハ赤黒く。熟せる棗を重ね〻如く。身材ハ最高く。港ゐ建る檣ゐ似ず。昔當麻の強力士蹶速ともいひつべ。面魂の逞けゐるゐ恐りゐ堪ぶ。眼光いと凄く。右を省り左を顧り来ゐ船虫ゐ声を破けく。喃支向ん濱立人和女郎ハ世上の噂ゐ〻〻千字街鼓ゐそあり。ゆゑ〻ゐ方偽赤牛を逐走しく。這里を過りしめあべ。何地へ〻ぞ認ぶゑと。向へ船虫頭を掉く否然る人ハ見ぶ紀去向の路の違ひ。ゆん快々外を赤ひ〻へいとも去ぶ。持ゐる棒を杖ゐ衝き立沈吟しゆゑ〻ゐ〻ゐ〻ゐ〻冠松の頭ゐ。曹長戸鬼四郎とゐ〻ゐ〻俺ぶ面のいと赤けまば村人ぶ渾名を搭く。赤鬼四郎と喚做しく。家ゐ年来養狎しゐる。駄犢牛一頭あり。地方ゐ稀ゐる逸物ゐまば村人ぶ赤件の牛ゐ。俺名を搭く。赤鬼四郎。喚做しても久しゐ〻然ば地方で人鬼とゐ〻ゐ。則俺事ゐく又牛鬼とゐ〻ゐ。俺牛と知らぬのゆ。恁る名物ゐまその。耕転のうへいぶさえ車を掛くも荷を駝しても尋常ゐる牛二三頭の挽ぎゐ

倍く俺與まることを大々ことごとく憑りの限りもあるぞけ。二十日正月わく。人も俺も共に皆遊ぶを旨とあるより。牛ゆも骨を休しと咱们夫婦八日の暮るまぐ。酒うち喫る樂盡く。不圖せ一口説のりをより。毆ぶ罵る迭の醉狂ぞ四鄰を驚ましる。綽の紛をふ盗児が背門より牛を牽出けん。綽鎮りて俺牛鬼のわぞ一を稍知りてさて一を趕蒐まるを。勿論這里まぐ路もぐ人々ふ問試ふ。ふ甲夜間ぐ一北ろる炬も點ぐ牛を牽く。一個の男の慌しげふ司馬濱へ久ぐ知ぞ。きとふのヨかけるふ甲夜ろ這里ふる和女郎の乃ぞといふ胡論と。語るを船虫冷笑ひ。そ宜ることぐ。猫狸鼠でぐ目ふ掛ざるもあるぐ最大きる牛の。牽まく這頭へ来さんふ。詐ふ目外結るぞ。司馬ういぐ廣かるふ。這里あを濱でたぐんや上中下と幾町ふ長き浦曲を彼此とよも渉猟らでぐ多の牛の必這里へ来るとふ。夢でもんさるぐ。奴家ハ牛の張番人ふ央ぐるぞ。鉈まーさ

よと口ふく。窘らぐ鬼四郎ハ頭も立まぐ。舌ぐ鳴らして。恁いるぐ術もぐ。又外を渉猟ぐ。益ぐ知ぞと咲きく。帰去んぞ程ふ那牛鬼ぐ這年来听も熟ぐる主人の声を知りけん。梟屋の内ぐ。忽地高く吽と鳴く。声ふ驚く鬼四郎。其力を伝と見かぐ。俱ふ驚く船虫ハ折ふかと。乳を閉く。裏く胸を鎮めるも。ぐ鎮らぬ牛鬼ハ両三度鳴く声の疑ぐもあ。ぐ。欲び勇む鬼四郎。他ぐ正く俺牛ぐ那首ふ隠ぐ措きぐ。悍々ぐも欺きる。這術妻奴も耦賊ぐ。先牛鬼を。ぐ。虚實を糾さん覚期をせよと。敦圉猛く。梟屋の戸口へ寄るを船虫推禁く。漫ぐ。他ハ這頭の浦人ぐ塩木ぐ駝ぐ牛ぐ。ぐ。夜ハ那蒐屋ふ繋ぎくわ。司馬ぐ牛のヨかるふ。ぐ多の牛のく鳴くのぐ。いなもめぐ鬼四郎ハ怒る声をふり立く。這賊婦奴ぐ大胆ぐ。這期ふ及びてぐハ云云と偽るとも詐ふ听ん妨げもぐ。と暴ぐふ携るを振断突倒く。再找む梟屋の板戸を推

開ムとせ程ホ後ホ响く鐵炮ホ。撃まさく仰反る鬼四郎血烟立てぞ死でける。既ホ
赤く媼内ハ閻魔堂の頭ろ。綟の破まを見知りて脱まかーとぞ〻又鬼四郎を
撃仆ろる。鐵炮引提さ出ぞ来。稍身を起せ〜船虫ぶ腐の沙をうち拂ひて。
却も今宵ハ折の刃さよ。ん身ハ那放免ホ謀らまさるを悟らぜ〜く。行損ふく趕稠
ら〜。咱們へのせ〜赤牛の鳴さる故ホ綟發覚まさとり復さるべ勢ひろ〜ホ這
鐵炮の微りせぶ何をのく二度の禍を徒立地ホ襲んや。今宵の挿ぶハ是ホぞ〻ん。
両個の戸厳を海へ流し牛を千住へ牽ものろん身ハ宿所へ還りねかーといふ船虫
領きく。那畜生ぶ鳴ぜもわ〜ぶ甘く哄〜くいきんと〜ぶ〜のを声立く已ぶ所在を知
せ故ホ鬼四とぞ〻ハ撃まさろ。鳴ぜ雉子も撃まさせで。求獵ろおぞ〻春の野も。
此の濱邊も妻恋ホ浮まく係る好鳥の今もわ〜ん狡料りかとろ。ぞ夜深でハ
みのものを先の戸厳を棄ものと迷ホ潛きを相譚の折ろ。遥ホ見ある小張燈高暖の

かとろ来く浦邊を這方へ来るのあり。昏のごく明かりける月を便りホ見ハよる見る腰ホ
両刀を佩ふ。ぶ旅の武士ホわ〜んぞ〜ん頭巾目皆ホ細小ろ行裏を駝搭ろ登時船
虫ハ遽く媼内ぶ袂を引く。見他ハ好鳥ぞ〜ん狡快立迎へく素引く見ん戸厳を
隱ーのぞ〜とのホ媼内おろる。四下ホありける破古を見ぞ〜ん鬼四郎と善悪平の
亡厳ホ二三枚ろ被く。又鐵炮を引提ん。その刃ハ再閻魔堂の檐下ホ退き伏躲
まく。綟の容を覗ひける。介程ホ件の武士ハ連のかいそぶ夜の濱邊ホ立ハ人あるを知
ろもく走り過ん程ホ船虫ぞ立迎へく。やよ喃要時寄せ〜とのひつ袖を援
留まハ武士ハ驚きぞ見かとて怪しや你ハ甚麼ものぞと問ハ船虫ろ微笑く恥
ぞろ親の與ホ情を商ホ娼妓ホ仕ぶ。とろ〜ぞ戸耳ホ覚やありけん武士ハ引提ー小張燈を
推抗ん估と看く。ちのホ汝ハ船虫狡小文吾ぞを知ぞ。と名告も果ぞ左まをして
搔合る頭巾ホ堂々ろ相貌威風今さろホ紛ぶ〜もわ〜ぞまハ船虫ハ吐嗟とぞろ。

駭怕まどゝ逃仆せゝを小文吾透さず張燈を掻遣捨つゝ猿臂を伸ゝく項上抓み引寄せゝく小脇ゆ締ゝく動せず怒ゆ堪ずゆ声高ゆふ船虫汝ハ越路ゆて俺を刺んと表ゝりゝゆそのゆ竟ゆ成らず七庚申堂ゆ囚まゝを更ゆ大川荘介を欺きゝ資を汚て宿所ゆ送らまゝ還りゝるその夜艾酒顛二們ゆ荘介ゆ撃まゝ折汝ハ毒ゆ知りて媼内と狹ゆふ支黨と倶ゆ逃亡さうけるよりも生拘の小嘍囉溷六穴八ゆ招道ゆゝその明旦知るといへども往方分明ゆらずまゝ送憾くゆゆふ這里で遭ひゝ天の冥罰掙扎ゆも今番ハ脱さず觀念せよと罵譴ゝ大刀の緒をゝ解出ゝつ両手を背へ操枉げゝゝ細んとせゝ程ゆ圃魔堂の檐下ゆ躱まゝ。媼内ハ這為体ゆゝ駭げども些も驚ず件の武士ゆ名告ゆふゝ小文吾ゆを夕知りて狙撃ゝ潛歩ゝつゝ下壇ゆ登り兄ゝ持ゝる鐵炮今ゆ直しゝゆゝゝ今両鐵丸程そゝゝと緊ゝゝける恁る折ゝゝ堂内ゆ閉籠りゝる一個の武士あり。朱鞘の両刀苛めゝ目官ゆ戴ゝ編笠をも脱ず前より窺ゝけん今媼内ゆ鐵炮の火蓋を反んとせゝ処を裏面より簡子戸蹴開ゝく頭を出ゝく媼内を掻抓み仰反ゝく鐵炮奪ゝく投棄まゝ駭叫ぶ媼内ハ就鶯ゆ捉らまゝ猿より脆く。掙扎ゝを宙ゆ吊揚ゝく磔ゆ弄ゝく投ゝけまゝ十間ゆまり前面ゆる地藏堂まゝ投着らまゝく。下壇ゆ控と倒まゝゝる郷音さゆ外を簡子戸の内ゆも亦是一個の武士あり。本尊の御前ゆ立ゝける。形貌自然と顕まゝく。此彼倶ゆ一對ゆる笠深くせゝ微行の打扮起仆まゝる媼内ゆ走り出りつ蹴返ゝく背を踏ゝく動せず嘆くを呵々とうち笑ひゝく絶ゝく久々悪僕媼内俺ハ相識ゝる大塚信乃と睛を定めゝとゝ生ゝく笠を脱捨まゝ圃魔堂ゆ一個の武士も編笠の紐解捨ゝく徐ゆ下壇を降りて来つゝ小文吾ゆうち對ひゝく危かりける犬田生俺ゆ黄昏時より這堂内ゆ在りけるぞゆと敎るゆ亦是別人ゆゝゝ犬山道節忠與ゆ登時犬田小文吾ゆまゝ魚を細めて左右を見かゝる不勝の秋ひゆゝゝ莞爾とうち笑ゝゝ兎折ゝるゆ大山主犬塚主も何等ゆ故ゆ通夜籠りゝゝまゝゝゝと猝問ゆ間ゆ信乃も亦准備の索りて

○牧溪堂藏

媼内を走り蓐々と細めて地上に礫と蹴落し。その身も其首も下立く小文吾に對面を浩
處に莊介現八大角の三犬士。小文吾が歩のあやぶむも遅き後れく稍這処来れば
小文吾。やゝと喚聚合く却飛虫媼内を生拘りる縛の顛末并に信乃と道節の資助を汐
るゝ物語。箇様々々と説示せば莊介現八大角は听ら齊一駭嘆て信乃道節に對面し
俱に歓ひを演て又の曰く某们は大田と俱に箇様々々の吉凶より大法師の迹を慕く。指
月院を出しゝ殊さらに路次をいそぐ。昨夜も八王寺に宿を投め今朝も未明に立出て石原
驛まで来る折。後に人の相譚の声して四合の笠を蓋て。矢口より高畷を投く司馬
濱に赴く宜かんとひけを俺们四名皆うちなく。俱に後方を分てに迹より来る人は
分て若是神の示さるあの十字占る狡とぞ。路の遠きを厭ふて急く矢口まで来て日は
暮ぬ。非如夜半に及ぶも穂北に到んと剛才這浦まで来る程に大田は素より速
行く。連に先を走りかひに然を累て這賊婦を生拘りるのみ料も両賢兄の。

資助によりて媼内の銃向を脱れ。石原驛に出る。前兆虚かるとのみ。寔に愛
さんぬと。俱に祝て已ぬ。小文吾然とうち合笠天く。俺们が這濱邊に来るは右に
如し。犬塚犬山賢兄達の這里に在りといふを聞て。
暇なり。何等の故にか。と問ふ道節声を低めその疑ひを該て某は大塚と俱に約
束あるにより這里に人を候て久。ひそかと秘密のあるを見て後に報まるもそれ
忽諸に来るは這個牝牡の二賊。這奴们が人を殺せば大塚も嘱親けんその崖妻を諸君
子に敷知りぬと。信乃は領きて大田大川大飼大村四位の弟兄听に各々は這賊婦に
敷きてのわやくを然ばその毒悪の趣を詳に知ざる所なり。船虫去歳の夏その
良人酒顛二们が犬川生に撃と折支黨の兄賊媼内と共倡に越後の隱宅逃亡る。
その縛の趣は曩に大飼犬村生に大法師まで。とそいぬ兄の消息を某们は聞て知る。
偖而船虫媼内は遠く這地に脱て来て夫婦に做りて西京を旨とも。その趣を箇様々々。

恁々のるあり けりと。船虫ハ十字街妓ホ客を誘ふく。殺しく金を奪ふ。今宵ハ
故免善悪平とうふのホそのる段を見顕さまて縛の難義ふ及び。折媼内を窺
う牛を牽ハかの来て鐵炮をもて善悪平を撃ふ殺しうとを詞せうく説示ハ又媼内を
指ふて。這強盗麻生ふ冠松の頭ホ鬼四郎と農戸の駻牛を窺略ふく牽ゆく
這果ホ来ハ折那鬼四郎ふ趕蒐来ゆ。船虫ふ欺きていをえを程ホ高屋の内ホ隠
う牛ふ。その王の声をも知りけ忽地ホ鳴ハ。その縛も亦發覚ふ。復さんとをうしを
媼内ハ這閻魔堂ホ頭ホ躲ふ又鐵炮ホ鬼四郎を撃ふ仆しう。某ハ堂内ホてその
為体を窺窺ふ怒ふ堪ず走り出く摘捕んとゆ。折犬田生ハ来ぬホうふ及
ぶと。叛ふ小文吾歯を切りて這船虫ハ三ふびまを強盗の妻ホ做りて悪を資けしふるも
某を害せんとあるも。一度ふ及びう類稀ふ賊婦ホてと敦圉猛く罵ふ現ハも亦拳を捺
ふて這奴ハ三ふび盗賊の妻ホ為りてるを。赤岩ホて妖怪の後妻ホ為りて大村生夫婦を冤げ

刺。逼ハて貞女を害しうとハ。ふび壮人も眼を睜りて去年ハ咱ハを欺ふく。庚申堂より隠
宅へ送らしうける叛ひホ。酒顔二ホ餘ハ小賊ふく。劒ホ表れる。這奴ハ表逃亡をもる
本意ふ。ふ天罰時節到来て。搦獲ふ上ハ愉快ふ。宜ホ珍重ふと。齊一
勇むを中ホ大角ハ。ふ。獨嘆息ふうける。氣色ホ猜ふ船虫ホ大角ホ對
ひふく大村王ハの年来奴家ふ為ふ罪過の後悔及びけれども母と子と唱へる。
好を忘れ。ふ命乞ふく多ふ。ふ大角ハ眼を瞪ふ。一声怒り立て。噴毒
婦奴ふ何をホ。俺舊里ホ在り。時親の仇ふ妖怪ホ魅ふ。ふ汝ハ
ふ。ホ妖怪竟ホ露ふく。親の怨を復ふ。折。汝も許ふ。ホ。その比ハ縁連を
犬阪生の仇ハ知ふ。又汝ふ阿佐谷ホて犬田生を害せん。謀ふ。ホ知ふ。ふ那縁連ホ
請ホ儘ふ。ホ。ふ。ふ。ふ

毒悪類まかねど怕るおりの所以ゐ不憐むとも猜せ欲無慙の癖者ぞけり。と責
るに信乃は推禁めく這期に及びく。議論は要ゐ。媼内は四人の原ゐて主の茨雪奏四郎ゐ
疲を負へ盤纏を奪ふく逃亡う舊悪あり。低主ぞその罪舩虫と勝安の兇ゐめく推並
ぐく八創ゐ斬切まく悪を懲さん今さら猶豫もるのろといぶ道節領ゐくそ勿論のこぶ。
畜生めぐも劣りく。這奴们を主君のゐゐ棋て可惜ゐ刃を汚ぶ牛刀をもて鶏を割く如く
ゐゐん牛といぶ媼内ぐ竊ゐ牛は那首ゐわり。他ぐ與ゐも這奴们は亦是主の仇ゐぐ牛ゐ突
きくゐの隨ゐ苦めて誅戮せん箇様々々ゐ考へ。諭せぶ小文吾現八荘介ゐるべと応
ゐ刀ゐ附ゐ小刀をもて舩虫と媼内ぐ衣の背條を破ぶ信乃も亦ゐ倣ぶく小文吾と
共倡ゐ黒手の筆もて這賊夫婦の背へ罪の箇條を写く約束ゐ寫着く閻魔堂の
檐前ゐ二株の杉へ推並ぶ旋毛纏ゐ巻りけ。登時道節は大角を誘引く梟屋ゐ隱し
置ぶる牛を這方へ牽よせけり。介程ゐ舩虫ゐ丸まりて死罪過をゐぐ小文吾大角们。

怨まで置ぶ狂ゐ人ども。既ゐ死刑ゐ莅まりぬゐ。媼内を見ぶ。又媼内は
道節ゐ太く拔ぶ時。胸を撲せ骨を折ぶく声立ぶ一言半句もゐ能ぬ面色あぶゐ
ゐて才ゐ息を吻ぶく。道節こを見て左見右見て五大の弟兄ゐ。這舩虫媼内は尋常の
罪人ゐ。その悪古今ゐ稀ゐ。身は生ゐく地獄ゐ墮ぶ今這閻王殿前ゐ牛の角ゐ
辟ぶる前面ゐ地藏ゐ。ものゐ救ゐよ。大辟の讞断低ぶ。信乃は牛の
身邊ゐ找ぶ寄ぶ。衢ぶ這牛の主と伝ぶ。鬼四郎ぐ云云と。誘ぶ初く
知ゐ。おゐ逸物ゐ。村人们ぐ主の名を搭ぶ。牛頭馬頭冥府の獄卒ゐ擬ぶ。自然の妙契畜生ゐ。
仇ゐ。賊夫賊婦を辟ぶ。牛の後ゐ立ぶ。叱ぶ。諭ぶ小文吾現八。牛の尻を磔ぶ。媼内と舩虫を伝ぶ。程もゐ那
這ゐ長尖ぶる角をもて腋下ゐ肩尖ぶ。怒牛の勢ひ地獄の呵責を目前ゐ

受く苦む船虫媼丹眼血走る顔の色赤くなりて又暮くなりて。順ふ波うつ大叫喚串をもて
數番ふてやう息絶ゆ有繋の勇む六大士も這光景に粛然と呑む目を合へけり。

第九十一回

鈴森ふ毛野縁連を撃つ
谷山ふ道節定正を射る

登時小文吾八信乃道節ふ向ひて某小千谷ふ旅宿をする去歳の四月ふ二十村なる
闘牛の折。異牛わり。その夜小角力磯九郎八船虫酒顛二ふ殺されふ今宵八亦這赤牛が
船虫媼内を劈き主の怨を復せしを那磯九郎の與ふも恥を雪るのふ似て天網疎ふして漏
さぬ悪報かくをあるべけ。八八道節駅頭ふ其頭の餘談もまかんを密要多密談わり
約束をる快船の今ふ来ふ比ふ八牛を樹下ふ繋留めて一圓這里を退くべ。答る詞も
訖ふ折ふ波濤を推断る快船一艘這塩濱ふ漕着て暗號の哨子を吹鳴せば道節信
乃ふ走ふ水際ふ赴く程ふ舳前ふ拔む壯佼わり是則剛人ふ也落鮎餘之七

有種を道節信乃ふ対ひて鄭重ふ示さるを如く某穂北ふ走かの孫一味の衆人ふ
よりを告相促ふ速ふ准備を整八這義を知まるを某八快船ふ乗走て
目今着到致ふ又衆人八五六艘の大平駝ふ熟乗て推續ふて来ふ該ふ道節教ひて
その速多隊配を某八大塚と倶ふ黄昏より這里ふ専来船を俟程ふ料ふも小文吾
荘介現八大角の四大士が甲斐の石禾より来ふ遣ふ有恁ふ久ふ便よ。那人々ふ對面
去ふ八合ふ進退を議ふ八八道信乃も有種・主僕と管高師們を労ひけり介程ふ荘介
現八小文吾大角八牛を樹下ふ繋留めふ連立て来ふ八八信乃道節八這四大士ふ
有種が来ふけるよりを恁々と教知て齊一船ふ船ふ乗りふ高畷の穴漕せけり登時荘介
小文吾八現八大角と共倡ふ有種ふ初對面て、大法師の迹を慕ふ甲斐入より這里
まで来る折道節信乃の資を得く強盗船虫媼内を誅戮をる趣を箇様々々と教
知ふ八有種耳を傾けく手刎よりを寺ふ詩ける且く道節八小文吾と自餘の三大士ふ

うち對ひ声を潜めて甘木が犬塚と共に塩濱の堂内にうち籠りて在りけるそのころ、くく
ゆきまけん言脩くも初より詳に物くらん某けの料ぞも湯嶋の天神の社頭迄大阪毛野に
邂逅きつり他へ縁て使ひに似ぬ額髪を剃落し坐敷師物四郎と偽名して光黒子を
除く藥と磨き歯砂を賣るとて日々人を聚合てをり。傍に人のあるそと名告るに暇なり
赤ぶも犬阪ぶらんと猜せ〻ば人相手相を論ず破りてその才学を試しに名ふ倍々辯論
奇才某仰ぐ及ぶ所にわるむ既に七甘木を相して大望あるうを亮査せども亦奇なれども
便り乏かりけまば果敢なく其首を立別まさかるとうせく潜ぶに取て返してそが頭を茂
林の中に伏躯まさかれも穴谷子を覗ひに便宜の密議を沒うその故八筍様々々と。
百堀鄉三が愁訴の輿に越後より来て湯嶋にて毛野に掌相を問ひ〻ひより次
團太が淫婦奸夫に誣られて片貝の獄舍に繫がれとの絆の趣木天蓼丸の短刀の
鳴呼善士大八が伎倆を詳に知らまし折鱗目前の社参のそが寵愛の猴の

たのまれを毛野が食べまるせる功をもて次團太を救ん と請けに繹立地に九さまして鄉
三が鱗目豆則の使者次通に相俱に越後へかり去りの低て河鯉守如が騙に毛野の武
藝を試しに翌の朝開に縁連を繫がせと謀りの那縁連に三稔以来定正に仕へ重
用せられて今番相模の北條家へ使者として赴くるの奸險の行状まさの折具に多
えべば毛野に教び意外に安く那縁連に年来索る父の仇なりとて其の身の素生
實名まを尋如に告知せて翌を契りて遽に立別まるのまも聞見し隨に說示べ
小文吾荘介自餘の黨いまを遇見ぬ現八大角有種さに推並て毛野が孝感天助を
得て面を認られ寃家の所在を詳に知るのうまを捕る便宜に値ひけるを齊一感ず
そが中に小文吾と荘介八那次團太の横難を毛野が微妙く救ひ復沼くとく欽び
け。登時道節と共に既に諸君に知らまし如く扇谷定正に俺舊君の仇なるべ
昼裏に白井の效外に搬び果さんと欲せに還く敵に謀らまして其の繹成らぬ今に至るの

去る亥去歳の玖月より穂北が族宿考つかるて五十子の城内を覗ふ便りを越ゆ
遊び復讐の密議を犬塚落魄が仲間試みに犬塚が為の謀を否して
竊に諫らまくり然とて已べ
き欲せ〜かぐもいぶ便をゐざり〜ゆけの料も守知の密議を安つ竊ゆ羽立大阪が
復讐の緯の趣五十子の城内へ攻入て定正必ヨ勢を知て毛野を撃んとせるる
べ。その虚に乘て短兵急が那城を攻破らばゆ唯て定正の首を捕ると易かりてん。
曩が豊嶋の殘兵の落魄生が従ふ穂北の氏がり〜の無慮九十餘名あり。這精
兵二十名を分て大阪の援が做もべ。その餘が俺隊が従へ。便冥の処が伏線を一舉が
城を攻破らんと尋恩をつく穂北の宿いそぐ前路が折もて上野の原の頭れて犬塚生が有
種子。俱に来ゆが遭ひ〜緯慫々と其を生て准備の與が有種を穂北の宿所へ〜
遣し。某が犬塚と共が司馬濱が赴き。落魄生が約束をる佛堂の頭がり冬ゆる寒に

初春の浦嶽旦る黄昏が疾潮風の堪へけ難ぶ笠が脱ぎ甘木が閻魔堂が閑籠り犬
塚が地蔵堂が笠竜て躬方の船を俟つ。料も賊婦船虫悪僕媼内を誅戮て大田大川
大飼犬村四個の同盟石禾より来るが遭ひ〜錦の上が花を添る辛ひと一五一十を説
示ば齊一勇む小文吾荘介現八も大角も俱が賛嘆の声を発断ぜ。その隊配の速きを
稱へ有種を旁ひけり。當下信乃〜荘介仲の四大士がうち對ひ今犬山が〜ゆる如く某が初
より。復讐の議を諾ぜ縦犬山その舊君が忠ありとも大敵が當りて戰殁做ぜ。あ里
見殿が對まりて不義ゆ〜と〜べ〜ぞ大山が所ぜ〜緯を〜が及び〜某今〜義の與が
性命を惜ゆ只犬山が力を勇て扇谷定正を撃て大父三戍が嘉吉の怨を復ぜと
ゆ〜ゆ〜〜然ばりが那犬阪が助大刀ゆ。亂智萬夫の勇ありとも〜ぞ寃家縁連が同
行の勇士三四名伴當を選く百餘名が及ぶ〜と〜を一時の力が殺彈さん有低ば先
某が毛野を援げん五十子攻を先ぜ〜ぞ〜ば難く胸中區々ありけるが辛が〜く石禾

より四君子来會をひけば縡十二分ゐ了ゐ宴ゐ賀せべ賀せべと祝せば小文吾
合笑ひ。その義心安かべ犬阪ハ石濱ゐて讎敵馬加常武一家を慶ぶ本意ゐ。
縁連ヨリ人數多りとても數ゐ果さんと疑ひ多り。とりを壯介推禁ゐ。然ゐ犬田生那犬
阪ゐ石濱ゐ許ヨリの仇を殺彈せ一ハ一家児多り夜襲ゐ寇家の主僕醉臥すべ皆辟
易し數ゐ。一多ん又其の進退ハ那折と多べ。多ゐ縁連ハ相伴ふ男士ありて伴當も一百
餘名ゐ及ぶとハ曠野の戰ひ多ん。亂智非如縁連を數ゐ捕ると雖も全勝を得んと最難
かべ。然るを單身うち朝ハ暴虎憑河ゐ似ゐ。とても數ゐ克ハ父の仇雪ぐゐ由の多べ。
有恁ハ和殿と甘木ゐ毛野を援ゐ拒る敵を殺拂ゐ犬阪ハ必死地ゐ入ゐ。生地ゐ出るゐ
路多ん狹這義を多ゐ。と論せば小文吾有理と応ず。ゐ傷を力ゐ現ハ大角感嘆
ず。犬川生の高論ハ是兵法の貴ぶ所敵を知り己を知りて後ゐ勝負を定むべ。とゐを道
節諾ゐ。犬川犬田のゐ。ゐ犬阪の援助ゐ足ゐ。犬飼犬村西ゐ男士の那隊ゐ向ひ。

今番縁連と共倡ゐ相摸へ赴く副使ゐ。雷門鋼介既濟越杉駱三一峯鰐崎悪四郎
猛虎并ゐ大石憲上里の家臣仁田山晋五正使縁連と俱ゐ五名皆是武藝ゐ。
就中猛虎。二十人の膂力ゐ。武藝尋常多ゐ。心術奸佞。縁連が腹心と憑ゐ
る。ゐ多り。鄙ゐ河鯉權佐守如ゐ犬阪毛野ゐ説示せ一。ゐ。鵜閒七具ゐ知ゐ。有恁ハ
犬田犬川犬飼犬村の四君子ハ二十名の精兵を從へ。便冥の処ゐ伏躰ゐ。犬阪ゐ縁連ゐ
擊ゐ抵ゐ。とゐ多ゐ隊兵を魚鱗ゐ備へ。後を斷前を遮り。鰐崎雷門越杉ゐ擊
捕ゐ那縁連ハ忽地羽翼を失ゐ。首を犬阪ゐ授くべ。這義ハ什牛と長くを壯介ゐ
沈吟。七犬山生の軍略ハ宜ゐ。その圖ゐ當るとハ。とも亂智も亦覚ゐ。是蓋世の男士ゐ
ゐ親の讎敵を擊ゐ及び。許ヨリの助大刀ゐ。せ。ゐ縁連を擊
捕ると雖も遂ゐ。俺ゐを恨むべ。今ゐ。その說を定ん。犬飼犬村二男士ハ躬方の精
兵を從へ。駆ゐ勝負を覘ひ。某ハ犬田と共ゐ那副使ゐを殺崩。七毛野の進

退を為せん低ても敵ハ退を縛の難義ハ及びなその折ハを犬飼も犬村生も隊兵を
找めて戰を接けを然るとなを毛野も恨まを縛十分わく十をを危を為るべと議るを
信乃ハ感嘆して その計議ハ極めて妙を亂智ハ面識なをても犬田犬川二君子のを就中
犬田生ハ石濱より七好も深かり進退ハ左も右も犬川生と商量をを又犬山が五十子
攻ハ翌の時宜ハ憑るべけを今這里ハてを定めるかり軍議ハ是まを為べとのを道節小
文吾現ハ大角有種們まを俱ハ応を亦復餘談ハ及びけり。余程ハ道節ハ有種が
伴當二名ハ雲妻時機密を其ハ言ハ七汝達ハ五十子の城の頭ハ潛めを為く。縁連們が城
より出を見定めて低を為の処まを快走りかを為て犬川犬田ハ報知ぬ這他のの簡様を
とのハ伴當們いかろ為て船を浦曲ハ寄さつ高曝ハうら登り七五十子を投くいを為う且七
有種ハ准備の割箭をうも披く六大士ハ夜飯を羞めて盃を薦めを為を船を司馬浦へ
漕ぎを程ハ現ハと大角ハ荘介小文吾と送代ハ石禾ハ在り一程のうを信乃道節ハ報

知て指月の道場の後住の入院ハ下旬を為べとを為を某們ハその間ハ蓑生山へ赴を
為件の時日嵩潞ひオハ中一日わを後住の老僧入院を為べ、大法師ハ某們のかを
来ぬを俟ハ及ぶ且穂北まを退んを石禾を立去ぬ某們ハを知らぬを何と
を心いを為のをれハより路草も咲ハを那寺ハ立を為ハ縛低を為を為を船で石禾を
辞し去りを道德の迹を慕ひを夜を日ハ継て来るを道德ハ今も穂北の宿ハ留りて為
を狭と問を為を訝る信乃道節ハ俱ハ眉根をうも顰めて為のを為ぬと為が。昨日ざうを
けを為ぬ、大法師ハ来ぬを音耗ぬをもわを為ぬ。
道德ハ去向を急ぎを結城へ赴を為ハけを為の故の簡様々々と里見殿の奉為ハ今番結城の
古戰場ハ廬を締ひを一百日の大念佛を修行して大炊殿季基を初て七大塚三成井直
秀這他も當日陣歿の士卒の菩提を吊ふとハを為ハ信乃道節有種們
も感ぬを大さを為ぬを為を肆月の祥月忌ハ必那里ハ赴きをの法莚ハ會んとて皆憑く

ゑひけり。有徒一程ゐ有種ゞ催促ゐよりて船出をまる。躬方の雑兵九十餘名大平駝五六艘ゐ
のうち乗りて千住河より来ゐけるが道節こを労ふく引き又高瞰の浦曲ゐ赴き船を歇く。
ここ這里ゐ隊配を定ゐ船ゐ身甲腕甲臑有弓箭鎗眉尖刀をヨク執入さりければ六犬
士ハもゐく擇令り身を擬ゐ准備をゐ整ふ程ゐ夜ハ丑三ゐ至りける。登時道節ハ有
種ゐうち對ひて和殿ハ船ゐ留りて俺黨ゐ本意を遂てかの来ゐを俟ゑとゐゞ有種ゞ
ゐゞ迎の約束ゐけるゞ推辞奉るゐよりゐ某一人這船ゐ還りて
戰ひを外ゐるゐ願ゐ伴ひゐゐか。と口説を道節推禁ゐ亦要急擬勢之和殿ハ親
ゐ妻子ゐ死ゐゐ他人ゐ許ゐゞゐ那定正ハ大敵ゐ俺們勝とゐ負ゐゐ退くとゐゐ
船ゐゞゐ更ゐ難義ゐ及ぶと是ゐゞ花料ゞゐ有徒ゞ找て敵ゐ擊ゐ留りく這
船ゐ成ゐゐゐ功ゐ多ゐゞ。ゐの義をゐゞゐゞゐ。と諫ゐ兼引ざりけゞゐ有種ハ
意ゐゐの意ゐ従ひけり。亦程ゐ道節信乃莊介小文吾現八大角ハ躬方の雑兵を

従ゐく密々ゐ陸ゐ登りて高瞰ゐ茂林の中ゐ裏合宜瞰を俟程ゐ又隊配を相定ゐ心
利ゐる雑兵を亦五六名間諜とく那縁連ゐ五十子の城の動静を漸々ゐ報ゐゐ。
竊ゐ那里ハ遣けり。話分両頭是ゐ先ゐ麻生ゐ鬼四郎の鄰人們ハ鬼四郎ゐ
牛盗見を疑ゐ鬼で司馬の々ハ赴ゐゐを聞知りゐ相資ゐ棒を携ゐ蕉火を振照り塩濱
ゐ閻魔堂ゐの頭まで来ゐけるゐ堂前の杉ゐ繋ゐゐ太く突殺ゐゐる男女ゐ鬼四郎が
牛鬼ゐその樹下ゐありけゞゐく什生と駁謀ゞく食立りて熟視ゞゐ死ゐる男女の背
ゐ寫著ゐる數行の文字ゐゐよりて這男女ハ媼内船虫と喚做ゐる強盗夫婦ゐるゐもあ
年来の積悪ゐ今宵放免善悪平と鬼四郎を殺ゐるゐの吉文の趣ゐを問ゞ分明ゐりけゞ
いく驚ゐゐく奇と七先鬼四郎と善悪平の亡骸を索出ゐく見ゞ皆是鐵炮傷ゐて
各所の深痍ゐりけゞゐ又生ゞゐもゐゞゐけり。大家且く評議を凝ゐゐ牛の角の血ゐ染ゐゞ強
盗夫婦ハ這牛ゐ突殺ゐゐゐ疑ひゐ。什麼何人ゐ捕捕ゐく徒ハ計ひりけゐとゐゐ結ゐゐ

知るとう言まで却わるべかりしを近き村長ゐより上聞して地方の民と共侶ゐその詰旦五十子の城内へ許けり。表ゐゐの日城外ゐ支あるけるを沙汰ゐ及ぶ第三日ゐ至り有司詮議しく船虫と媼内ゐ首級を濱邊ゐ斬梟けり。猝遠近ゐ笑を含くて強盗夫婦を細めてその積悪を恁々と背へ寫ゐ八那御堂ゐ閻魔王の霊験ゐ感ぜ参詣翠集ゐ多ゐ余後數度の戰ひゐ堂宇頽破ゐ及び多地藏も閻魔の木像も甘木甲寺ゐ遷さまて這里ゐ移るべ多りしとぞ又鬼四郎が赤牛ハ強盗夫婦を突殺しる大功あるゆゑ鬼四郎が妻と児子ハいくまもく鍾愛せしを亡者の一周忌ゐいで菩提の輿ゐとく香華院ゐ奉けり。是より七那牛ハ耕作車力の艱苦もわづ数歳寺ゐ奉まく選佛場ゐて終ゆりとぞ是等ハ後のる多を約めて共ゐ寫ゐ休題再説明るべ正月廿一日這朝五十子の城内ゐ竜山兎太夫縁連初の姓名ハ。が相模多北條家へ密議の使節を奉りて未明より首途ゐ縁連ゐ日の打扮ハ萠葱威の身甲ゐ磨着の腕甲襦肩ゐ上

衣ゐ黒蛇皮絹の小袖ゐ搭乾の衣二たり襲被て黄羅紗の陣羽織ゐ純子の野袴を穿領ゐ黄金表裝の両刀を擐脩ゐ跨き桃花馬の太逞沉ゐ雲珠鞍置てゐ乗る左右ゐ従ふ四個の若黨雑兵奴隷三十餘名前ゐ立後ゐ跟ゐ錦柳笞長柄の傘鎧櫃杖雨衣ゐと次第を乱ゐ隨従ゐ次ゐ副使竜門既濟越杉一岑鰐崎猛虎仁田山晋五ゐ至る悉ゐ少からぬ打扮ゐ各々馬を拍せる這伴當ゐ許ゐ弐ゐて小荷駝を牽ゐ長櫃を舁ゐ遥後方ゐ従ふて一町有餘陸續ゐ既ゐく縁連們ハ捎品草とゐ過く朝日初て日升る比鈴森の波打際を運迯と七徐行く程ゐ前面の茂林の樹蔭ゐ顯ゐ出る一個の壯士是則別人ゐ多ゐ大阪毛野胤智ゐ胤智這日の打扮ハ白布の四天の下ゐ細鎌の網衣を被て車垂早の立舉の膈肩ゐ白布の顱巾七髪を後ゐ振分ゐ一二尺八寸の白大刀ゐ匕首を帯副て小銃を引提ゐ去向の方ゐ立塞りて天地ゐ鄭音ゐ声高ゐ呼ゐ竜山兎太夫本姓ハ笠竜山氏逸東太縁連且く駐ゐ往る寛正六年の冬十月杉門の里の這方ゐて汝ゐ為ゐ殺れる栗飯原首胤度ゐ

文溪堂藏

○文溪堂藏

遺腹の第二の男子大阪毛野胤智なれわり。俱に天を戴ざる死怨の銃丸受て目見えと名のり。たゝ石わり。とうるか。ありけり。ひふさ。きり。ざくさを交て揑と放せば寃錯ぜ縁連の馬の胸骨撃ち摧き。馬ハ屏風を倒ぜ如く矢庭に撲地と轉輾べば。主の怵ぜ鐙を外て俱に地上に倒れ。毛野ハ得ぢと。鐵炮投棄大刀を真額に技聳て飛ぶ似く走掛れば。縁連が四個の若黨迭に主を撃ぜとて推隔技連て防戦ふ刃の電光朝日に映じ眼を射ども勇る毛野ハ物ともせず。人ゑ境に入る如く。當ふ儘て砕倒ぜ。二人い首を撃落ぜ。殘る深痍に堪ずけん。跌輾びて息絶けり。有恁一程に縁連ハ稍身を起て四下と見るに。鎗奴が棄て逃るその身の短鎗わりけを。掠含りつ挾て足場を撰りて田圃のミ一町ばかり退くを。毛野ハ。なほも追ん。とせ縁連逃るとて。何首を脱ぜや。蓬一返せと呼掛ゝ。蓬地に趕ぢ。這回ハ長ゝ。ゑれど毎卷紙數に定限われば。縁連が末期の光景。并に大山道節が復讐ぜ。寫かり。是より下の話説ハ又編を接ぐ。卷を重ね。第九輯の開ぬに解分るを聽ぬかし。

因に云大村大角の名ハ礼儀ぜ。第六輯に見えぬ。然るを第七輯に礼度に作り。古人字訓の誤ぜ。則清を憲清儀清に作り。時致を時宗に作り。成氏を重氏に作りぬる例もあれば深く咎ふ足らぬとせども。実ハ暗記の失ぜ。本輯に改正ぜ又礼儀に作りぬ。抑第七輯上下二帙ハ刊行の書肆先例に背く。作者の校訂を受ぜ製本發行せ。ぬ。ぬ。ぬ。就中誤寫ぜ。又只七輯のみ。毎輯書肆に發販を急ぐ。校訂夜を日に接ぐ。ぬ。見選ぬる誤寫衍脱ぜ。を沼ぐ。ぬ。其眼の君子正。又云信乃莊介道節現八小文吾大角毛野這七大士の列傳ハ既に其の趣を盡ぬ。獨大江親兵衛のみ。ぬ。その義男を創ぜ。ぬ。由。ぬ。第四輯ハ出世の時四歳の童ぜ。第九輯ハ大江の為に立ぬ。腐色斷ぜ。又七列ハ女。貞略。沼蘭。妙真。音音。豆節。雛衣。伏姫。と共ハ。の皆薄命ぜ。縁由及八犬士の身の痣の形壯丹花に似ぬ。第九輯に至て分解せん。全書の圓圓近に。ぬ。看官結局の日を俟ぬ。

里口八犬傳第八輯卷之八下套 終

○作堂手集南總里見八犬傳第八輯下帙画者筆工刷人目次

出像畫工　柳川重信

谷金川
墨田仙橋
淺倉伊八
横田守
櫻木藤吉
原喜知
田中二八

做書　五六七八上
五附録八下
第五卷　墨
第六卷　淺
第七卷　横
第八卷上　櫻
第八卷下　原

剞劂　第七卷　櫻
第八卷上　原
第八卷下　田

開卷驚奇俠客傳第二集　物ものがたりよく佳境に入るところ新奇限りなるべし本集五冊當癸巳春より賣出し

紀行　第三集　第二集出板後引つゞき發行遲滞なし本集九冊　共に精刊美本製本

近世説美少年録第四輯　俠客傳二集三集出板の時引ぬき發行遠からざるべし　本輯五冊嗣出

松浦佐用媛石魂録　前編三冊後編七冊共に全十卷後編近ころ續刻なるべし置かゝ也

美濃舊衣八丈綺談　戯曲のわざとなるか駒才三ぐるを奇妙なる作りまうけなる因果物がたり　全五冊

南總里見八犬傳第九輯　本輯は一部全璧となるべしとの接續刊行近きにあり　卷數未詳

本房刊行する所　曲亭翁新著美少年録俠客傳并に八犬傳第八輯共に良工を撰まして雕鏤を周密なるべしとの然るにても或は筆工或は雕刻の誤りなる諸の知意なるものあり精細を知らず遺憾なるべし

既に上の目録にも見えたる七輯已上の動もすれば遲滞なるべしとの不審を伏て稟せ賜顧の君子美人の懲て齟齬を吹毛なるべしとぞ　江戸書林　文溪堂敬白

○家傳神女湯　婦人たちの諸病の妙薬　一包代百銅

○精制衣奇應丸　大包代金壱朱　中包代一匁五ト　小包代五ト

○熊膽黒丸子　一包代五ト

○婦人つゞけの妙薬　一包代百文

製薬本家神田明神下同朋町東横町　滝澤氏
弘所　元飯田町中坂下南側よもの向　左沢氏

○古今名類忠孝ろの仙女香　一ぱくに四十八文　黒油美玄香　一ぱくに四十八文　江戸京橋南二丁目東側角　坂本氏

天保四年癸巳春正月吉日發行

書行　江戸　大坂　心齋橋筋博勞町　河内屋長兵衛
同所　同町　河内屋茂兵衛
本所松阪町二丁目　平林庄五郎
傳馬町二丁目　丁子屋平兵衛板

大千歳千代春
東